

597-47



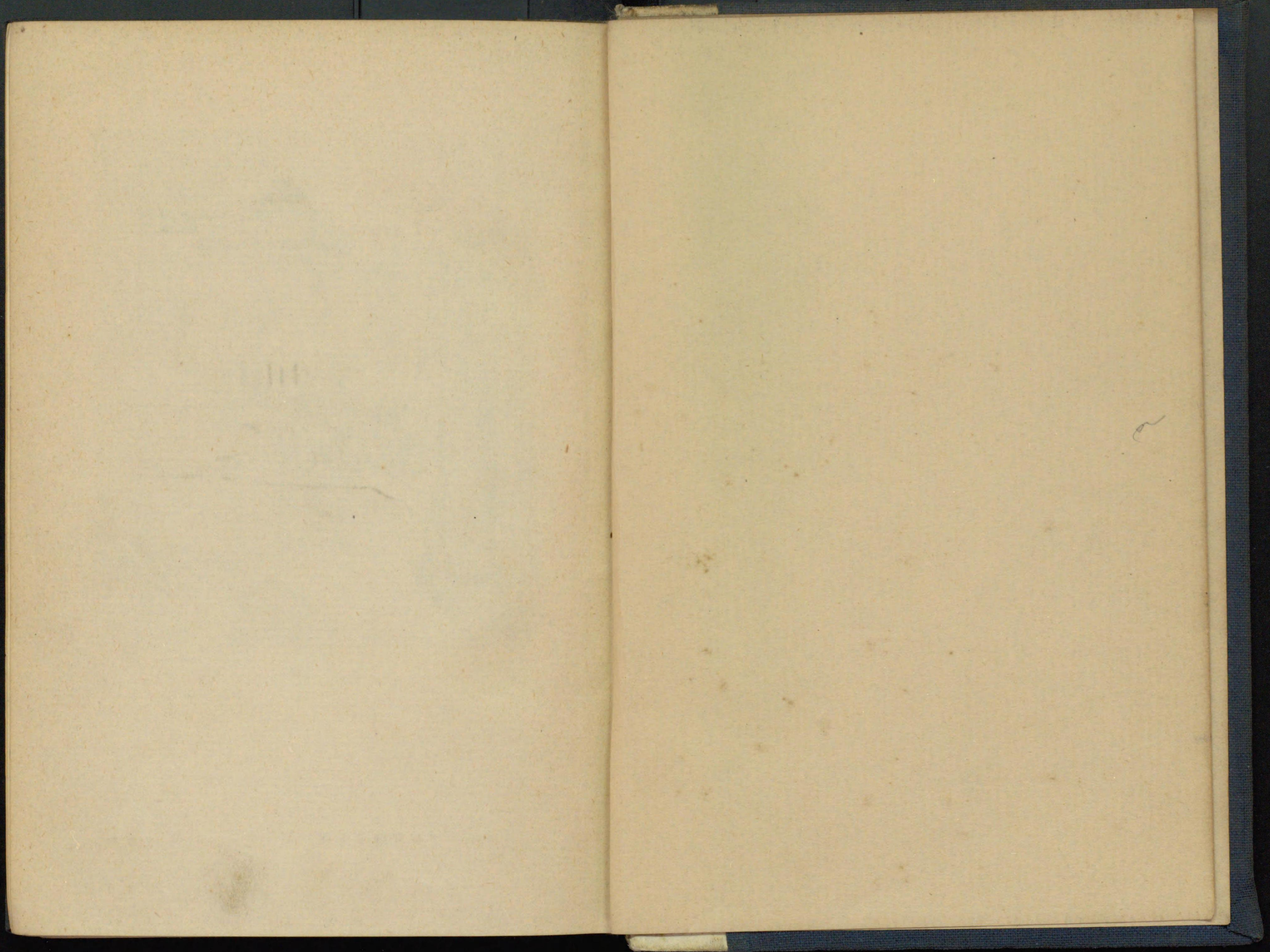
1200501528257

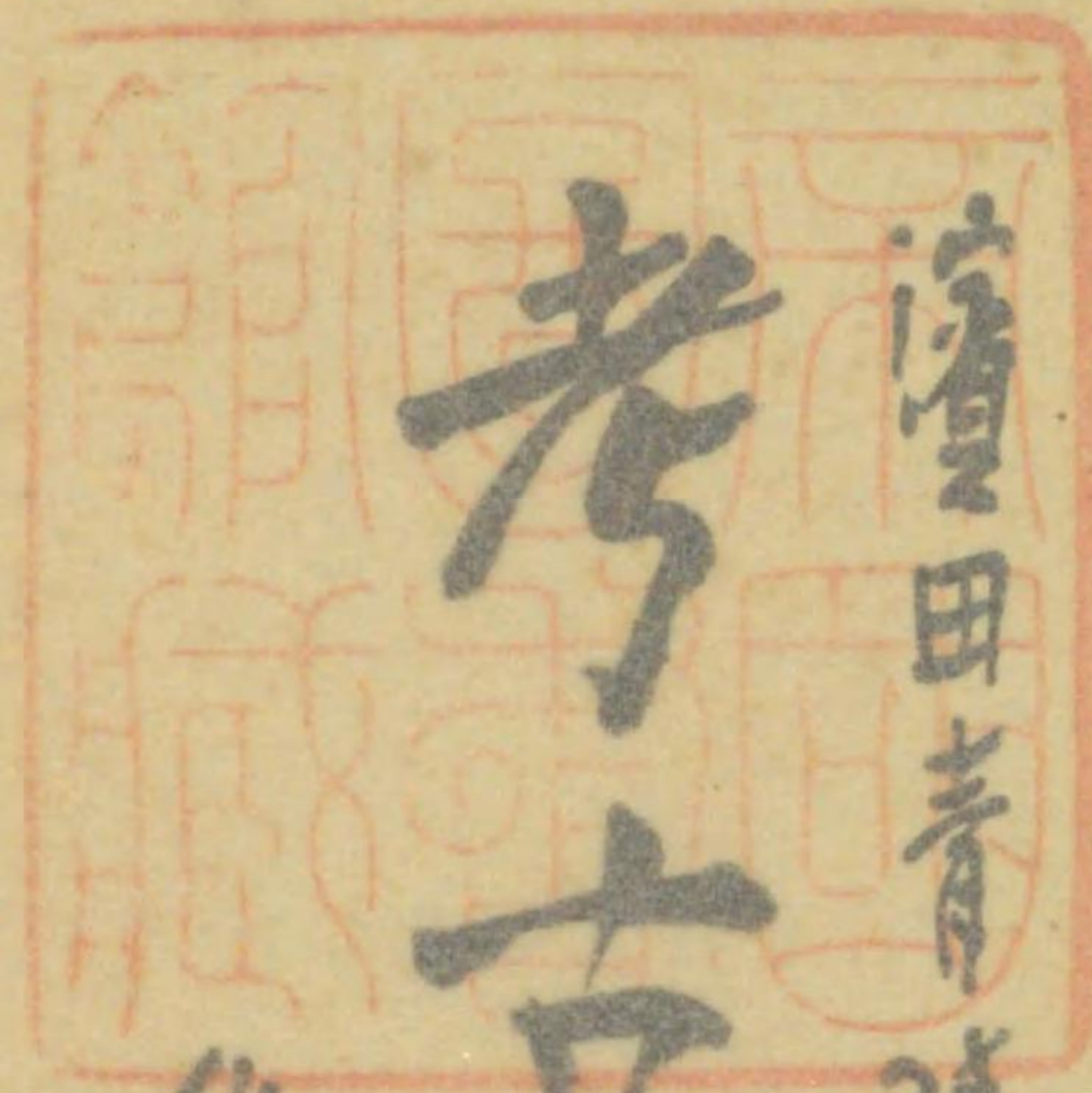
597

47

口
複
写

306

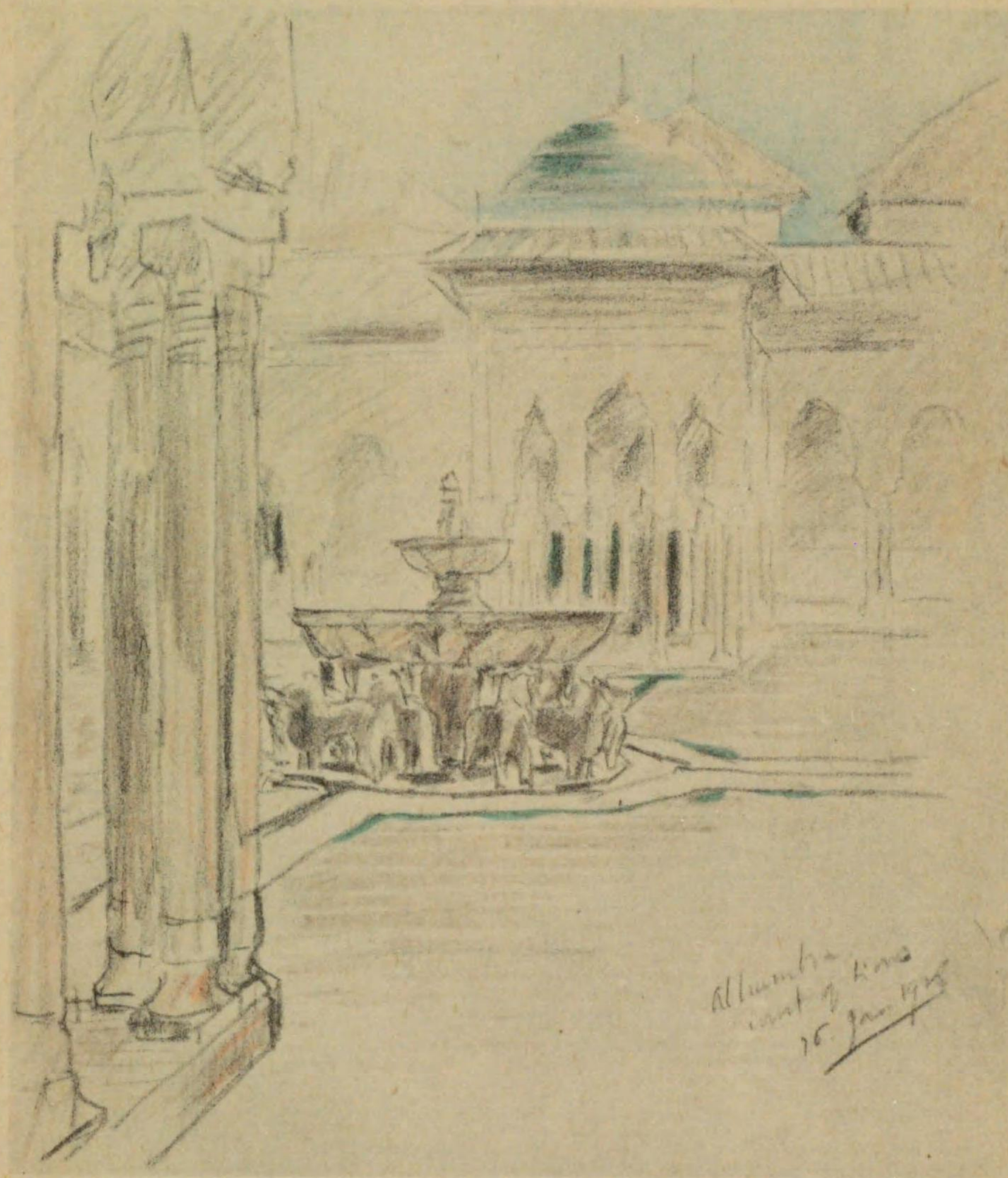




濱田青陵

考古遊記

於中道一人有題



Alhambra
court of lions
16 Jan 1925

アルハムブラ宮獅子泉庭

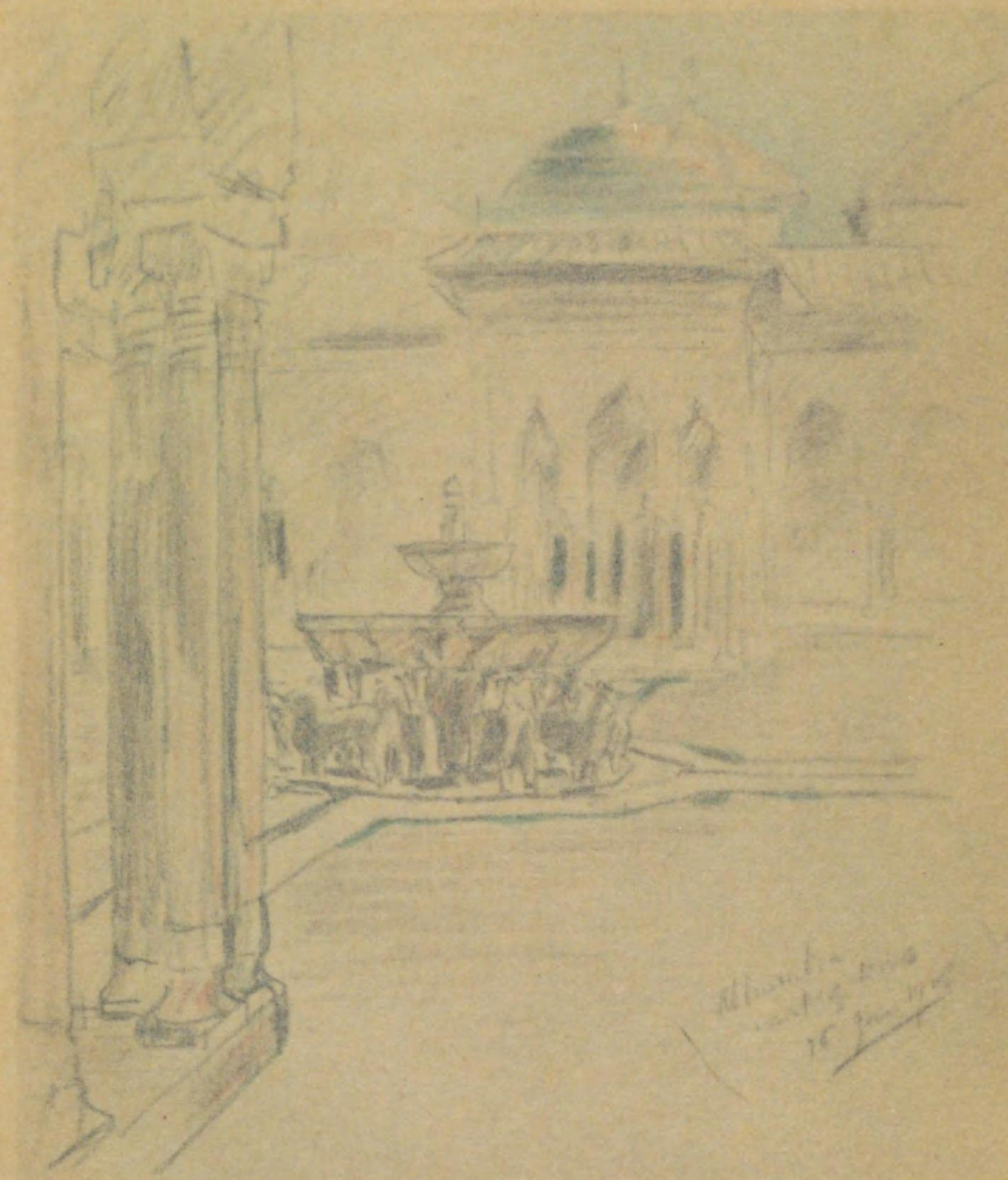
(青 設 畫)



濱田青陵

考古遊記

於中道一人相照



Alhambra
16 June 1909

アルハムブラ宮獅子泉庭

(四三)

序

私はいろいろ専門の論文を雑誌などに書いても、多くは後から之を二度と読み返す勇氣がない。已に印刷中にさへ往々修正増補を要する點を發見する位であるから、年を経て閲讀すれば、たゞ其の缺點のみ目に附いて、寧ろ不愉快を覺ゆるのみである。それはさう云ふ論文を書いたのは、實は研究の成果でなくて、研究の端緒であつたことを、つくづくと感ずるからである。之に反して旅行記や感想を書き散した隨筆の類は、其の文章の拙いのを別として、年を閱すれば閱する程、讀み返して見ると、當時の印象まさしくと蘇り、感興新なるを感ずることが多い。これは我々が日常生活や旅行の際に受けた感想、經驗した事件、人情の發露は、それがいかに些細なものであつても、自身は固より、亦た世界の他の人々に於いても、同一のことを再び經驗することがない、最も貴重なる人生の記録たる性質を有するからである。

斯様な理屈はとにかく、數年前『百濟觀音』に出した以後、私が『佛教美術』『大阪朝日新聞』『文藝春秋』『中外日報』『太陽』『中央公論』などに掲げた拙ない雑文のうち、旅行記の類に屬するものを聚録して、一書を成したのが、即ち此の小著である。書名は『考古游記』と題するけれども、中には考古のことゝは關係のないものもあり、時には紀行文とは稍々違つた性質のものもないではない。

又た各新聞雑誌によつて、各文字句讀法を殊にした印刷に據つたものもあるけれども、今之を一冊に集める際、統一することが出来なかつた爲め、頗る亂雜に陥つた嫌がある。これ等の點は一に讀者の寛容を乞ふ次第である。

最後に私は友人太田喜二郎畫伯が、私と同行の旅の際に作られた「スケッチ」の類を複製して、本書を飾ることを快諾せられた厚情と、會津八一君が『百濟觀音』の時と同じく、題簽の揮毫を惠まれた芳志と、梅原末治君が私と同伴旅行の時などに寫された寫眞を、多數に供給せられた厚意とに向つて、心からの感謝を表し、此等によつて本書が不相應の光彩を放つに至つたことを光榮とせざるを得ない。

昭和四年四月下浣

濱田青陵

目次

雲岡から明陵へ

- 一 はしがき……………一
- 二 北京から大同まで……………三
- 三 大同の東華樓……………六
- 四 雲岡石窟寺(上)……………一二
- 五 雲岡石窟寺(下)……………一六
- 六 雲岡から青龍橋へ……………二二
- 七 萬里の長城と居庸關……………二三
- 八 明の十三陵……………二七

瑞鳳餘影

- 一 京都博物館……………三三
- 二 奈良と正倉院……………三五

三	西の京と法隆寺、中宮寺	四〇
四	住友男の支那古銅器	四三
五	瀬戸内海と嚴島	四八
六	豊後の石佛	五一
慶州の瑞鳳塚		
一	發掘の由來	五四
二	最初の瞥見	五五
三	鳳飾の金冠	五八
四	鏤斗と琉璃坏	六〇
五	瑞鳳塚に「フエヤウエル」	六二
六	佛國寺旅館の御別宴	六三
立たれた後		
一	別離	六六
二	羅曲	六七

三	鹿の子	六九
四	佛國寺旅館	七一
五	歸り路	七四
考古學者としての瑞典皇太子殿下		
	虎子	八五
	「果して」又「意外」	九四
北歐の旅		
一	丁抹へ入る	九九
二	トルワルゼン記念館	一〇〇
三	ナイ・カールスベルグ彫刻館	一〇二
四	國立博物館	一〇四
五	美術館とフレデリック寺	一〇六
六	瑞典の國都へ	一〇九

七 王宮のお客……………一四〇

八 アンダーソン博士の聚集品……………一三三

九 「ロイヤル・オペラ」の見物……………一六六

一〇 宮中の御生活……………一七

一一 李王殿下の御來著……………一三〇

一二 博物館通ひ……………一三三

一三 ウプサラ大學の一日……………一三六

一四 北方博物館とスカンセン……………一三〇

一五 博物學博物館……………一三三

一六 ストックホルムの別れ……………一三五

一七 オスロの一日、ヴァイキングの古船……………一三七

西佛とこころぐ

一 ノルマンチーの一角……………一四一

二 バユーの伽藍……………一四三

三 バユーの刺繡……………一四四

四 モン・サン・ミシエールの孤島……………一四七

五 僧院と會堂址……………一四八

六 アウレーまで……………一五〇

七 カルナツクの巨石記念物(上)……………一五三

八 カルナツクの巨石記念物(下)……………一五四

九 アウレーからエヂエーへ……………一五六

一〇 舊石器時代の洞窟……………一五九

一一 鍾乳洞からボルドウへ……………一六二

西班牙の旅

一 西班牙に入る……………一六五

二 マドリール府、プラド畫廊……………一六七

三 西班牙料理、考古博物館……………一六九

四 セゴヴィヤの羅馬古橋……………一七二

五 トレドの舊都(上) 一七五

六 トレドの舊都(下) 一七八

七 アルハムブラの故宮 一八一

八 グラナダの市、ジブシーの村 一八四

九 セヴィーヤの伽藍と古城 一八七

一〇 『セヴィーヤの理髪師』 一九〇

一一 コルドバの伽藍 一九四

一二 アルタミラ行 一九六

一三 洞穴繪畫、サンチラーナの村 一九九

一四 マドリーの武器博物館、西班牙を去る 二〇三

第一印象 二〇七

美人畫廊 二一九

挿畫目次

一 アルハムブラ宮獅子泉庭(青陵畫) 卷首

二 雲崗石佛寺門前(太田喜二郎君畫) 二

三 雲崗石窟寺西方大露佛(青陵寫眞) 一〇

四 雲崗大佛遠望と雲崗村落所見(青陵畫) 一〇

五 八達嶺に於ける萬里長城 一〇

六 八達嶺附近長城墩門(青陵寫眞) 一〇

七 彈琴峽途上(太田喜二郎君畫) 一六

八 居庸關門(青陵畫) 一六

九 明十三陵大紅門(青陵寫眞) 三〇

一〇 明十三陵思陵附近の「エピソード」(太田喜二郎君畫) 三〇

- 二 京都帝國大學御訪問の瑞典皇儲同妃兩殿下御一行(鈴木增次郎君寫真)……………三
- 三 瑞典皇太子殿下御滯留中の大宮御所と法隆寺に於ける同殿下……………四〇
- 三 軍艦木曾と太秦の千石船……………四六
- 四 慶州佛國寺(太田喜二郎君畫)……………四四
- 五 慶州瑞鳳塚の發掘御觀覽の瑞典皇儲殿下(澤俊一君寫真)……………四八
- 六 瑞鳳塚發見遺物配列光景(同上)……………五三
- 七 瑞鳳塚發見の黄金寶冠、鏃斗及玻璃杯(同上)……………五三
- 八 慶州妓生成南紅嬢(梅原末治君寫真)……………六六
- 九 瑞典皇太子グスタフ・アドルフ及同妃ルイズ兩殿下(恩賜寫真)……………六六
- 一〇 希臘アジーネ遺跡と瑞典皇太子殿下の御發掘……………八〇
- 二 慶州皇南里發見彫畫土器と支那漢代及近世の虎子……………九〇
- 三 コーペンハーゲン府彫刻館と其の中庭……………一〇〇
- 三 トルワルゼン作「朝」と「夕」の浮彫圓板……………一〇四
- 四 トルワルゼン博物館と其の内庭……………一〇四

- 五 ストックホルム府王宮全景……………一一〇
- 三 ストックホルム府王宮窓外所見(青陵畫)……………一一四
- 七 アンダーソン博士と甘肅發見彩色土器及同土器副葬古墓(梅原君寫真)……………一二六
- 六 ストックホルム府ノルプロの橋(青陵畫)……………一二〇
- 六 ストックホルム府王宮著者滯宿の部屋(同上)……………一一〇
- 〇 ストックホルム府市會堂とドロチングホルム離宮……………一二四
- 三 ストックホルム府北方博物館と博物學博物館(同上)……………一二四
- 三 ストックホルム府スカンセン野外博物館……………一二四
- 三 ウプサラ伽藍と同ワサ王陵……………一二八
- 四 ウプサラ大學とガムラ・ウプサラの古墳……………一二八
- 三 「銀文聖書」とツンベルグ(佛譯ツンベルグ日本旅行記屢繪)……………一三三
- 三 ストックホルム府大觀……………一三六
- 七 オスロ府のヴァイキング古船(ゴクスタット及オーゼベルグ發見)……………一三六
- 六 バユーの古刺繡……………一四四

三九 モン・サン・ミシエール島と會堂址門(梅原君寫眞)……………二四八

四〇 カルナツク巨石記念物ケルマリオの列石(古版畫及梅原君寫眞)……………二五四

四一 カルナツク巨石記念物「グラン・メニール」とロクマリアケーの「ドルメン」……………二五四

四二 ドルドンヌ州ヴェゼールの溪谷(クリスチー著書挿畫)……………二五八

四三 フオン・ド・ゴーム洞穴入口及内部(梅原君寫眞等)……………二六二

四四 フオン・ド・ゴーム洞とカムバレーユ洞の繪畫彫畫……………二六二

四五 ゴヤ筆マハ夫人像とプラド畫廊(梅原君寫眞等)……………二六八

四六 ヴエラスケス筆イソボと萬治版伊曾保物語挿畫……………二六八

四七 セゴヴィヤ羅馬古橋(青陵畫)……………二七二

四八 セゴヴィヤ羅馬古橋……………二七二

四九 セゴヴィヤ全景と伽藍遠望……………二七二

五〇 トレド全景(ベンネル氏畫)及アルカザル古圖……………二七六

五一 トレドのクリスト・デ・ラ・ヴェガの基督像とグレコの家……………二七六

五二 トレドの聖マルチン古橋とアルカンタラ橋(ベンネル氏畫)……………二八〇

五三 トレドの伽藍を聖イサベラ通より望む……………二八〇

五四 トレド伽藍獅子門……………二八〇

五五 アルハムブラ宮アルベルカ泉庭とジプシーの女(梅原君寫眞)……………二八六

五六 アルハムブラ宮フスチ、ヤ門と公園の小兒(梅原君及青陵寫眞)……………二八六

五七 グラナダ市大觀とベナドール塔(青陵寫眞等)……………二八六

五八 セヴィーヤのヂラルダ塔と大鐘(梅原君寫眞)……………二九〇

五九 セヴィーヤのアルカザル宮使節の間……………二九〇

六〇 セヴィーヤの伽藍遠望と支倉常長肖像(古版畫)……………二九〇

六一 コルドーバ伽藍内部……………二九四

六二 コルドーバ古橋と市中小路(青陵寫眞等)……………二九四

六三 アルタミラ洞穴附近及番人小屋と洞穴發見者サンツオラ翁肖像(梅原君寫眞等)……………二〇〇

六四 アルタミラ洞穴繪畫とサンツオラ寫生圖(アルイ師著書挿圖等)……………二〇〇

六五 サンチラーナ村コレグラータ寺會堂「キオストロ」と第十五世紀古家屋……………二〇〇

六六 マドリー王宮武器博物館藏日本使節獻上甲冑とガルチエリ日本使節記……………二〇四

考古游記

考古游記

容 女優マリヤ・ゲレロ肖像と武器博物館の犬の甲冑……………二〇四

六 ヨセミテ溪谷グレシア・ポイント(青陵寫真等)……………二一〇

宛 ヨセミテ巨木林に於ける著者一行……………二二六

吉 ミュンヘン王宮美人畫廊美人畫とルドウイヒ王畫像……………二三三

地圖 北歐要地圖及西佛西班牙要地圖……………卷末

考古游記

容 女優マリヤ・ゲレロ肖像と武器博物館の犬の甲冑……………二〇四

六 ヨセミテ溪谷グレシア・ポイント(青陵写真等)……………二一〇

七 ヨセミテ巨木林に於ける著者一行……………二二六

吉 ミュンヘン王宮美人畫廊美人畫とルドウイヒ王畫像……………二三三

地圖 北歐要地圖及西佛西班牙要地圖……………卷末

雲岡から明陵へ

一 はしがき

近頃世に八釜しく評判の山西雲岡の石窟寺が、北魏美術の大記念物であることは、明治三十五年六月伊東忠太博士の北清旅行によつて、始て明かにせられた所である。其後大同へは鐵道が開通して、北京から一日を費せば行くことが出来る様になり、多くの學者美術家が踵を接して出かけることになつたが、伊東博士が未だ汽車の無い時分に、北京から大同まで十餘日を費し、而かも雲岡には全く宿泊の便が無かつた爲め、大同から馬を走らして一日で往復せられたと云ふ話を聞く時は、我々は博士が忙しい旅中に於ける其の貴い觀察に絶大の敬意と感謝を拂ひ、今日我々がシヤヴァンヌの圖譜を始め、日本の寫眞師の手に成つた豊富なる寫眞を手にすることを得るに至つた歴史を、回顧するを禁じ得ないものがある。

伊東博士は雲岡の石窟寺に關して、早くも明治三十五年九月の「建築雜誌」第百八十九號に、北清建築調査報告と題して、其の大要を發表せられたが、其後世界歴遊から歸朝せられた同三十九年頃、

私は當時國華社の編輯に携つて居たので、早速先生に請ふて雲崗石窟寺の更に詳細なる論説を、國華誌上に掲載するの幸福を得たことである。(國華第百九十七、八號) それ以來私は雲崗石窟寺に對して特殊の親しみと憧憬とを感ずるに至つた。

私は明治四十四年九月、狩野、内藤、小川、富岡諸先輩に侍して、墩煌發見の古經を北京へ調査に行つた際、小川博士に從つて河南の洛陽まで忙しい旅を試み、龍門の石窟寺を一見する機會を得たことは、實に私に取つて支那古美術品の最初の「レヴエーション」であつて、其の喜びは、筆舌に盡し難いものがあつたが、之と同時に雲崗へは時日が無い爲め、一遊を試みることを得なかつたのを、限り無い恨事としたのである。

然るに昨大正十四年九月、私は突如として北京へ旅行すべき命を受けた。而して私は此の世界に於ける最も驚嘆すべき大都會の一たる北京の内外に在る幾多の名勝を、或は新に或は再び訪問することを得たのみならず、二十餘年來夢寐にも忘れることの無かつた雲崗の石窟寺へ、たゞ一日の遊ではあるが、之を果すことを得たのは、洵に何たる喜びであらうか。私は伊東博士以來殊に近年先輩友人諸學者の豊富なる時間を費して、精細に研究鑑賞せられた雲崗に向つて、始めから何等新しい研究を試みる意志は無く、たゞ此の東亞美術史の大殿堂へ小やかなる巡禮を試み、親しく其の大記念物の印象を齎し歸へることを得ば、無限の幸福としたのである。

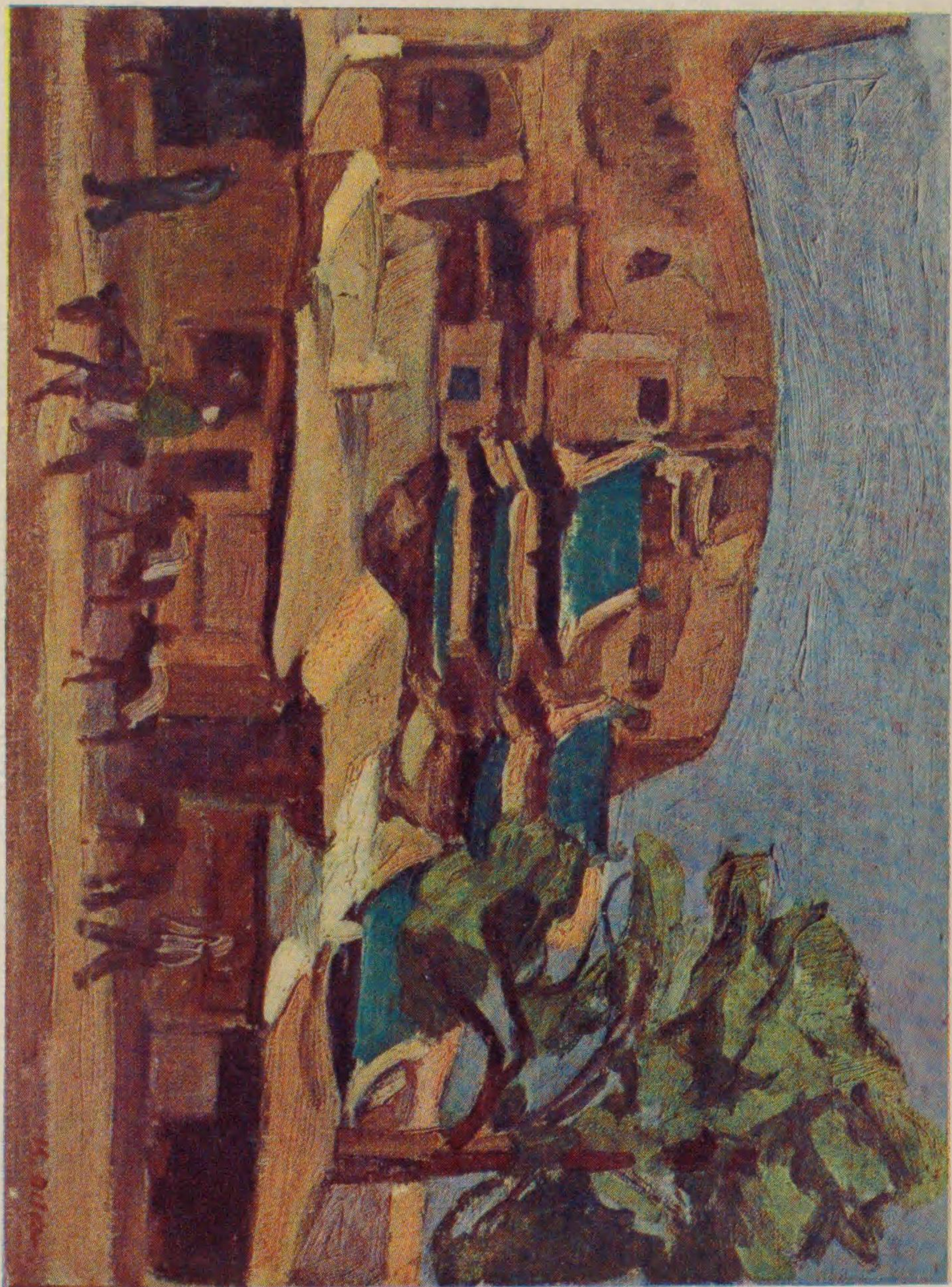


雲崗石窟寺門前

私は當時國華社の編輯に携つて居たので、早速先生に請ふて雲崗石窟寺の更に詳細なる論説を、國華誌上に掲載するの幸福を得たことである。(國華第百九十七、八號) それ以來私は雲崗石窟寺に對して特殊の親しみと憧憬とを感ずるに至つた。

私は明治四十四年九月、狩野、内藤、小川、富岡諸先輩に侍して、敦煌發見の古經を北京へ調査に行つた際、小川博士に従つて河南の洛陽まで忙しい旅を試み、龍門の石窟寺を一見する機會を得たことは、實に私に取つて支那古美術品の最初の「レヴェレーション」であつて、其の喜びは、筆舌に盡し難いものがあつたが、之と同時に雲崗へは時日が無い爲め、一遊を試みることを得なかつたのを、限り無い恨事としたのである。

然るに昨大正十四年九月、私は突如として北京へ旅行すべき命を受けた。而して私は此の世界に於ける最も驚嘆すべき大都會の一たる北京の内外に在る幾多の名勝を、或は新に或は再び訪問することを得たのみならず、二十餘年來夢寐にも忘れることの無かつた雲崗の石窟寺へ、たゞ一日の遊ではあるが、之を果すことを得たのは、洵に何たる喜びであらうか。私は伊東博士以來殊に近年先輩友人諸學者の豊富なる時間を費して、精細に研究鑑賞せられた雲崗に向つて、始めから何等新しい研究を試みる意志は無く、たゞ此の東亞美術史の大殿堂へ小やかなる巡禮を試み、親しく其の大記念物の印象を齎し歸へることを得ば、無限の幸福としたのである。



雲崗石窟寺門前

(大田草二郎君畫)

二 北京から大同まで

北京に於ける私共の用向が一段落を告げて、数日の閑暇を得た時、私は直に雲崗旅行の日程を作成した。京綏鐵道が大同を通つて、其の先きの綏遠まで延長し、朝夕二回の直通列車は、食堂寢臺の車まで連結してある今日、山西の旅は伊東博士の時代とは全く雲泥の差があり、支那旅行中最も容易にして且つ安全なるものゝ一に違ひない。殊に當時の政治上軍事上の事情からしても、山西は閻督軍の下に最も秩序ある地方であつたのである。併しそれでも日本内地や朝鮮若しくは歐洲などの旅行とは稍々趣を殊にして、矢張り支那旅行の範疇を出でることの出来ないのは、一方に於いて我々の不便を感じる所であると共に、又た特殊の興味を失はしめない所以である。況んや雲崗の石佛寺で一泊をする我等の豫定は、之に對する食料品と寢具とを用意し、且つ贅澤ながら一人の「ボーイ」を隨行せしむる外はなかつた。「ボーイ」は幸にして三井洋行に久しく仕へて居つた張太山なる二十餘歳の支那人を雇入れることが出来た。彼は多少の日本語（自分のことを「手前」などと云ふ様な「ゾオカビユラリー」をも心得てゐる）を解するのみならず、必ずしも敏捷ではないが、其の堂堂たる風采と忠實なる行動は、私共に取つて何よりの心強さを與へた。

豫て同行の積りであつた小林胖生君が、突然の用事で私共の一行中に加はることが出来なかつた

のは頗る遺憾とする處であつたが、なほ我々の同勢は私と日本から同行二人の太田喜二郎畫伯、東京帝國大學の原田淑人君、上海埠頭事務所の滿鐵社員櫻木俊一君の外に、北京大學教授張鳳舉君を加へることを得たのは意外の喜びであつた。京都帝國大學出身の張君の日本語は殆ど第二の母國語であるのみならず、其の快活にして親切なる性格は、其の多方面なる趣味と共に、我々をして全然同國人として相互に感ぜしむるものがあり、此の山西の旅行が愉快なる記憶を以て始終し得たことは、全く張君の一行中に加はられた賜と言つて宜い。

九月二十八日、固より此頃の支那の天候は晴と改めて斷はるまでもないが、私共一行は朝七時二十四分西直門發の列車に搭する爲め、流石に何日にも早起をして、朝食もそこ／＼二臺の自動車に分乗して扶桑館を出發した。私は前夜少し感冒の氣味で、瀨川氏の招宴をも辭し、心中聊か今日の旅を氣遣つたが、嬉しい今日の首途に氣分は全く平常の通り、否なそれ以上に爽快となり、道すがら一臺の自動車は張君の寓に立寄つて同君を拉し、西直門外の車站を出發した時には、豫定の如く我々一行が此の旅路に就くことを得た幸福を互に祝し合つた。

右手に萬壽山、玉泉山の塔を遠望し、近く清華學校の建物を眺め、車はやがて南口の驛に停り、我々は「ブラットホーム」の傍で賣つてゐる美事な柿と葡萄とを仕入れることが出來た。列車が南口を發して稍々東行するので、我々は再び北京へ歸へる様に感じて頗る驚いたが、中にも櫻木君は驚

愕して、列車の「ボーイ」を捉へて之を聞き訊し、なほも腑に落ちぬ態度であつたのは、他人のみを笑ふことの出來ない我々の不安さであつた。併し汽車はやがて南口の關門に進み入り、絶壁の様な嶮隘の間をあえぎ／＼登つて行く。幾多の隧道を過ぎ遂に長城の一連が蛇の如く山頂から下つてゐるのを見て、我々は其の前途の誤らぬことを悟り得たのである。此の嶮路は中々箱根の山よりも峻しい様であるが、地形は矢張り大マカに出來てゐるから、隧道を出て橋梁、橋梁を過ぎて忽に隧道と云ふ様な急激な變化はない。而かも此の鐵路の工事は支那の技師のみで遂行したと云ふことは支那人の誇りとする處である。

南口から乗つて「グロッセ・マウエル」とか何とか叫んで居つた同室の獨逸人らしい家族連は、北京から乗り合はした西洋人達と共に、皆な長城見物の客と見えて青龍橋の驛で下車してしまつた後は、一等車は取外づして了ふので、我々は食堂車へ轉居する外はなかつた。八達嶺に輻輳する長城の城壁を車窓から仰ぎながら、歸路の楽しみを想像して、康莊の驛を過ぎると、我々は早や茫漠たる湖北の平野に入つたのである。宣化府を経て張家口、即ち蒙古名の「カルガン」に着くと、流石は馮玉祥の居城とて驛站は雑沓を極め、露西亞人が支那旅館の宿引となつてゐるものがあるのは、日本で羅紗賣りを見る眼にも目新しく感じた。一帯に黄色を帯びた荒涼たる市街の、さて何處の邊が馮氏の本陣であらうか、知る由もない。

張家口を發したのは午後二時過ぎであつたが、鐵路はやがて渾河に沿ふて西南に向ひ、右手には遠く蒙古境の陰山々脈の峯々が聳えてゐる。車窓から沿道の景色を眺めると、凡てこれ木のない黄褐色のノロノロした丘陵と臺地。其の間に淋しげに黄落しかゝつた楊柳の様な樹が處々に立つてゐる外には、稀に淺黄色の支那人が道を迷つてゐるかの如く動いてゐるのと、黒い豚の子が列車に驚いて駆け廻つてゐるのが、此の大天地の點景である。天鎮、陽高などの城壁を繞らした都會も、殆ど人影を絶して、宛がら死に果てた市の如く、南口邊から我々の卓子の前に居つた支那の女學生——林檎を皮ぐるみ嚙つたのを記憶してゐる——も何時の間にか下車してしまつた後は、寂漠たる車中に話し疲れた我々が、唯だ黙々として坐つてゐるのみである。窓外は日既に西山に没して殘輝血の如く大空を染め、凄愴たる北地の夕暮の景色は、漫ろに我等の旅愁をそゝるものがある。實に旅の淋しさは暗夜に非ずして夕暮にある。此の瞬間誰人も純眞の善人に立ち返へらざるものはあるまい。車中の小暗い「ラムプ」の光が閃き初め、汽笛長鳴して我々の到頭大同府へ着いたことを知つたのは午後六時頃であつた。

三 大同の東華棧

大同車站から人力車を並べて、デコボコの野道を城壁に近い宿屋東華棧に急ぐ。可成大きな構へ

の此の旅館も、其の門前は道路薬研の如く掘り窪まつて、車を門前に寄せることは出来ず、電燈は點いてゐるが光力が足りないので霞がかゝつた様に薄暗い。張君や「ボーイ」が入口の帳場で談判した結果を聞くと、一番上等な部屋には亞米利加人が數日前から二人滞留して塞がつて居るので、我々一行を悉く佳い客室に收容することは出来ない。併し今晚限りの事であるから、一つは主人の部屋を提供して間に合はすとの事に安神したが、扱て亞米利加人は誰か。或は彼の「スミソニアン・インスティテュート」のビショップ君が、此の邊を歩いてゐると聞いてゐたから、それではあるまいかと尋ねると、ビショップ君が確かに其の一人であると云ふので、同君ならば曾てセイス先生が日本へ再遊せられた時同伴して京都へ来たことがあり、私の熟知の人である。そこで其の部屋の前から内を窺つて見ると、果して其のビショップ君であるので、私は内へ入つて同君を驚かし、此の大同で同じ旅館に相會するの奇遇を喜び合つた。今一人の米人はウエンレー君で、其後ちビショップ君と共に支那へ行く途次大學へ来たことのある人である。此の兩君は北京學部の歴史博物館長某君と共に大同へ來り、已に雲崗の調査を済まし、目下は大同附近の古墳などの研究に従事してゐるとの事。而も北京大學と歴史博物館とは必しも其の間が善い譯ではないのに、張君は某君と鉢合せをする。又た私共は米國學者と敢て相反目すると云ふのではないが、全く競争的態度を免れることは出来ない。それが圖らず此處に落ち合つたのは聊か皮肉であるけれども、互に其の奇遇を喜ぶ念は、是が

爲めに必しも減ずることは無かつた。

我々一行は先づ主人の部屋に集つて食事を取ることにした。尤も汽車の食堂で中食を済まし、北京から携帯の辨當は夕方車中で使つたのであるが、「ボーイ」の手に成る暖い饅頭で、空腹と寒さを一層醫することが出来たのは嬉しかつた。此の主人の部屋は前房の左方低い牆壁の外にあつて、三四疊敷の狭い室ではあるが、キレイな篋筒を一隅に置き、油團の様なものを敷き、壁間には家族などの寫眞が額にして掛けてあるのを見ると、其の中には前年今西博士や岩井武俊君などが此處へ來られた時、宿の人々と一同寫された集合寫眞のあるのも懐かしい。其の外主人夫妻や息子夫婦の寫眞もあるが、此等は岩井君が寫してやつたものであることを日本へ歸つてから聞いた。兎に角雲崗見物の外國人は、皆な此の東華棧へ陣取るのであり、雲崗見物の外國人中其の大部分は日本人であるとの事故、我々の先輩友人も皆な此處に厄介になつたのである。かの木下、木村兩氏の「大同石佛寺」を讀む人も、書中屢々此の東華棧の名に出會するであらう。

前房の一室が我々の爲めに用意が出来たので、一行五人は籤引きで三人と二人の組を作つた處、原田君と私は此の主人の部屋に残ることゝなつた。原田君は北京から携帯寢臺を借用して來られたので、之を組立て、十間に陣取られる。私は炕上に休むことゝなり、惡蟲除けの粉末を四方に振り撒くのは此の時と、盛んに之を散布すると、南京蟲には心配のない原田君が先づムセ返つて、ゴ

ホン／＼と咳をせられると云ふ始末に、是は失敬と薄い蒲團と毛布の間にムグリ込む。

昨夜は南京蟲に襲撃せられず、グツスリ朝七時頃まで寢込んだが、別室の連中は粉末を撒かなかつたに關らず、蟲は居なかつたとの事。それでは宿屋の男が此の蟲の「沒有」を主張したのも偽ではなかつたのである。又昨夜は少し曇り氣味で、今朝の天候を氣遣つたが、起きて見ると全く日本晴れ否な支那晴れの快晴で、日光が輝いてゐるのは何よりも嬉しかつた。部屋の前で顔を洗つてゐると、其の前を赤い袴をつけた女の子や、年寄りの女、若い嫁らしい人が、私共の隣室へ這入つて行く。是は主人の妻君の部屋であり、元來老夫婦と若夫婦とは別々の部屋に居るのだが、主人の部屋を私達に提供したので、昨夜は男は男、女は女と雜居をしたのらしい。

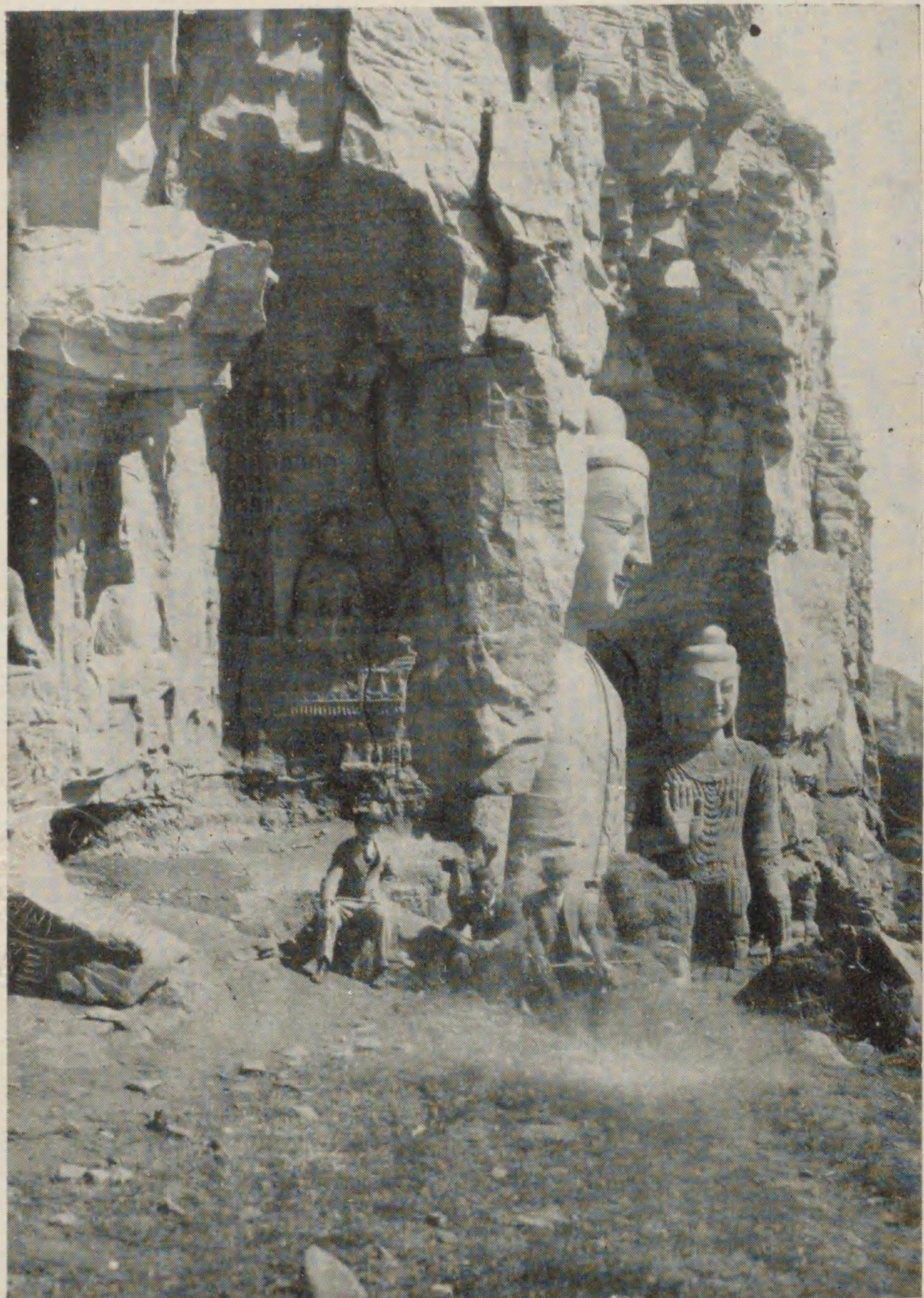
扱て今日の大岡から雲崗への乗物に就いては、昨夜随分議論が沸騰した結果、遂には櫻木大人と太田畫伯とは老人組として輜輿に召され、張、原田兩君と私とは驢が無いので馬「ボーイ」は輜輿と共に馬車と決したのであるが、食事を済まして門前へ出て見ると、既にビシヨップ、ウエンレー兩君の西洋鞍を置いた馬が待つてゐる。ビ君に別れを告げに行くと、寢室へ通して採集して來た土器の破片などを見せて呉れたが、大したものは無かつた。

輜輿の兩大人は各々「ミコシ」の様な中に腰をかけて鎮座しますと、總勢六人の輿丁が四人宛で之を昇ぐと云ふ大官振りには、私をして是では輿組になれば宜かつたのにと羨望の念を禁ぜざらし

めたが、九時過ぎ我々騎馬黨が一足遅れて出發する間に、輿はサツ／＼と速足で城門を這入つてしまつた。張君は流石我々三人中でも手綱の捌きも手馴れ、鞍上にユラリと收まり切りに馬を駆けさせ、城中に乗り入れたが、私は漸くそれに附いて馬を進めると云ふ有様。原田君に至つては振り返へり振り返つても姿を見せない。

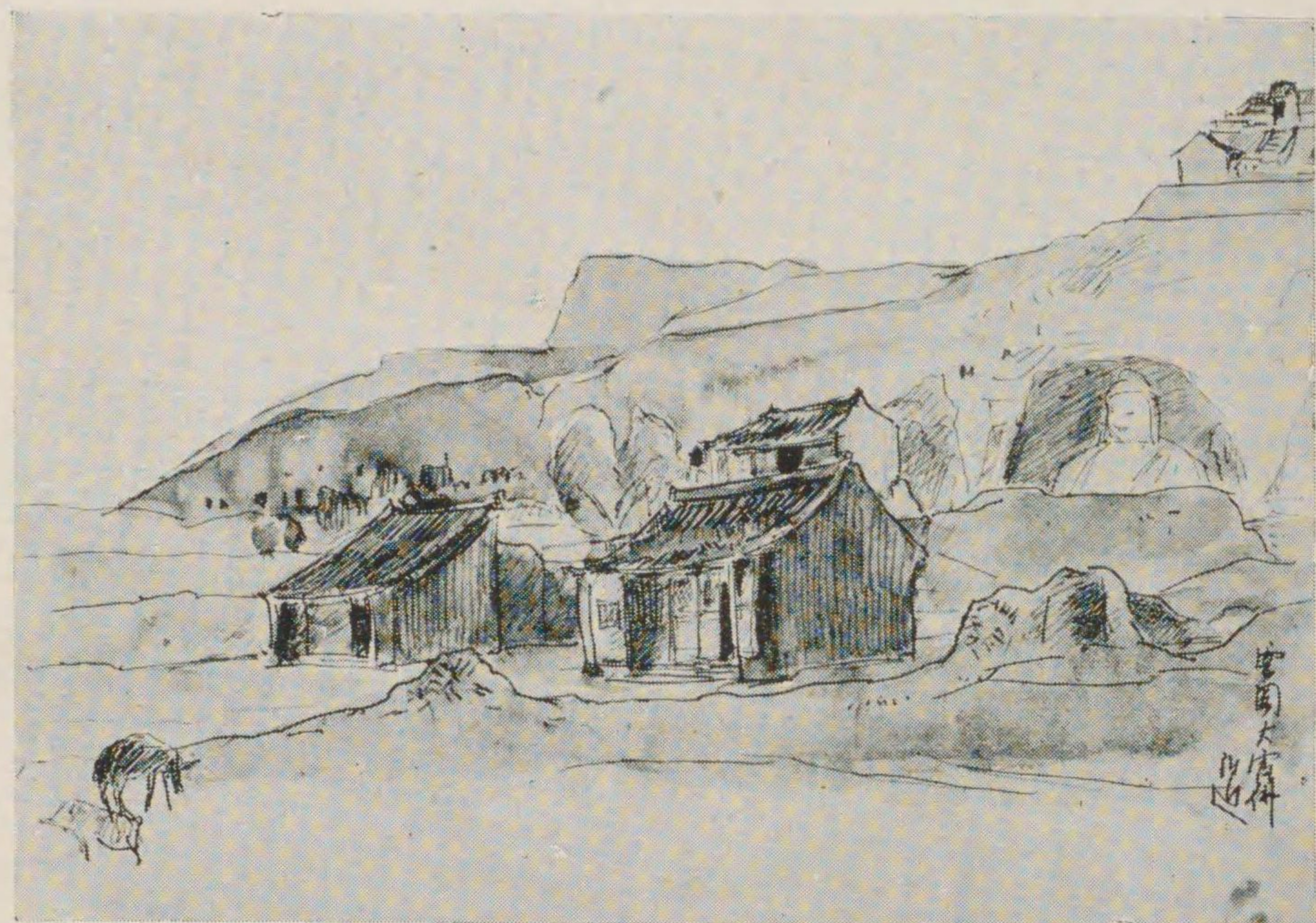
大同の城内は流石般賑な町並みで、割合に不潔でもない。兵士の一隊は我等と同じ方向から進んで来て、連りに我々をにらむで行く。その反對の方からは驢に乗つた蒙古人の男女の一隊、何れも悲愴な顔付をして赤や黄色の綿入れを着て、引越荷物よろしくの大荷物を持つてやつて来る奇觀は、私共をして馬を停めしめた。十字路から道を右手に取り、やがて大同の西門を出で、漸く茫漠たる野原へ出ると、道は河原の様な砂道で、遠く西の方には低い禿山が連つてゐる。小さい廟の様な建物のある前に一群の人が佇ずんでゐるのを近づいて見ると、是は太田櫻木兩君の輿組が休息してゐるのであつたが、本尊は腰をかけた儘で外へは出御ましまさな。私共は是から先き輿と半ば競争の態度で、尻の痛さをこらへて馬を鞭つて走らすのであつたが、動ともすれば追ひ越されようとする形勢である。

併し美はしい朝日を受けて、馬を此の曠野に走らす爽快さを、輿中の人の羨む處となつたのは無理もない、それは次第に私共の尻の痛くなるのを知らなかつたからである。

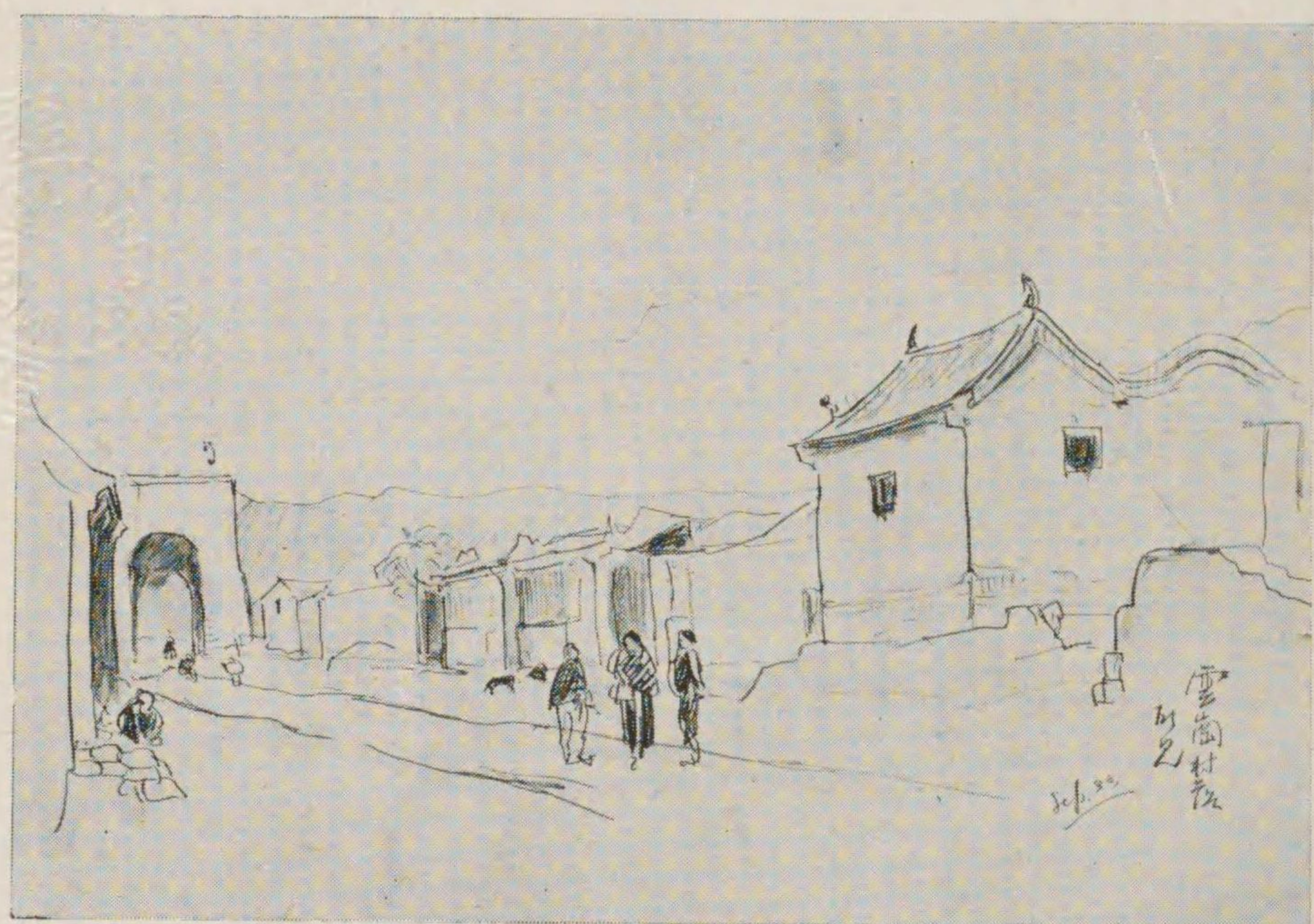


雲崗石窟寺西方大露佛

(青陵寫眞)



雲崗石佛



雲崗村落

(青陵畫)

日本里一里許りで小さい村を過ぎ、やがて丘陵の端を登ると、雲崗の前から流れて来る武周川の
曲り角に逢著した。此の邊には治水工事が著手せられてゐるのを見たが、支那もだん／＼此處まで
手が及んで来たなと感心した。これから川に沿ふて石徑を行くと半里許りで、晝趣に富んだ小さな
觀音廟がある。我々は馬を降りて休息してゐる中に、程なく輿組も到着し、一處に階を登つて廟に
謁したが、扱て此の時の太田櫻木兩大人は輿中で身動きもならず、足は冷えて辛抱しきれぬ寒さに
閉口され、雲崗へ着いたら直ぐに輿を返してしまふと決議せられたのは、見かけ許りは壯嚴な輿に
も、却つて此の嘆があるかと氣の毒に思はれ、我々馬黨は大に其の先見の明を誇つた。

觀音廟から雲崗まではなほ三里餘り、或は河に馬を乗り入れて之を横ぎり、或は小さい村を過ぎ
ては河に遠ざかり、或は馬像のある廟の前を通つて河原に入り、石佛寺の屋根がモウ見えさうなもの
だと、岸の曲り角に来る毎に待ち焦れてゐると、赤衣着物の女の乗つた驢馬がやつて来る向ふの方
に遠く、低い丘陵の前に碧瓦の樓閣がキラ／＼と日を受けて閃いてゐるのが見え出した。あゝ是が
寫眞や繪に見た雲崗の石佛寺に違ひないと馬を急がしてゐる間に、件の赤い女は過ぎ去つてしまつ
たが、後から來た輿連の話では、是は非常の美人であつたと云ふ。私共は青い御寺の瓦に見惚れて
赤い女を逸した恨を今更悔んでも詮がなかつた。

四 雲崗石窟寺(上)

「石佛寺」の扁額の掛けてある寺門を入つて關帝廟を過ぎると、碧瓦丹楹の四層樓をなした建築の後ろに大洞窟が開かれてある。これ即ち關野常盤兩博士の所謂第六窟大四面佛洞であつて、何よりも先きに其の小暗い戸口から内部を差し覗くと、曾て寫眞でお馴染の大佛像と、無数の浮彫が臙氣に見えるので、愈々雲崗へやつて来たなと安心して、見物はゆる／＼中食をした後の事と、左手の客館に入る。中は瓦敷のガラソラで、障子は破れコブレになつてゐるものゝ、先づ以て豫想外にキレイな方で、今夜此處に一泊する我々は夫に勇氣を得たが、さて輜重の馬車に乗つて来る張太山は、遅れて中々到着しない中に、朝からの騎乗に腹を減らした我々は、到底我慢が出来なくなつた。そこで張鳳舉君を煩はして、寺僧に何か食物はないか、卵子か饅頭でもと云ふと、たゞ鼠色の砂の様な鹽をふりかけて食ふ饅頭が漸く一杯宛出て、而かもお代りは無いと云ふには驚いたが、食を選ぶ餘裕のない餓鬼には、なほ碗を重ねることが出来ないのを憾んだ位であつた。その中張太山の馬車が着き、早速中食の用意に取りかゝつて呉れたので、やがては暖い汁と饅頭粉を大きな圓い煎餅の如くに焼いて、之を四つ切りにした様なものも出来て、充分腹を拵へることが出来た。

我々が食事をしていると、客館の前を盛装した村の女子が三々五々佛殿に參詣しに來たのが、其

の序に我々を覗き込んで行く。是は何よりの下物、寫眞でも寫してやらうと思つてゐるうちに、いつの間にかピシヤリと扉を閉ぢるものがあるので、遺憾の臍を噛んだが、是は彼女等一行中の子供らしく、而かも今度は其の子供が扉の隙から我々を覗くに至つては、齒がゆい次第であつた。

食後我々はいよ／＼雲崗の石窟寺巡拜の途に就いたが、扱て數十百の石窟を何處から見始む可きか。此の石窟群中の中區即ち我々の宿泊する石佛寺の附近には、最も見る可き諸窟が羅列してゐるのであるが、今や我がものとなつた雲崗のことであるから、一番御馳走は最後にと云ふ悠々たる態度に出でて、最西の洞窟から順次東端の洞窟を見ると云ふ順序を取ることにした。それで石佛寺を下り、雲崗の寒村を通過して、城門の如きものを潜り、左手に大露佛を望みながら、最西端の小窟に近づいた。

雲崗石窟寺に關する歴史と記載は、既に以前から東西の學者が我々よりも非常に長い間滞在して調査研究した結果を諸種の書籍雜誌に書かれてゐることであり、殊に最近關野常盤兩博士の「支那佛教史蹟評解」第二冊に、可成詳細なものが現れてゐるから、凡て之を省略することにす。此の西群諸窟中大露佛に至るまでは、餘り重要なものも無いのであるが、我々は西端から順次見て行つたので、疲勞倦怠を來たさないうちに、此の間の小窟を却つて稍々精しく見ることが出来た。而して此の事は我々をして僅か一日の雲崗滞在に、全く豫期しなかつた新發見を齎しめたのは、世事の不

可思議に寧ろ驚かされたのである。

それは大露佛(第二十窟)から西方第八番目の小窟へ這入つた時、其の内には日乾の煉瓦などを入
れ込んで、頗る雑然たる有様であつたが、其の奥には二尊佛を刻出した龕があつて、其の頂上には
如何にも記銘を刻むに適當なる題額的部分があるので、片光線で眺めて見ると、半ば泥土に被は
れながらも中央下部近く「之」の字の如き劃が見え、なほ其の左方に確かに二三行の文字があるこ
とを確め、未だ拓本を取つた跡もないので、第十一窟四面佛洞(關、常)にある太和七年邑義等の銘
文の外六朝の銘文の存在を知らなかつた我々は、(後に聞く所によれば、太和十年の銘と昨年十月更
に岩田秀則氏は第十八窟立三佛洞に於て、太和十三年惠定尼の銘文を高處に發見せられたとの事
ある)頗る驚喜して、翌日原田君の苦心によつて其の拓本を作つたが、不幸にして年號其他主要な
部分は殆ど全部漫漶して、僅に十一行中左の數字を判讀し得るのみであつたのは残念である。併
し其の北魏時代のものたることは字體等により疑を容れぬと思ふ。今次に辛ふじて讀み得た文字を
記して見よう。

- 「○○事大……………幽○○惟中○○○
- ……………
- 後○○興……………

○……………

故節……………

○實汾……………之……………

如此在○嘗……………

○此福使亡妻○○更……………

前光母四體休罪業……………調……………

○○老李自願……………門……………

○……………豐○用之……………

第二十窟露天大佛は、元と窟内に在ること他の諸窟の像と同じであつたが、前面が崩壊したので、
今日の如くなつてしまつたのである。併し其の御蔭で佛像の様式手法を最も明瞭に見ることが出来
雲崗の石佛中最もイムボージングのものとなつてゐる。我々は次に其の東の第十九窟(大佛三洞)に
入ると、其の内部には前の民家が穀倉等に利用し、隨處に壁を以て仕切つた跡がある。先きに銘文
を發見した我々は到る處鵜の目鷹の目で銘文を探し廻り、時に幻影に捉はれて大笑ひをした。さて
嚮きの大露佛を始めとして此の洞の佛像など、雲崗の大佛像の衣紋には小さな方孔が多く穿たれて
あるのが、我々の間に疑問となり、或は衣紋の上に金屬の飾板を點綴する爲めの孔であらうと云ふ

説も出でたが、折節窟内へやつて来た土地の老翁に張君が聞いて見た處『それは分つてゐる、昔此等の像を修繕した時に、粘土を以て衣紋の上を塗つたので、その塗地の木栓の孔である』との事。よくよく調べて見ると、或る孔には今なほ木栓の一部が残存し、而かも其の上端に針金が装入してあるものもあつて、此の翁の解釋が最も眞を得てゐるらしい。加之、東方第一窟第二窟邊には今なほ厚く粘土を全部に被覆して、全く近代の様式を示してゐる佛像も、其の粘土の皮をムクと、中から北魏の古い像の現はれて来る。又た佛像の頭首を失つたものは、其の頸に大きな孔を穿ち、それに支栓を嵌入して新しい頭首を塑造で補作したらしい痕跡のあるものが頗る多いことを發見した。兎に角學者が色々六ヶ敷い考察を廻らした所謂學説よりも、土地の古老が何となく昔から傳承して來た説の方が正鵠を得てゐることが多いらしい。我々は先づ宜しく心を空しくして彼等の説を聞き、然る後ち之を判斷す可きである。

五 雲崗石窟寺(下)

さて西群の諸窟を見終つた我々は、再び本道から石佛寺へ歸り、其の左手にある第五窟(大佛洞)から、第六窟(大四面佛洞)を見、その面前に立つてゐる四層の樓にも登攀したが、此等の窟は信仰の對象として今なほ尊崇せられてゐるので、後世佛像の上に施した「コーチング」と新しい彩色は、

痛く古色を損じて當代の面影を認め難いけれども、周圍の浮彫などには大體に於いて北魏の手法を見る事が出来る。其の西方第七窟(西來第一古洞)の前にも三層閣を立て、ある。此の附近の小洞には、驢馬を以て石臼に粉を輓かせてゐる村の美しい娘があたのも、なか／＼に面白い點景であつたが、その代り我々は遠慮して其の中へ這入りかねた。第八窟(佛籬洞)は、其の前面の栱形の入口に濕婆、毘紐の兩天の頗る中印度的なる像を刻出してゐるのは、寫眞で以て誰人も知つてゐる處である。第九窟(釋迦洞)と第十九窟(持鉢佛洞)は、其の壁面の精麗なる裝飾に見る可きものが多く、第十一窟(四面佛洞)には其の東壁上高く太和七年の記銘のあるを以て名高い。其他第十二窟(椅像洞)第十二窟(彌勒洞)等を以て中群の主なるものとする。

我々は稍々疲れたる足を引きずりながら、今度は東群の諸窟を訪ふことにした。其の第一窟は石佛寺の東方數町にあつて、第二窟と相並んで窟内に塔形を刻出し、北魏建築の様式を窺ふに足る好資料である。第三窟は中群石佛寺に近い未完成の洞窟であるが、其の中には所謂隋の大佛があり、雄偉を極めてゐる。これで雲崗の石窟の概観を終つたので、我々は夕暮近く石佛寺に歸り、明日の午前中は再び主なる處を見直して、晝過ぎ大同へ歸ることにした。

さて雲崗の石窟の一々の年代は固より、東西中の窟群の何處が最も古く、何處が最も新しいかと云ふ様な問題は、頗る決定に困難なることであつて、たゞ大石佛中東群第三窟のものは、其の様式他の

ものとは大分違つて唐式に近づいてゐるので、常盤博士の想像せられたが如く、果して隋の煬帝が其の父文帝の爲めに作つたものであるか否かは別として、其の時代は六朝の末期とするに諸學者の間に異論は無からう。併し中群の大像と西群の大露佛とは、果して何れが古式に屬するかと云ふ問題に成ると、私は雲崗瞥見の印象に於いても遽に判じ得なかつたのみならず、中群第五第六窟の大像の如きは、後世の「コーチング」があつて、直に之を以て大露佛と比較することが出来ないのである。從來の學者中中川忠順、關野貞、常盤大定、木下李太郎氏等多數は西群大露佛附近の五大窟（第十六乃至第二十）を以て最古のものと考え、常盤博士の如きは之を以て「魏書釋老志」にある曇曜が文成帝に奏して「於京城西武州塞、鑿山石壁、開窟五所」とある五窟であらうと云つて居られる。然るに之に反して松本文三郎博士は、中群の第十窟（持鉢佛洞）等を以て、所謂第一種の像式として、最も印度的手法を存するものとなし、西群大露佛を第二式とし、東群のものを第三式とせられ、全く其の説を異にせられてゐる。私は實際此等の佛像の様式上から、遽に中群と西群の間の新古を決定するの勇氣は無く、又た佛像の外浮彫其他裝飾模様などから考へると、愈々以て六ヶ敷くなるのである。たゞ前記「開窟五所」の文字を接近並列した現存の五窟に擬定しようとするならば、常盤博士等の説の如く見るのが最も適當であらうが、中群中にも亦た九ヶ所の大窟があるのみならず、雲崗全體の地勢から云へば、此の中群の部分が一番中心となり、最初の設計者が選擇すべき地勢ら

しく思はれるのである。雲崗に於ける記銘は今日まで僅か三四を發見し得たに止まるけれども、其の記銘を刻したらしい場所は頗る多く、それ等は大抵粘土を以て被はれてゐたのであるから、之を剝してなほ多數の記銘を發見した暁、或は此の石佛の時代を決定することが出来るかも知れない。

雲崗の地勢は河南の龍門と相似てゐるが、其の石窟のある丘陵は龍門に比して稍々低く、且つ其の前に流れてゐる武周川は水淺くたゞ廣い河原をなして居り、其の砂原の一側磨崖石窟の下に貧しい村落が發生したので、其の山水のたゞすまは龍門の壯大なるには到底及ぶ可くもない。併し此の村落が石窟に近く存在してゐることは、風景を害してゐる代りに、旅人其他が石佛を破壊掠奪することを、意識的無意識的に監視することが出来たので、龍門の石佛が殆ど皆な頭首手足を失つてゐるに反して、雲崗の石佛の多數は比較的完好の状態に保存せられてゐるのは喜ばしい。但し近年雲崗の寒村にも、四方から悪い骨董商の手先きなどが入り込んで、無智なる彼等を金を以て賂ひするらしいから、其の結果米國などへ取り去られた石佛の空しい跡がある。果して此の監視の實が何時まで繼續せられるか危まれるのみならず、却つて掠奪破壊を早からしむる反對の結果に成るかも知れない。

龍門の石窟は堅い石灰岩から出来、其の彫刻は精緻な手法に出でてゐるが、雲崗は粗らい砂岩の地であるから其の手法は稍々粗雑である。併し其の代りに大きな佛像を造るに容易であつたと見え、

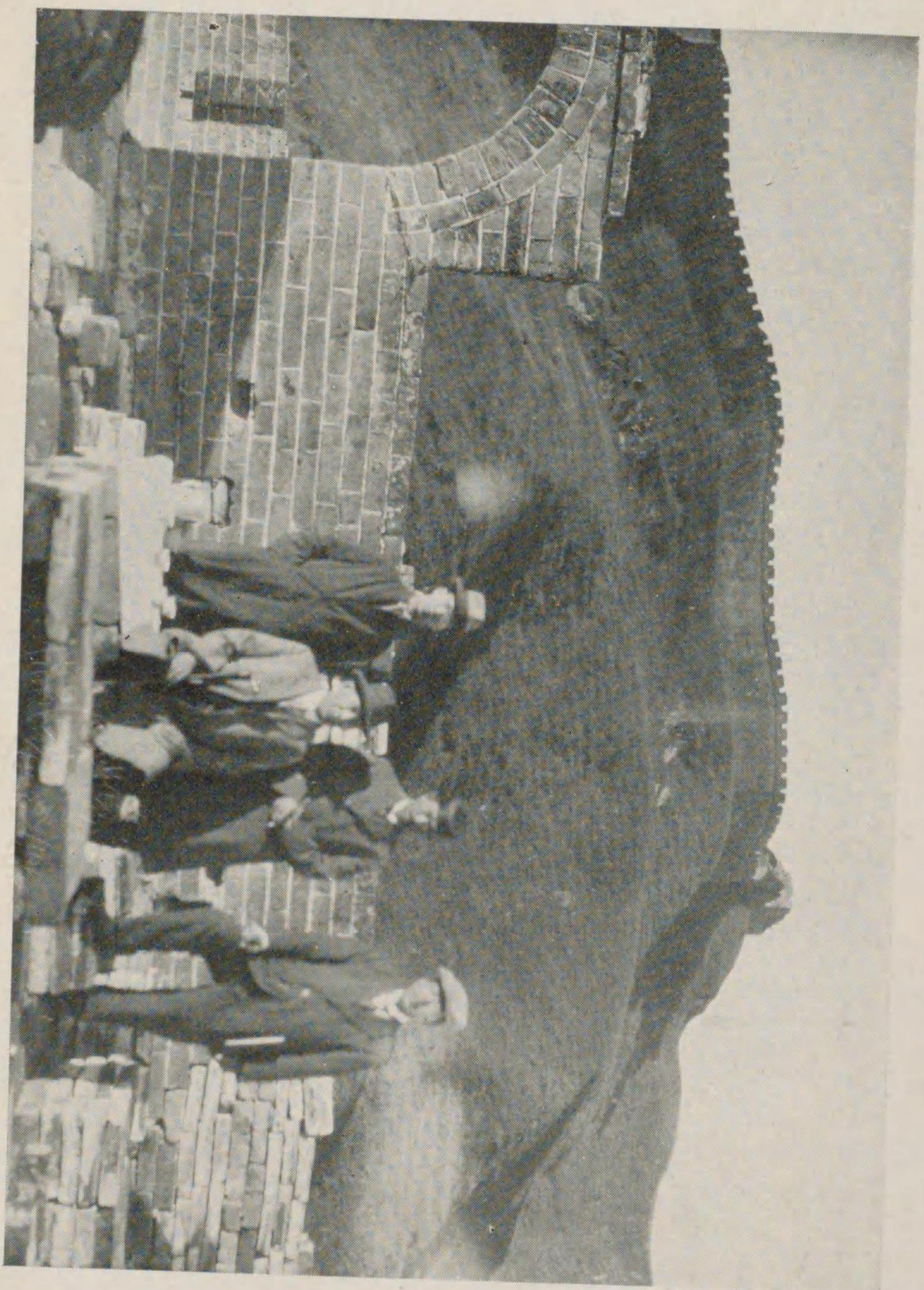
大規模の石窟と佛像の多く存在することは、遙に龍門に於いて見ることが出来ない程である。尤も北魏の初代に於ける雄大豪壯なる氣格が其の根本をなしたことも、固より云ふを須あぬことである。なほ此の石佛に關する種々の考察は、別の機會に譲ることとする。

石佛寺に歸つて張太山の拵へて呉れたウマイ晩飯に舌鼓みを打ち、涼しい夕ぐれ私共は雲崗の村落を逍遙して村の西端に出ると、こゝには道路に面して小やかな戲臺があつて、今日は何かの祝日と見え(道理で石佛寺にも盛装した女が參詣したのである)旅役者が關羽の様な扮装で何か演じて居り、ドンチャンの囃子は耳を聳するが、北京などの劇場で聞くよりは喧しくない。村の男女老若は其の前に群集して、薄暗がりの燈火もない舞臺をかまはず見物してゐる。私達も暫くは其の仲間に入つて見物をしてゐたが、それから更に西の方の大道を歩いて武周川の曲り角まで行つて見た。折しも東天には中秋に近い明月が、金輪の如く楊柳の枝の上にかゝつてゐる。村芝居の囃子は遠く幽かになつて、草間にすだく蟲の音が切々と我々の旅愁をそゝる。

石佛寺へ歸つてからは蠟燭の火明りの下に長く話し合ふことも出來ず、太田君と私は客館の小房にあるアンペラ敷きの火のない炕の上に眠り、張君は客室の机の下に、櫻木君は別の小房に眠ることとなつたが、少々薄寒い外には惡蟲の恐れもなく、雲崗の一夜を安かに過すことを得た。唯私は夜半眼覺めて大〇を催したので、燭を點じ用紙を手にしてソツと脱け出し、關帝廟の彼方の牆陰に



八達嶺に於ける萬里長城



八達嶺附近長城墩門

青陵 碧 眞



行かうとしたが、折しも一陣の風が吹いて来たので、紙を以て燭火を被護した處、之に燃え移つて、時ならぬ恠火を石佛寺に起してビックリした。已むを得ず再び客館に歸つて、紙を取つて来て用を果したが、さて之を山下村落の人が見たならば何と思つたであらう。深夜此の不思議な火炎は狐狸の所業か、兎に角解釋の出来ぬ恠火としか思はれなかつたに違ひない。併し中天にかゝる明月の下に用を便する壯大の氣は、支那旅行の外到底之を他に求めることが出来ぬ所である。

六 雲崗から青龍橋へ

次の日(九月三十日)の午前は太田君は油繪の「スケッチ」を、私は鉛筆や水彩の「スケッチ」を雲崗の村落や石佛の附近でやり、寺に歸つて中食の後、いよゝ名残惜しい雲崗を引上げて大同へ還へることゝなつた。昨日の輜輿で閉口して、之を返へしてしまつた櫻木、太田の二老は、今日は驢馬を雇ふ積りであつたが、雲崗では全く其の手段がなく、私共馬黨よりも一足先に徒歩で出發した。途中どうかなる位の積りであつたが、支那語には啞同様の兩君が一兩の銀貨を見せつけて、行き遣ふ驢馬の持主に、乗らして呉れと談判しても、そんな安い錢で驢馬を買はれては大變と、急いで遁げ出すばかり、到頭大同まで歩き通されたのは氣の毒の至りである。

扱て張君と原田君と私とは馬に乗つて見たものゝ、昨日の騎行でスツカリ尻を痛めて、コクリコ

クリと馬の歩く毎に、顔をしがめると云ふ始末で、是では徒歩黨になつた方が宜かつたと後悔した位である。とある馬神廟の處までやつて来た時、折柄の時雨を避けて、雨宿りをしてゐると、我々よりも遅く出發した張太山の馬車に追いつかれてしまった。それを幸私は太山と談判して彼に馬を借し、自分は馬車の轅の側に腰をかけることにした處、ゴロ石の川原にガクリ／＼揺られても、お尻の痛いよりは遙に具合佳く、支那旅行には矢張り此の車が第一等と曉るに至つた。但し轎車の奥の方へ入れられては、たまつたものでないかも知れない。道々雲崗の石佛寺へ參詣に行つた大同の美しい人達の轎車や、二頭の馬上にしつらへた不思議な輿に追ひぬかれて、朔風について夕暮近く漸く城内へ歸り着いた。

私は城内に這入ると車から飛び降りて、右手に見える大きな寺へ行つて見た。是が所謂大華嚴寺なるものであるらしいが、時間も無く言葉も通じないので、十字街の處から人車を雇つて東華棧へ歸へると、外の連中は既に一時間も前に著いて居つて、私の歸りを待つて呉れてゐた。

東華棧の夕食は空腹の我々をして飽食せしめたが、愈々午後八時五十分の夜行列車に乗り込む爲に、例の眞暗な道を停車場まで行く時の寒さ。昨日の小春日和に引きかへて、今夜は朔風面を吹いて寒氣骨髓に徹すると云ふ急變である。太田君は徒歩に汗をかいた爲めか、何んだか惡寒がして熱があると云ふので、ガタ／＼震ひである。長い間寒い停車場の待合——併し是は支那の座敷めいた

部屋で御茶を出して呉れるのは嬉しい——に休んで、漸く九時過汽車がやつて来たので之に乗り込んだ。たゞ困つたのは寢臺である。是は停車場では賣らず、車中で買つて呉れとの事で、早速車掌に談判すると、凡て三分丈けしか無いと云ふ。仕方がないから櫻木、太田、原田三君に之を譲り、張君と私とは車室に毛布にくるまつて、一夜を明かす決心をした。何分ヒシ／＼と身に逼る寒氣に眠りを成さなかつたが、幸ひなるかな寢臺が又た二つ空いたと云ふ事に、地獄に極樂の思ひをした。實は寢臺は多く軍人に豫約せられてゐるのであるが、其の軍人が或る驛を過ぎて乗らないので、都合がついたのであると云ふ。兎に角軍人本位の戦時状態であるから是も致し方がない。明日の朝未明我々は八達嶺へ行く爲めに、曉夢を破つて青龍橋で降りなければならぬのである。

七 萬里の長城と居庸關

十月一日、曙光未だ上らざるに、早くも寢臺から起き出でて、青龍橋の驛に下車したのは、丁度薄く曉色のさし出でた午前五時半頃であつた。顔を洗ふ場所もなく、雇ふ乗物もないので、我々は驛員に案内せられて、線路を歩きながら近道を八達嶺に急いだ。(此の驛には京綏鐵道を作つた技師詹天佑の銅像が立つて居り、支那人自身で此の困難な線路を完成したことを誇つてゐるが、是は一度此の汽車に乗つたものゝ實にもと諒解する處であらう) 八達嶺の普通門外の横から西方の墩臺に

出ると、早くも我々の来るのを要して、茗を煎る男のあつたには驚いたが、此の朝寒むには何よりも嬉しかった。此處から眼を放つて四方を見渡すと、蜿蜒長蛇の如く、山を攀ち谷を下る城壁は、さながら足長の「ヒトデ」の如く、而かも北方の大曠野を前に、漠北の連山は薄紫に染出して、曉靄の間から姿を現はしてゐる。斯の如き宏大無邊な風景は、實に私が一生涯に於いて、未だ曾て遭遇しなかつた種類のものではあつた。やがて朝暾東山にさし出でたと見えて、未だ我々の立つてゐる城壁には日があたらないのに、前山に屹立してゐる城墩の一角は眞紅に染め出し、瞬く隙に其の山腹まで黄金色に輝き出した。此の美はしい長城の曉色は、如何なる畫家も、如何なる寫眞も、到底其の趣を傳へることが出来ないのを嘆ずるに違ひないが、たゞ漢詩の風格のみ僅かに之を歌ふことが出来さうに思はれる。然るに平仄さへ覺束ない私には、之も斷念する外はないのである。

處が櫻木翁は此の雄大の景色に感動して、獨り前山の城壁を攀ち登つて、最高の城墩にたどり着いたと思ふと、忽ち大聲唱歌をはじめ、其の聲漠北の野に徹するばかり、たゞ其の調子が聊か讚美歌めいて居つたのは、長城の場所柄聊か相應しくないが、兎に角此の天地の大觀に接して、人間の至情を發露したものは違ひない。此の際私は此處に長城の歴史や何かを書き出すことを己め、それが秦か漢か將た近代かなどと云ふ問題に觸れないことにする。何となれば私達は唯だ此の長城の壯觀に打たれに來たのであつて、これを研究に來たのでは無いから。

此の城墩の上で命じて置いた驢馬がやつて來たので、我々は之に乗つて愈々居庸關を経て南口へ下ることゝなつた。此の路は所謂南口の險隘であつて、路といふ可き路も無く、たゞ谷川の川原に沿ふて下るのであり、馬蹄を石に滑らせ、或は鞭聲蕭々河を渡るといふ具合であるが、實は此の險阻の感じは、我々の如く溪谷を下つたものでは駄目で、反對に南口から居庸關に登るに非ずんば、能く解することが出来ぬと思はれた。八達嶺から約一哩許、鐵道の信號所のある近傍で、漸く一軒の休息所に出會したが、其の簡單さは如何にも希臘の「カン」なるものと同様で、我々は其の傍に流れてゐる川水で顔を洗ひ口を嗽ぐと云ふ有様。而かも面白いのは一人が口を嗽いであると、他の一人は更に其の上流に行つて顔を洗ふことで、如何にも自分ヨガリの清潔好きである様だが、何ぞ知らん、其の又た上流には驢馬がシャークと水に溺してゐることを。(此の動物が好んで水中に溺することは、我々が親しく騎行中川を渡つて経験した處である。)私は又た此處で石几に鏡を立て、顔を剃つた處、向ふの信號所員は男女小供迄、總出で此の珍らしい旅人を見物してゐる。併し其の一人の男は小さい子供の寫眞を撮つて呉れと頼むので「私は母親と一處なら」と思つてゐるうちに、母親は何時の間にか遁げ出し、遂には子供も泣いて遁げると云ふ始末に、折角の父親の志も遂げ得なかつた。此の休息所には飯は勿論饅頭もなく、たゞ三四の鶏卵と駄菓子があるばかり、之を朝餉に此處を出發したのは八時過ぎ頃と思はれた。

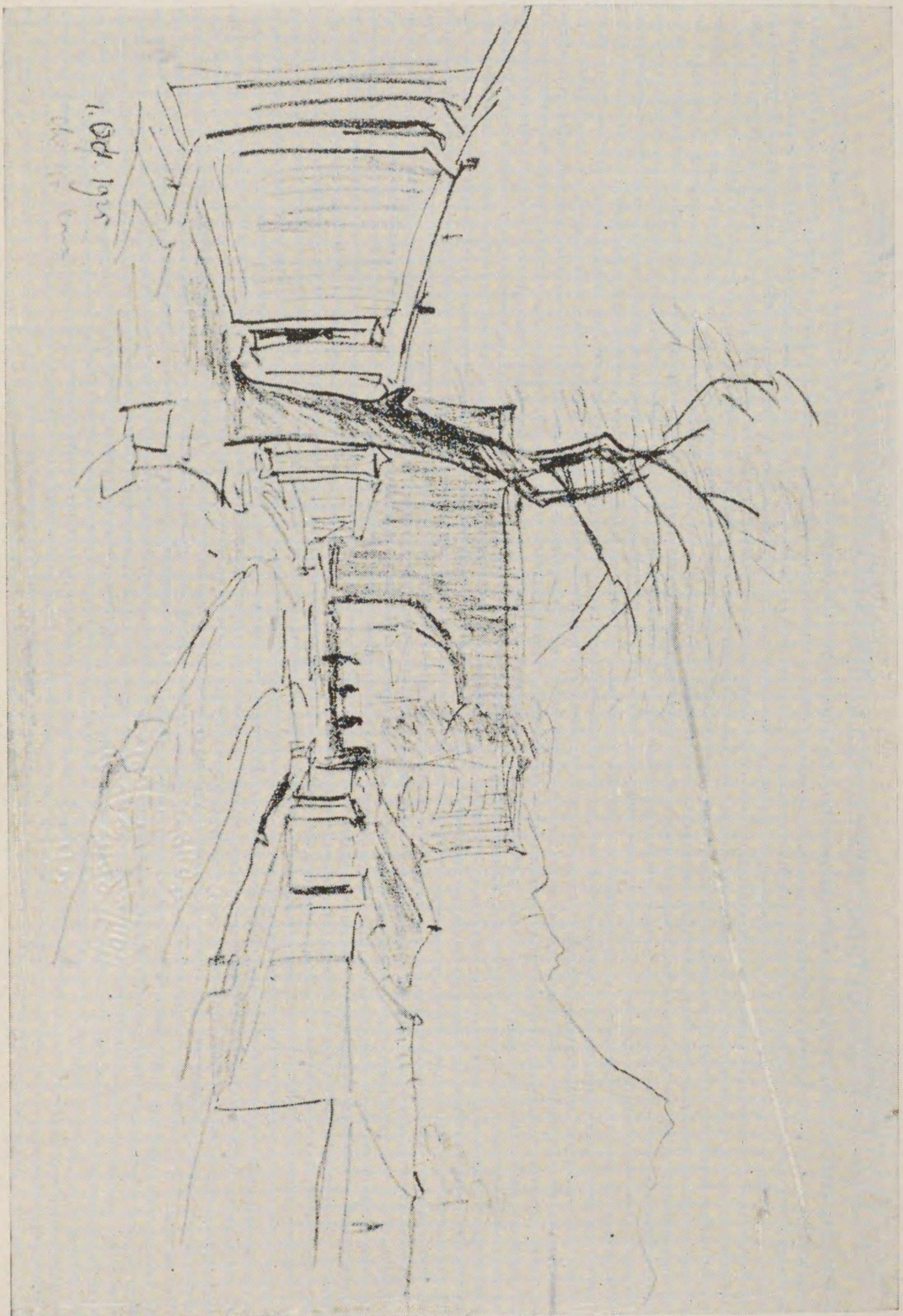
彈琴峽の奇勝を過ぎて、居庸關の寒村に著いたのは午後一時過ぎ、先づ此處の茶店に著いて、漸く饅頭にありついたが、是は油と酢とを交ぜたものを掛けて食ふに過ぎないので、平生ならば到底咽喉に通る可き筋合のものではないが、朝から食事らしい食事を取らずに歩いてあるので、之を二杯も平げ、なほ鶏卵をも求めて漸く腹をこしらへた。それで愈々居庸關の大理石門を見に行く。是は元の武宗が太后の壽福を祝する爲に建てたもので、穹窿門の内壁其他にある精細な佛像などの浮彫と、漢、梵、蒙古、回紇、女真五體の呪文は、歴史上美術上最も重要な記念物で、中學校の教科書以來のお馴染みであり、實際元代美術の代表的作品と云つて差支へない。

居庸關を發して南口に向ふと、谷は次第に廣く、道も亦た漸く平かとなり、古への南口市街から遂に南口山脈を離れて、廣漠たる北京北部の平野に出たのは、午後三時頃であつた。我々は汚ない南口新市街に入り、先著の張太山に迎へられて井兒棧と云ふ旅館の客となつた。櫻木氏は日が無いので明陵を見ずに、やがて北京へ出發せられた。さて此の宿は半ば西洋風に造作し、寢臺には鐵製の寢臺もあるが、カナリ不潔と云ふ外はなく、壁面には南京蟲をツブした跡も歴々として残り、膚を寒からしめる。市内を散歩をしても、たゞ鐵道線路附近の汚ない飲食店の雑踏があるばかり、何の所在もない處である。此の旅館に日本人が獨り泊つて居るので、話し合つて見ると、北京の川崎大尉で、今日明陵を見物し、明日は張家口へ行くとの事。而かも我々一行中の原田君の支那服姿を



青龍橋より居庸關に至る途上彈琴峽

(太田喜二郎君畫)



1.04.1955
1.04.1955

居庸關門(北方より望む)

(香陵畫)



見て、正しく支那人と思つた處が、是は一向支那語をしやべらず、又た日本語がウマいので日本人と思つた張鳳舉君が、今度は民國人であつたとて大笑ひをせられた。

此の夜の食事は久々聊か料理らしい支那料理の御馳走で満腹したが、さて便所は何處かと家中を探し廻つても「女中厠」と「男中厠」と書いた處ばかりで、這入つて見ても一向大便の設備は無い。宿の男に聞くと、男子の大便所は屋外にあるので、手に洋燈をさげて遠征するのである。此處で砲列を敷くの珍景は、遂に太田畫伯の畫卷中に入れられた。

八 明の十三陵

昨夜は心配でたまらなかつた南京蟲にも意外に襲撃せられず、十月二日の朝はユツクリ寢て、朝九時半頃驢馬に乗つて、漸く明陵見物に出かけた。先づ道を東南に取り四哩許り行くと、太平莊村落の北方に十三陵の總門たる大理石の牌樓が平野の間に輝いてゐる。此の總門の北四哩許り天壽山を北の障屏とし、其の東西に羽翼の如く延びてゐる山脈の間に、圍まれた河谷の盆地を一大兆域として、其の山麓に明が北京に都を遷して以後滅亡までの十三帝、即ち世祖永樂帝から莊烈帝に至る十三帝陵を營んだのが此の十三陵であつて、其の規模の雄大なること、我々日本人などの到底想像し得ない所であり、北京の紫禁城に支那天子生時の宮殿の規模の雄大なるを窺ひ得たものは、此の

明陵に來つて、王者死後の住宅なる廟陵の經營の、之と相應じて而かも其れ以上の大規模なるに感ぜざるを得ないであらう。

牌樓から北約四分三哩にして大紅門があり、更に數町にして聖德功碑亭に達する。此の亭は明仁宗の撰に係る碑を容れたものであるが、其の背には乾陵帝の哀明詩の文を刻してあるのも床しい。我々は此の碑亭の一隅の茶店に休息して、携帶の中食を取り、さて華表柱の傍に出ると、洋服の支那の青年紳士が、非常に美しいハイカラの細君と其の邊に立つてゐるのが目についたが、やがて紳士は驢に、夫人は椅子の轎に乗つて、長陵の方へ一足先に出發した。我々は次いで同じく長陵に向つたが、その道の兩側には大きな大理石の石獸石人が、白く青野原の間に並んでゐる。先づ南から四獅(東西各二)、四豺、四駝、四象、四麟、四馬、次に十二文武官と北に連つてゐるが、其の製作は多くは見るに足る可きもので無い。たゞ四駝と四象のうち各二匹が蹠つてゐる形に現はされ、殊に象の形が面白く出來てゐると思はれた。明の宣宗時代には此等の像は大きな松柏の間に護られて居つたと云ふけれども、今日の如く平野に暴露してゐる方が、却つて其の意義を發揮して見榮えがする。沙河の石橋を渡つて道は稍々不規則となり、少し斜面を上ると世祖永樂帝の長陵の前に達する。此の陵は固より十三陵中最も陵廟の宏壯なるもので、黄色の瓦を葺いた大きな門と大享殿を前にして、其の後に「成祖文皇帝陵」の碑があり、更に穹道を入ると圓墮即ち寶城に達するのである。た

だ此等の宏壯な建築も稍々頽廢し、境内荒草離々たる有様であるのは、今更致し方もない次第である。此處の見物を済ますと、嚮に見た佳人と紳士とは未だ其の邊を逍遙してゐるので、今度は我々の方から一足先きに失敬して、莊烈帝の思陵へと急ぐことにした。一昧此の十三陵を悉く見極めるには、何うしても二三日を要するので、天幕の用意をして此の附近に宿營する覺悟が入る。それで我々は其の中一番大きな長陵と、南口への歸路に當る思陵丈けを見て置くことにしたのであるが、彼の佳人と紳士も固より思陵組であるから、早く思陵へ行かなければ、やがて又た後塵を拜することになる。それで我々は驢に鞭を打つて大急ぎに駆け出した。

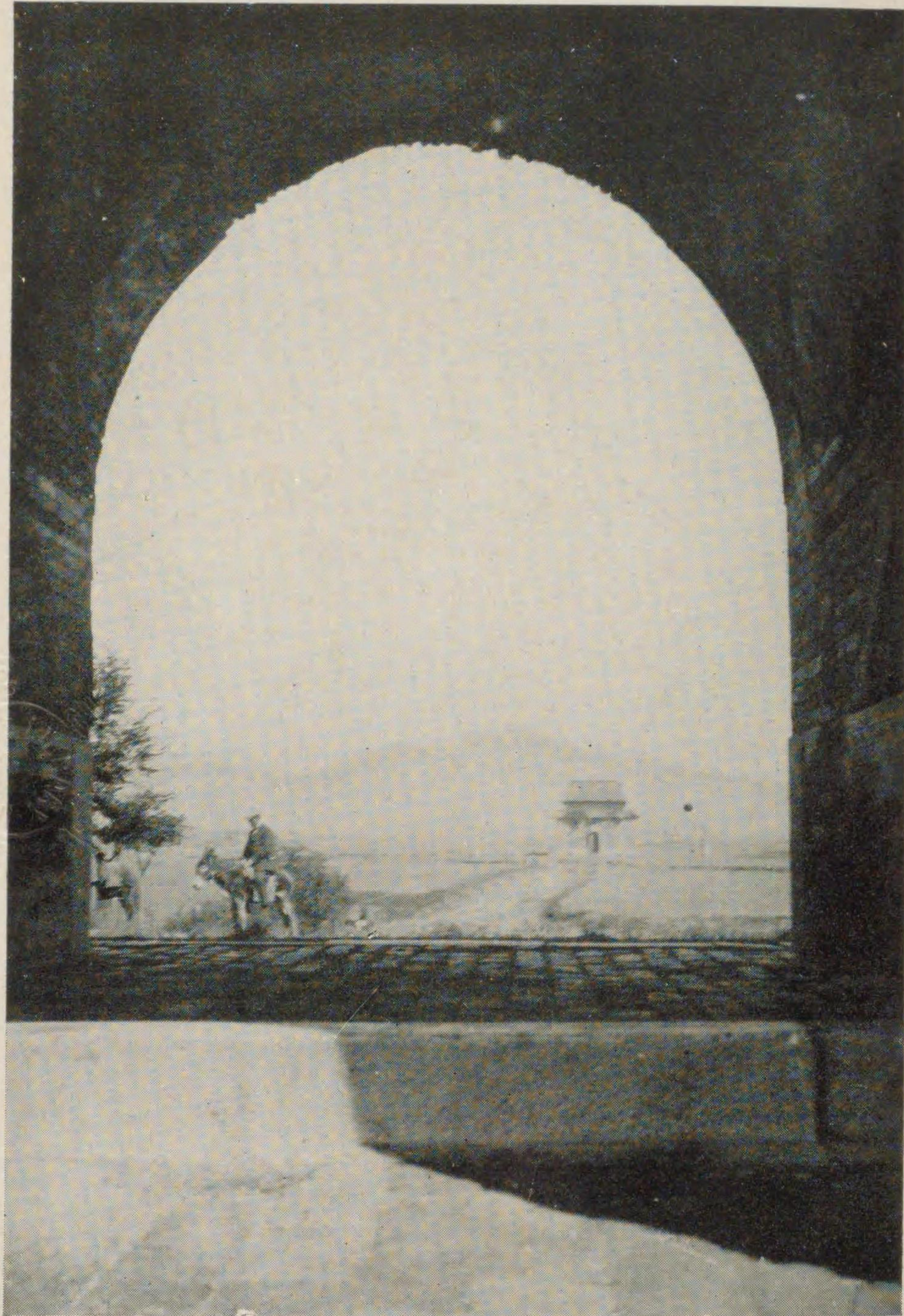
長陵を下つて、遙かに東西の山麓青々とした松柏の森の間に、十三陵の黄ろい廟の蔓の點々輝いてゐるのを見廻はすと、今更ながら其の規模の限りなく大きなのに驚くのみならず、西の方思陵から德陵(熹宗)の後ろに聳えてゐる峯はさながら鋸の如く、洵に北宗畫の趣を見せてゐる。此の美景に飽く間もなく後ろを顧ると、彼の佳人組は我々の後を逐つて驅歩でやつて來るので、更にへビーをかけたが、思陵の前に到着した時には、遂に一緒になつてしまつた。

思陵はかの北京の景山で自殺をした明の最後の莊烈皇帝の陵として、其の廟の規模は頗る狭小であり、到底長陵に比す可くも無い。さて彼の佳人夫妻は龜趺のある石碑の前で寫眞を撮つたり、廟後に廻つて親しげに手を執つて散歩をしてゐるので、其の際に我々は逸早くも此處を出發して南口へ

向つたが、斯の我々の態度は彼等にも通じたと見え、彼等は後から出發して、又もや我々を追ひぬかんと氣配である。こは叶はじと我々は畢生の力を出して驢を叱咤し鞭撻したが、到頭其の甲斐もなく追跡せられ、潰亂状態に陥つてしまつたのみならず、剩へ彼の紳士の乗つてゐる驢は牝馬と見え、太田畫伯の牡驢が其れにすれ違ふ瞬間急に逸走して、哀れや畫伯は半ば落馬の醜態を見せたが、辛うじて鞍に残ることを得た。此の時の紳士は私を尻目にかけて凱歌を奏しながら、而かも慰藉陳謝の大度を見せて、「Your donky is not good!」と英語で話しかけて行つたので、私は「No, ours not good, but yours all good!」と答へた處、彼は先きに行く轎上の細君の傍へ進んで、私が此の答をしたことを話すと、細君の顔には微笑と紅の色とが浮んだ。

我々の驢馬は固より驚馬には違ひないが、實は騎手がへた糞なので驢馬に馬鹿にせられてゐるのである。(驢の方では走り度いが、騎手がへたなので走れぬと云ふかも知れない)。たゞ張鳳舉君は我々のうちでは一番上手な騎手であるので、此の我軍不利の勢を見て憤慨措く能はず、驢に鞭撻つて彼等より先に走り出したのは、天晴れの武者振であつたが、天運利あらず鞍の尻がひがブツツと切れて柿の林の處で倒れてしまひ、遂に佳人夫妻に勝利を譲つたのは無念至極であつた。

我々は柿林の中で甲合戦の軍議を凝したが、我軍の大將張君が此の始末であり、我々は實力なき木葉武者であるから、何とも策の出やうが無い。潔く彼の絶世の美人に桂冠を興へることにして、柿



明十三陵大紅門

(青陵寫眞)



明十三陵思陵附近のエピソード

(太田喜二郎君畫)

林で柿を取つてゐる男から柿を買つて、弔ひの宴を催ほし、此の明陵に於ける意外の「エピソード」に腹を抱へ、軍に負けた御蔭で、却つて美人の微笑をも買ふことを得たのを喜んだ。張君の説に由れば、青年紳士は恐らく銀行會社員の類で、細君は「ミッション」學校出身の才媛であらうとの事。それはとにかく雲崗の北魏式の佛像とは、餘程時代がかけ離れた近代的の作品である。

軍に負けた御蔭が今一つある。我々は急速力を出した爲め、南口發五時二十分の汽車に間に合ひ遂に六時半に北京西直門の驛に著くことが出来たのは、何よりも幸福なことであつた。但し或は同じ列車に彼の連中と乗り合はす事かと、洋服の塵を拂つて置いたのは無駄骨であつたが、車中我々は大同、雲崗、八達嶺、居庸關と愉快な見物を済ました上、明陵では又た格別な興趣を盡した此の五日の旅を話し合つて、意屈をする暇もなかつた。

我々は北京へ著いてから、旅の塵を拂ひもあへず、今夜直に中秋の節の出し物たる梅蘭芳の「嫦娥奔月」を見なければならぬのであつた。（大正十五年五月—昭和元年十二月）

瑞鳳餘影

一 京都と其の近郊

瑞典國の皇太子グスタフ・アドルフ殿下並に同妃ルイズ殿下が、九月二十四日京都へ着かれてから、京都奈良各四日間の御見學を濟まされ、次いで高野山に登つて大阪に出られ、神戸から宮島を経て別府に赴き、終に豊後の石佛を御覽になり、下關から朝鮮に渡られるまで、關西地方及び九州地方十餘日間の御案内は、京都帝國大學の小川琢治、西田直次郎、澤村專太郎三君と我輩とが承はることゝなつた。此の内京都奈良は西田、澤村兩君と私の三人。高野は澤村君一名、大阪から宮島は濱田一名。大分では私の外に小川氏が加はられることゝなり、私も諸友の驥尾に附して幸に其の任を果すに大過なきを得たるのみならず、十餘日の間最も忙しく、而かも最も愉快なる美術行脚を此の北歐の「プリンス」と共に始終することを得たのは、洵に私に取つて生涯忘れ難き記憶の一となつた。それで今度此の旅行中の見聞と感想とを記して、思ひ出の種として置かうと思ふ。

東京御出發前殿下の御病氣に由つて、突然京都と奈良の滞在を各二日間短縮せられたのは、我々

日程作成に與かつたものをして、非常な難問題に遭遇せしめることとなつた。斯くて京都に於いては府當局と協議して、無理解に一旦削除せられた宇治平等院を復活し、醍醐寺、日野法界寺、大原三千院等の藤原時代の諸名跡を悉く網羅し、太秦廣隆寺の古刹から天塚古墳をも入れ、金閣寺、清水寺、三十三間堂などの洛中の名勝から、御所、二條、桂、修學院の三離宮をも含ましめることを得たのは宜かつたが、是が爲め聊か多きを貪る嫌に陥る感があつた。而かも此のほか近江石山寺、恩賜京都博物館、京都帝國大學文學部陳列室へも台臨あり、清水六兵衛、川島甚兵衛の二工場へも立寄られると云ふ事であつたから、府當局計畫の保津川下り、木幡松殿山莊の茶會等へは、妃殿下一人御出かけに成る外はないと云ふ、苦しい「プログラム」となつてしまつたのである。

病後まだ疲労の回復しない殿下の御姿は、七條驛頭奉迎の人々にも著しく目についたことであるが、殿下の熱心勵精なる御態度は、先づ入洛早々京都博物館に於けるブツ續けの三時間の御見學に由つて證明せられ、殿下の御健康を氣遣ひ、御歸館の時刻を促した山縣式部官其他の人々に對し、御中食の時「時計は無用の長物也、宜しく捨て、しまふ可し」と諧謔せられたことを以つても窺ふことが出来る。私が九月上旬東京霞ヶ關宮に於いて始めて拜謁した時「東洋の繪畫は彫刻等に比して自分には最も不得手なり」と言はれたに係らず、長法寺の金棺出現圖其他平安鎌倉の佛畫、大和繪に對して非常な憧憬を示され、京都に於いて殿下は一朝にして新しい鑑賞の世界を發見せられた

のである。而かも一方此等の繪畫と全く其の趣致を殊にする日觀の葡萄の如き墨繪に向つても、感賞の辭を放たれたのは、私共の却て意外とする處であつた。

元來瑞典の先史時代の考古學的研究から出發せられた殿下の如き方に於いて、純粹の考古學的の趣味意外に、美術的鑑賞の豊富なる天分を認めることは、寧ろ我々の豫期しなかつた處である。而かも殿下が常に熱心なる研究^{フォルシエル}家の態度を以て、小さい「ノート・ブック」に短い鉛筆を以て、細かに心覺えを書き留められるに對して、妃殿下は常に銳利にして囚はれざる美術的批評を下され、一の批評家^{クリチケル}として我々をして時々感服せしめるものが少なくなかつたのも、我々を驚かした處であるのみならず、一行の東宮大夫ルデベック夫人の如きも、最も熱心なる美術の研究家であり、瑞典公使の如きも亦た同様であつた。斯くて博物館へは桂離宮へ行かれる前に強めて時間を作つて再度の訪問を試みられ、前回氣に入つた作品を再び深く觀察し、なほ見殘しの部分を注意せられたが、元來東洋の古陶器に特殊の趣味と造詣とを有せられる殿下は、かの毘沙門堂の砧青磁の花活けを、館長の許しを受けて愛撫嘆賞之を久しうして、如何にも名殘惜しく振り歸り立ち去られたのは、いざらしい態度の表現であつた。又た大學の陳列室で私は六朝の泥象の眞物と偽物とを對照して説明申上げたが、『自分には未だ眞贋の區別を決しかねる』とて、更に精細に觀察せられたのみならず、上野精一氏所藏の支那古玉數十點は、御歸館の時間遅れたのも意に介せず、日没後電照の下に、一



京都帝國大學文學部陳列館に於ける瑞典皇太子殿下の御一行

一手に撫して之を鑑賞するの熱心を示された。

清水寺から醍醐道へドライブした午後は、秋の日影斜に傾いて、清々しい野邊の景色は實に又な
いものであつたが、醍醐の三寶院では新しく發見せられた弘仁の木佛に鑿の韻を賞し、五重塔には
始めて壁畫のいみじき跡に眺め入り、遂に意外の時を費し、日野藥師の忙たゞしく、宇治平等院に
著かれたのは、日西山に没した黄昏であつた。斯くて木幡の茶會から一足遅れて到着せられた妃殿
下と共に、蠟燭の光をかざして屏畫を探ぐり、壁間に二十五菩薩群像を仰がれたので、我々は鳳凰
堂に對する充分なる「アブリエーション」が殿下に與へられなかつたことを遺憾とした。之に反し
て大原三千院の往生極樂院は、秋時雨の後心靜かに鑑賞せられたが、たゞ寂光院に駕を枉げられる
暇が無かつたので、三千院まで御出迎へをした尼僧に、時間無くて残念ながら行くことが出来ない
ことを呉々も謝せられたのは、尼僧の却つて感激する所であつた。

二 奈良と正倉院

奈良の四日間は京都に比して多少時間に餘裕があつたのと、大宮御所の御滞在に引きかへて「ホ
テル」の氣樂さは、殿下をはじめ隨員一同にユツタリとした氣分を與へたかの様に見えた。併し殿
下が日本に來遊せられた第一の目的は正倉院の御研究に在るので、(正倉院の御開扉の關係から、布

哇にわざと長い滞在をせられたのである。二日半を全く之に費されたのみならず、古墳其他の考古學的遺跡よりも、今や古美術の鑑賞に没頭せらるゝ殿下は、遂に南大和の巡遊を止めて、残りの時間を法隆寺其他の諸大寺や博物館の觀覽に向けられたのは、洵に故あることであり、又た然らざるべからざることである。特に殿下の爲の正倉院の御開扉も、午前十時から午後三時の間であるので、其の開扉以前の時間と閉扉以後の時間は、之を奈良市中の東大寺諸堂、新薬師寺、春日神社、頭塔等に費され、なほ晚饗迄の時間を偷んで飄然御微行にて、玉井森田等の骨董店にも杖を曳かれたのは、我々隨從のものをして殿下の精力の絶倫に驚き、且つは心窃かに其の御件を恐れしめる位であった。

殊に正倉院に於ける殿下と妃殿下との熱心なる研究的態度は、大島博物館長をはじめ我々に驚嘆の聲を放たしめ、眞に内外正倉院拜觀者の「レコード」を破るものと言ふ可きであつた。原田氏の詳細なる説明を聞き、豫め手にせられてある英文の説明目錄に、一々其の觀察を記入せられるのであり、而かも其の間に我々に其の支那製なるや、日本製なるや等意見も徴せられたのであるが、此の寶庫に於ける唐代文明の精華と天平美術の遺芳とは、殿下をして全く陶酔の境に入らしめ、日本御來遊の意義空しからざりしを深く感ぜられたのである。而かも戲に寶庫中たゞ一品を興へらるゝならば、何を望まるゝ可きかとの問に對して、殿下は北倉の金銀平文の琴を舉げられたが、其の研究

の對象として、殿下が最も熱心なる精力を傾倒せられたのは陶器類であつて、之を棚の外に取出すことを大島總長に請はれた處、破損し易き故を以つて、一旦それだけは御許しを乞ふ旨斷られた。併し殿下の御熱心は遂に大島總長をも動かして、綠釉の陶器三箇を取り出して、御研究の便に供することゝなつた。

正倉院の南倉の階上、扉に近い床の上に緋色の絨氈を敷いて、其の上に鐵鉢形と皿形の陶器が三箇並べてある。其の前に床上にねそべつて擴大鏡を手にして、眺め入つては「ノート」を書きつゝある餘念のない六尺大の男が一人見出されたのは、九月二十九日の午後二時頃のことである。此の巨漢こそ即ち殿下否な瑞典の陶器研究家其の人であつて、三箇の陶器は殿下が中食の爲め「ホテル」へ歸られた間に、大島總長が恐るゝ取り出した御物である。殿下は其の釉の色、肌合、地質等を精細に研究せられた後、皿形のは其の地質等全く支那唐代のものと見えるが、鐵鉢形のは地質稍々寒色を帯びて、唐の陶器のそれとは違つてゐる。それ故之は日本に於いて唐釉を模したもので無からうかと言はれた。又古鐵鉢形の形式は支那には殆んど見當らぬ、或は日本に於いて發生したものであるまいかと疑はれたが、之に對して私は必ずしもさうは思はぬ旨を答へたことである。又た南倉階下の三彩の磁甎は疑なき唐品であり、此倉にある祝部風の藥壺は、棚の外に取出して研究せられた結果、是は全く日本の古墳から發見する陶器と同じであり、日本製のものであることを

斷言せられた。(但し之に類した盜器の支那六朝頃にあることも殿下は認められてゐる。)

凡そ此等の陶器に關する殿下の御意見は、從來曾て他の人々に與へられなかつた條件の下に、専門學者の精緻なる研究を試みた結果として、我々が深く傾聴するに値するものと信ずる。私は先年セイス老先生に隨伴して正倉院を拜觀した際、同じく此等の陶器の一二を棚外に取り出して觀察せられたことを目撃したが、今度の如く精しく研究することを得なかつた。此等海外の學者は多く東洋の古陶器に於いて我々に勝る知識を有し、而かも稀有の研究的機會を正倉院の御物に見出してゐるのである。私は此の故を以て殿下に眞の御研究の結果を學界に發表せられんことを慫慂した次第である。又た殿下は青石十二支の鎮子の彫刻を以て、寧ろ宋代の手法に近いことを言明せられたのは、此の鎮子が獻物帳所載の舊物と同一物に非ざる説の存在と共に、大に注意す可きものであつて、私は平安朝中葉以後新に御物中に加へられたもの、想像せられない點から、矢張り少くとも唐朝末期の手法を示すものと考へられては如何と申した處、それに賛成せられたことである。(但し是は其の背面にある「須彼天馬」等の墨書により、或は朝鮮渡來のものとも思はれる。)

殿下の正倉院に於ける陶器御研究の熱烈なる態度は、無邪氣なる東宮武官オスブリック大尉をして、次に觀覽せらるゝ博物館にも『東洋古陶器室あるやを懼る』と諧謔せしめ、私は『畏れ玉ふな、幸にして是れ無し』と笑つた程であり、正倉院の階段の上には、光力を失つた懷中電燈が、幾本と

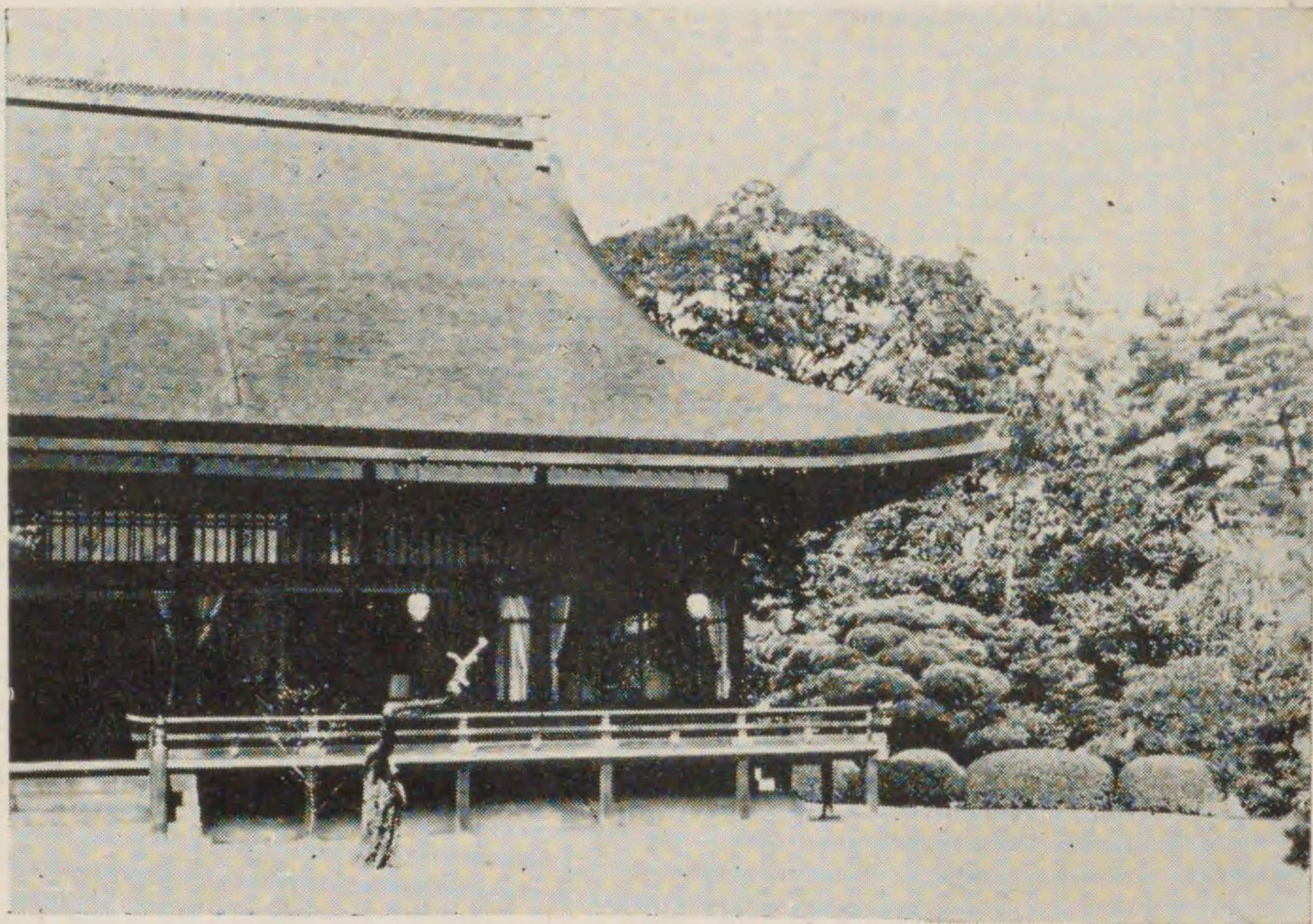
なく空彈の如く轉がつて居ると云ふ凄じい光景であり、隨行の諸員は疲勞困憊して、茫然階段の上に住眠りをし、或は休憩室に遁げ出して煙草を吹かすと云ふ有様であつた。(實は私の如きも時々其の仲間入りをしたことを白狀する)さて博物館は朝から午後三時迄正倉院を引き續き觀覽せられた第二日目の午後赴かれたことであるから(第一日目は三時以後更に正倉院の假倉を見られた)流石の殿下も疲勞を覺えられたに關らず、なほ五時の閉館時刻まで居られやうとした。是では殿下の御健康にも影響することであるから、彫刻室を一巡せられた後、山縣式部官などから、再訪を期して御退館を御勧めし、なほ力及ばざることを恐れて、私も竊に妃殿下の力を借りて無理に御退館を乞ひ、漸くにして承諾せられたが、扱て愈々入口を出られやうとする際、『矢張り今少し見よう』と引き返されかけたので、妃殿下は殿下の臂を捉へて、武を以て之を拒まれた。そこで殿下も苦笑して遂に退出せられた一場の光景は、洵に一箇の喜劇であり、而かも斯の如き熱心なる學究的態度は、我輩等の未だ嘗て他に見なかつた處である。

博物館は再度觀覽せられて、百濟觀音をはじめ推古時代の彫刻は特に殿下の注意を惹いたが、固より其他の品物にも精細なる觀察を試みられた。又た第一日東大寺大佛殿では妃殿下と共に蓮瓣の上に登つて之を熟覽せられ、三月堂戒壇院等の佛像に眺め入られたことは申す迄も無い。又た新藥師寺に於いては、特に香藥師の像を愛せられたことも、兩殿下の批評眼を窺ふに足ることと思ふ。

頭塔の森は妃殿下も其の荆棘を分け、頂上まで登攀せられ、歸途は徒歩で公園を横切り、春日野の夕暮を賞せられた。鹿寄せの如き遊覧は意に介せられず、妃殿下の爲め正倉院の一日を女子高等師範に駕を枉げらる可き一案の如きも、固より無用のこと、なつた。

三 西の京と法隆寺

殿下は正倉院に、奈良御著後の二日半を連続して費されたが、最後の日の午前に再び之を一巡せられ、名残惜しき別を正倉院に告げて、法隆寺に向はれた時、恰も朝から雨模様は空は遂に小粒の雨を落したのであつた。殿下を始め一同は、如何に天候の我々に幸したかを喜び、一路西の京を走つて、斑鳩の里に聖德太子の舊蹟を尋ねることにした。法隆寺へ著いた時は已に十二時を過ぎて居たに關らず、殿下は先づ中門、金堂、塔婆、講堂等伽藍内を大觀し、一時に近く漸く中食を取られた。私は此の時連日の洋食に閉口して、精進料理の一座に加はり、將に箸を下さんとする瞬間殿下と共に洋食辨當を取る可き旨を傳へられ、是は困つたことが起つたと、大速力を以つて二碗の飯を平げ、口を拭つて殿下の傍に座し、始めて中食する顔して二度の中食を済ましたことであつたが、此の祕密は其後別府の食卓上殿下に披露するものあつて、全く暴露せられてしまつたのは閉口した。



(上) 瑞典皇太子同妃兩殿下御滯泊中の大宮御所
(下) 同殿下の法隆寺御成(同寺講堂前)

扱て中食後法隆寺の觀覽は、瀟々たる秋雨の間に、殿下が長柄の番傘の藝當を試みられたに始まり、塔の塑像から金堂の壁畫と諸佛に、可成長い時間を費された。玉蟲厨子の翅飾を窺つてゐる際、比較の爲め其處に置かれてある硝子管入りの玉蟲の標本に、「ビュプレステデー・クリソクロー・エレガンス・ツンベルグ」と學名が記してあり、瑞典の學者ツンベルグの名が讀まれたのは、時に取つて感の深いことであつた。聖靈院の太子の御像を拜してから網封藏に入り、遂に東院夢殿にフェノロサの驚嘆して以來世に名だたる救世觀音に謁し、住宅建築の名残りと言はれる傳法堂は見遁さず、其の美しい側面は殿下のカメラに收められて、遂に中宮尼寺を訪はれた。

中宮寺ではゆくりなくも金欄の卓子掛けある上段の間の御簾の中に、兩殿下が座せられた時、今更ながら東洋の「プリンス」となられた不思議さに微笑せられたが、此の光景を尼公と共に「フラツシユ・ライト」の下に記念寫真中に收められる運命を荷はれた。美しき乙女の如き如意輪觀音と采女等の針の跡を残した天壽國曼荼羅に、兩殿下が深く眺め入られたのは今更言ふ迄もなく、妃殿下は特に佛壇の前の莊嚴の拭き清められて塵一本もなき清淨さを喜ばれた。私は「是は尼寺なれば」と申したるに『それ見給へ、女性の尊さは此處にあり』と戯れに目と指とを以て我々をたしなまれる態度を示されたのは、前日三月堂の執金剛神前の香爐の塵埃にまみれたるを注意せられた事件の後幕であつた。法隆寺の見學も日の暮れぬうちに濟んだので、兩殿下も尼公等の心盡しの抹茶の席

にゆるりと正座せられ、大和平野を一望に眺め渡す二階座敷の下には、我等も香高き緑の茶に湯を醫することが出来た。佐伯老師と中宮寺の尼公の東門まで見送られる中に、盡きぬ名残りを斑鳩の里に惜しまれ、殿下一行の自動車隊は、秋雨に砂塵收まる大和路の夕暮を奈良に向つた。

西の京薬師寺と唐招提寺、法華寺は、奈良に於ける最後の日の午前の巡遊となつた。幸に夜來の雨は霽れて、秋草兄の「水煙のあまつ乙女が衣手のひまにも澄める秋の空かな」の歌の如く、此のいみじき塔の姿を秋空に仰ぎ見ることが出来、殿下は水煙の拓本の寫眞をも撮られた。金堂の薬師三尊の驚嘆す可き製作には、兩殿下は固より最上の讃辭を放たれたが、東院堂の聖觀音像は特に愛賞せられ、又た此の堂中に陳列してあつた寶物の中、大津皇子の像は、新に寫眞を撮つて欲しいと言はれた。此の類の衣冠像は東京帝室博物館で見られた上杉の像以來、京都の博物館に於ける重盛頼朝の畫像にも、特に注意を惹かれた様に見受られた。佛足石をも見て遂に唐招提寺へ赴かれては、金堂の盧舍那佛の幽玄なる面相に深く感動せられたが、千手觀音の如き^{モンスター}惟物的の形像は、妃殿下の言に由れば、印度美術に於てのみ發達した特殊のもので、自分等西歐の美術に馴れたものには、其の美を解することが出来ぬとのことで、是は京都の廣隆寺に於いても、夙に述べられた處であり、我輩等も此の西人の見解に共鳴せざるを得ない點がある。講堂から開山堂の鑑眞和尚の肖像を見てこれにも深く感ぜられたが、御案内の住職が香染の質素なる法衣と朴訥なる態度を喜ばれ、親ら其

の寫眞を撮られた。

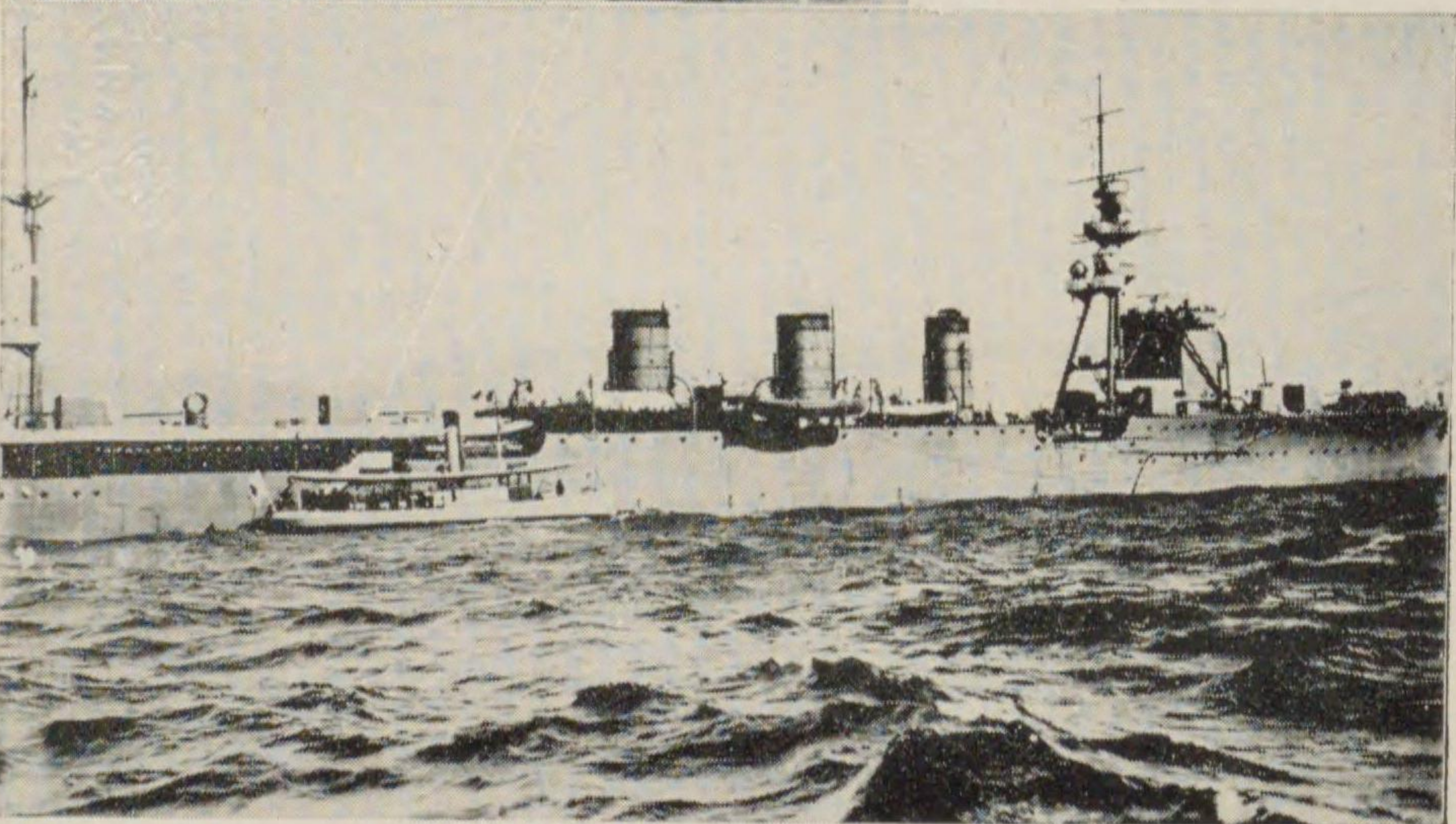
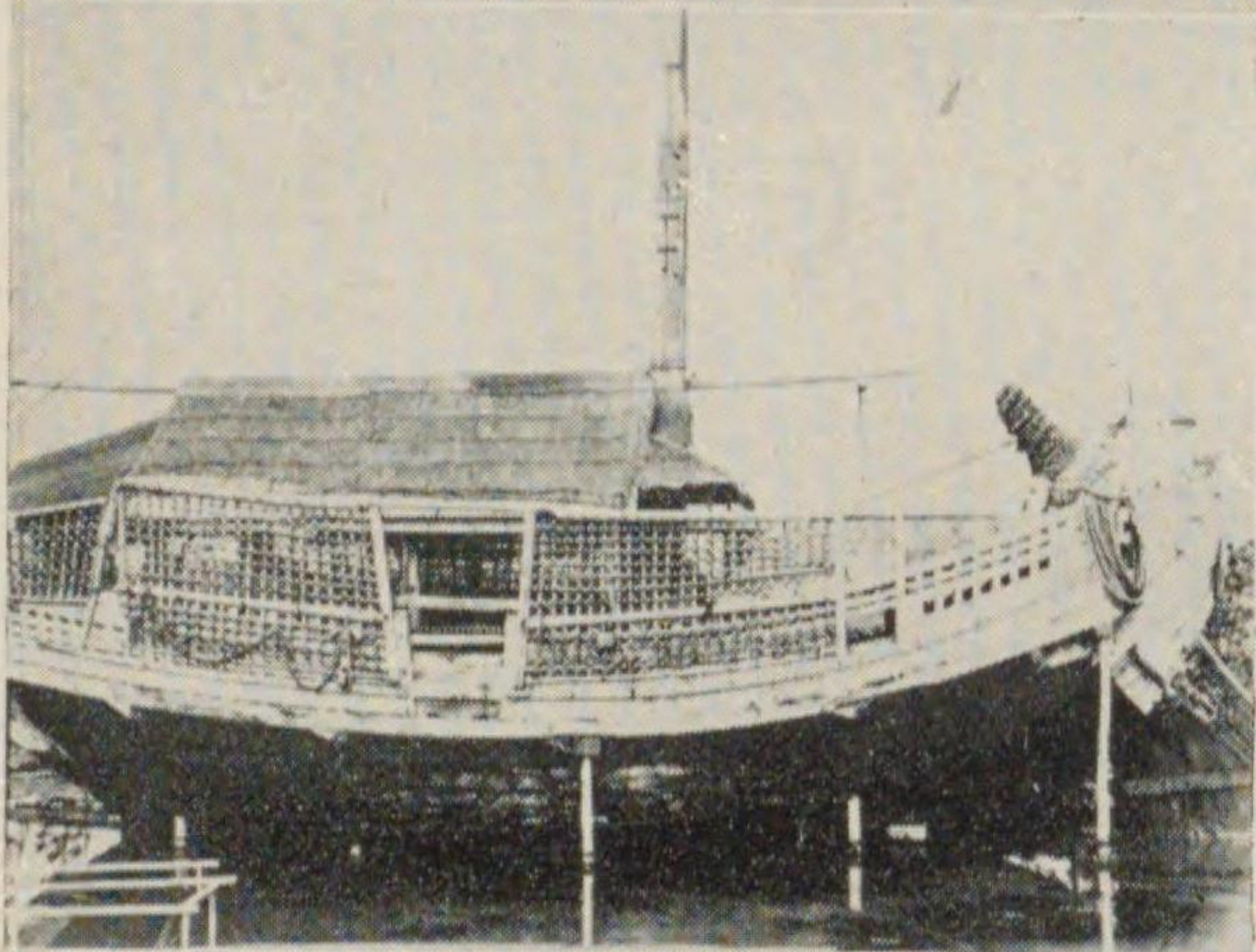
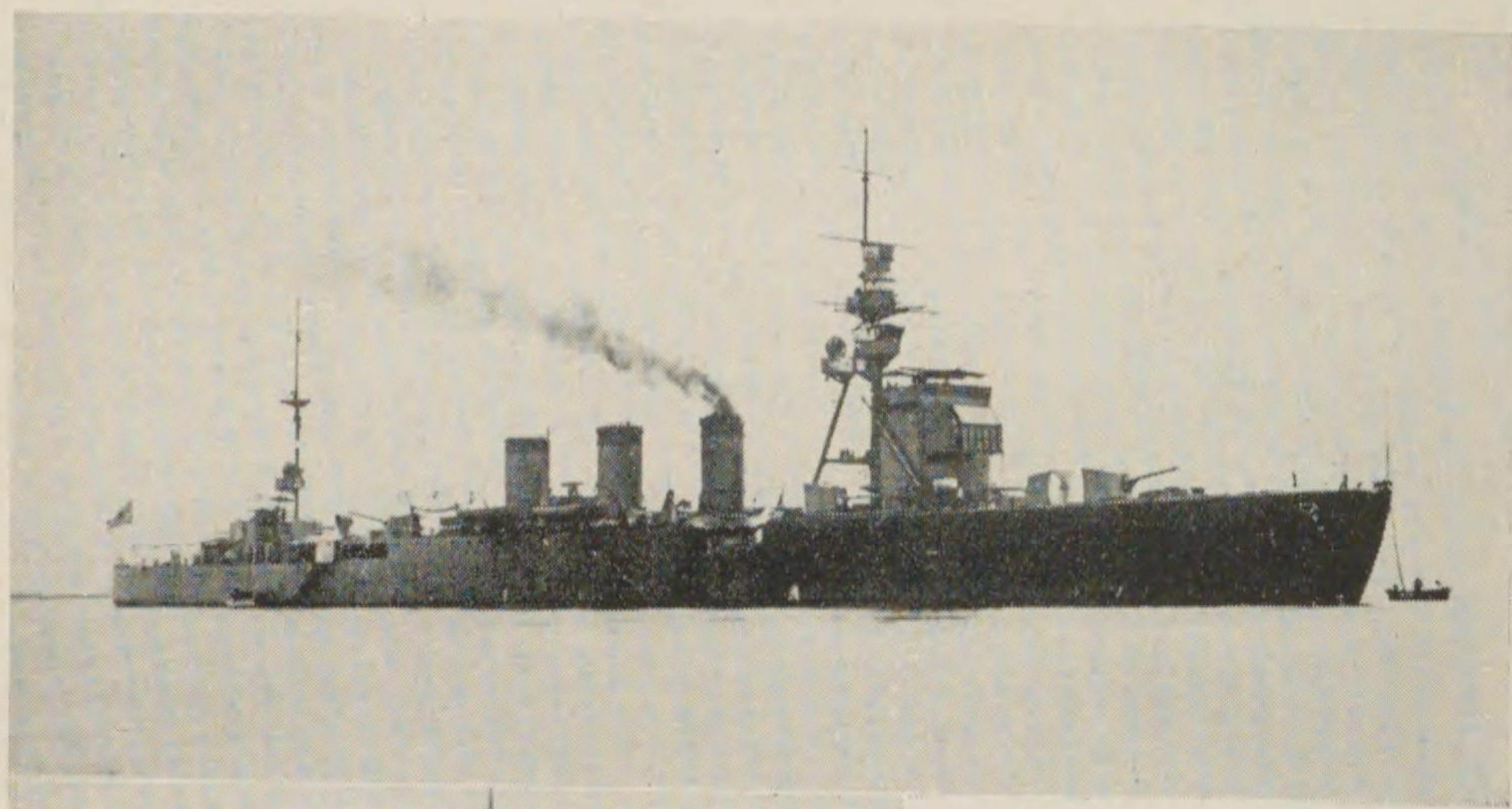
菅原伏見陵に前方後圓の墳墓の形式を一瞥し、法華寺では唯一の十一面觀音を拜せられ、犬張子の香合を尼公からの御土産に奈良へ還られ、其の日の午後は博物館を再訪せられ、なほ新薬師寺から頭塔へ赴かれたのは其の御歸途であつた。蓋し奈良は日本に於いて最大の感興を惹かれ、最も深い印象を受けられた處であることは云ふ迄もなく、「ホテル」に於いては時に九時過ぎて後、我々三人の雑談してある仲間に入つて、美術考古談に耽けられ、又た東大寺の鷺尾等諸師が、大佛蓮座の處から發掘した寶劍銀壺等の遺物を、特に殿下の爲に旅館へ持參して觀覽に供した限なき厚意には、正倉院の御物を再び自由に手にする愉快を感ぜられ、八木町の森田氏の藏品の一部を持參したのと共に深く喜ばれる處であつた。又た山縣式部官等の計畫で三十日の夜茂山の狂言（靱猿等）を晚餐後台覽に供し、大に其の御感興を惹いたのは、殿下が日本滞在中遂に能樂を御覽になる機會の無かつた遺憾を、多少醫し得たこと、思ふ。

四 住友男の支那古銅器

十月二日の朝兩殿下は大軌の電車で大阪を廻つて高野山に登られるのであつた。此の山は澤村君一人御案内を申すことであり、西田君は奈良で其の任務を終り、私は一旦京都へ歸ることとなつた

き旁々と強ひてお勧めして、大阪城へお連れ申した次第であつた。なほ此の住友の古銅器御研究の精緻を極めたことは次の一例を以ても分かる。或る一の宙の蓋は近年補作してあるので、私は嘗て「泉屋清賞」に之を指摘して置いたに關らず、スツカリ忘れて居つたのを、殿下が之は補作と思ふが如何にと注意せられ「成る程さう想はれますが、扱て私は前に何と書きましたことか」書物を翻して見て、矢張りさう書いて置いたのを發見して、殿下と共に安心したことである。なほ私は往年書き記した處を、殿下と共に精細に觀察して、其の鑑識を少しく改訂しなければならぬ點が、往々にして鮮なくなかつた事を、此處に白狀して置かねばならぬ。而して此の春物故された故男爵が若し在世ならば、如何に今度の台覽を喜ばれたことかと、其の蒐集家の亡くなつて、古い蒐集品のみに空しく世に残つてゐることを、深く悲しまれた次第である。

大阪城から歸つて朝日社に村山龍平氏の藏品を見られたが、此處では澤村君が加つて、繪畫の部は同君の説明を煩はし、涅槃圖(是は野山のものよりも勝つてゐると言はれた)、童形大師等に特に注意せられ、石佛彫刻中に於いては、天龍山の佛頭を最も稱せられたのみならず、油滴の壺は稀に見る處の珍品として玩賞せられ、立ち返りく之を手にせられた程であつた。また其の漢窯の横瓮に就いては、其の彩色に就いて疑問を懷かれ、神戸への車中私に其の意見を述べられたが、それは全く、私共の信ずる處と同じであつた。又た同車の村山翁にかの油滴の壺は、價幾何なりしかと問



(上)軍艦木曾
(下)瑞典皇太子同妃兩殿下
軍艦木曾へ御坐乗
(中)太秦の千石船

はれ、「それ丈けは」と頭を掻く翁をして、遂に白状せしめ、殿下は其の掘出しの幸福を繰り返へし祝賀せられたことであつた。朝日社では水菓子立ちながら食べらるゝ忙しさであつたが、毎日社では先づ人見嬢と會見せられ、次いで本山翁の武器甲冑及び、河内國府發見其他の石器時代の遺物を熟覽せられ、特に翁より献上した勾玉金環は、自ら「ポケット」に入れて深く愛玩せられた。斯くて殿下は其の豫てより御所望の勾玉を、期せずして献上せらるゝ意外の喜びを、大阪に於て再びせられた次第である。

午後六時發の汽車に辛ふじて間に合ふまで兩殿下は毎日社に居られ、此の夜は神戸の瑞典人の招宴に臨まれたのであるが、其の前になほ史談會主催の考古資料展覽會をも一瞥せられたのであるから、實に此の日の御多忙は目の廻る程であつた。私は神戸から自動車で直に舞子の御泊所たる住友別邸に赴き少しく休養することを得たが、兩殿下其他の隨員は午後十二時半近く、漸く舞子に歸へられ、而かも次の朝は八時の御出發であるから、多くの人は三四時間位しか寝られない位であつた。たゞ朝暾に色はゆる淡路島山を、手の届く様な目前に眺むる此の別邸に、心靜になほ半日を費すことを得たらばとは、洵に殿下のみの望みでは無かつた。神戸の埠頭には住友の人々、本山、村山兩氏等の外に、殿下の故國瑞典の人々數人も御見送り申して居つた。妃殿下が愛らしい瑞典の男女の小兒が捧げる花束を受けられ、一々懇に握手せられて別を惜しまれた光景は、見る人をして思はず

涙を催ほさした。

五 瀬戸内海と巖島

軍艦木曾に陪乗して瀬戸内海の眺めを終日怠まゝにすることを得たのは、私として洵に一生を通じて再び期し難い経験であり、此の機会を興へられた殿下と山縣式部官の厚意に感謝を捧ぐる外はない。御召艇の艦側に著くや、全員登舷して之を迎へ、殿下が舷梯を上がられると共に、瑞典の國歌忽ち起つて、此處に我等は日頃たゞ親しみ参らせた殿下が一箇の學究たるのみならず、實は皇太子の尊位にましますことを、今更ながら感じた次第である。後甲板には殿下が内海の景色を眺めながら、而かも連日の疲勞を醫して、靜に假睡を貪らるゝに適當なる椅子が具へてある。實に此の二日の内海の航海は、汽車自動車の旅行の如く、沿道の奉迎者に挨拶せらるゝ煩も無く、美術考古學の資料の殿下を刺戟するものもなく、絶好の休養と安息とを殿下と其の隨員に興へたものであり、此の「プログラム」を作つた接判官等の深意を察するに足りる。

加之、軍艦の航海に初めての経験を得た私共は、之に由つて如何に其の海軍に對する新なる知識を加へ得たことの大なるかを知らない。軍艦内殆んど到る處我々の見學に開放せられ、私は前艦橋に登つて、如何に艦長と航海長とが來鳥水道の狹隘を細心に通過するかを知り、其の間萬一の危険

に備へる爲めに、投錨防水屏の準備をさへするかを知つて、今更ながら驚いた次第である。而して此の水道を過ぎた時殿下が艦長航海長に、勳章を授けられたことの洵に以あることを知つた。航海中は特に乗込んだ軍樂隊は始終東西の樂を奏し、或は擊劍或は何と種々艦員の催しもあり、殿下は退屈せらるゝ時間もなく、海軍省から特派の料理人の手に成る中食の食卓は、水兵の給仕によつてサーヴせられ、海上の空氣に増進せられた食欲に満足を興へるのであつた。

朝九時半神戸を出帆した木曾は平均二十海里の速力を以て走り、時には二十五海里の快速を出し、特に石炭を燃かす、重油のみを以て四つの機關を悉く動かして、一路宮島に著いたのは日没前である。斯くの如く日中内海の美景を極めることは、たゞ斯る快速の軍艦に乗つたものゝみ享受する特權であるが、而かも我々は此の愉快なる航海を楽しむのである裏面に、機關室に苦惱する兵員の存在を忘れることが出来ない。其の吐き出す熱氣は甲板の上でさへ、我々を畏れしめるではないか。宮島に著いた時其處には一驅逐艦が遂に先著して御召艦木曾を迎へ、吳鎮守府の安保司令長官も來艦せられ、軍艦旗卸しの深嚴なる儀を終つて後、一同「ランチ」に乗つて上陸したのは六時頃であつた。

『宮島ホテル』に少憩して後殿下を始め我々は、『岩惣ホテル』に開催せられた縣知事の日本食の宴會に列した。宮島踊りを見、各々紅提灯を手にして海岸に出づれば、たゞ見る紅緑の燈火數千、海面に連點して一箇の龍宮城の壯觀を現出したのは、是れ殿下の爲に特に催された燈籠流しである。

次の日は生憎の雨天となり、殿下等は「ホテル」の番傘をさして公園の裏山を登り、眺望を肆まにせられたが、妃殿下の御査下まで雨にビシヨ濡れとなつたのは、聊か傷ましい光景であつた。神社の西廻廊から入つて、兩殿下は本殿に御參拜あり、其の傍に陳列した後奈良天皇宸筆の大額、平家納經卷の原物及び最近完成せる模寫、枕本尊などの寶物を御覽になつたが、特に大鳥居の壯觀は屢々「カメラ」に收められ、此の「フローチング・パレス」の建築は、其の山水の美しさと共に、定めし殿下の印象に深く残つたこと、想像せられた。又た兩殿下は大鳥居が以前から今日の如く大きなものであつたか否かを話され、京都博物館で御覽になつた「一遍上人繪傳」中に、稍々小さく描かれてあつたことを思ひ出されたが、少くとも後奈良帝の宸額の掛けられた頃は、今日の如き大きな鳥居であつたことに結論せられた。

千疊閣へ上つた頃は雨も霽れ、正午殿下御一行の再び木曾艦上の人となつた時には、昨日は多少窮屈の感のあつた軍艦も、今や懐かしい我家に歸つた心地がした。豊後灘にさしかつた頃は、少し波風が出て來たが、殆ど動搖を感じず、日没前別府灣に投錨することが出來た。僅か二日の間であるが、親しみ合つた此の艦と人とに別れる名殘惜しさは、長い航海の後商船を去る時に比べて、なほ切なるものゝあることは、殿下妃殿下其他瑞典の隨員等も「ベリー・サッド」と繰返へして言はれたのを以ても推すことが出來る。艦側から橋の上まで立ち並ぶ艦員に、帽子を振りながら別を惜

しむ暇もなく、「ランチ」は別府の埠頭に著き、陸行して此處に殿下を奉迎せられた小川博士や武藤君と車を同ふして、我等は龜の井旅館に入つた。此の夜の晚餐には、妃殿下の日本式温泉浴場で熱湯に飛び込んで、「ロブスター」の如くなつた御話から、打ち解けた談話に、一同の笑聲が絶えなかつた。

六 豊後の石佛

次の日は朝八時半出發大分から臼杵の石佛廻り、十餘年前小川博士が草深い中から學界に紹介せられて、今日殿下の御覽を仰ぐまでに名を得た石佛を、博士自ら殿下に説明せられたのは、定めし感慨深いこと、想像に餘りある所である。先づ大分元町、龍ヶ鼻の石佛から、岩薬師へ行くと、路傍に合掌する老婆の座してゐるのも可憐である。此處から十里ばかり美はしい田舎道をドライブして十一時頃深田へ著き、石の鳥居から堂ヶ迫、隠れ地藏、大日山と巡覽し、十三佛の前では小學の女生徒の給仕の茶を取り、田舎煎餅をも口にせられ、次いで仁王像、長者夫妻像、寶篋印塔へ歩を移されたが、殿下は石佛の製作を賞せらるゝ外、特に此の石塔の形を喜ばれ、又た妃殿下は彼の美しく石佛の下に、白ペンキの制札の無風流に立つてゐるのを悲しまれた。多年石佛の研究者たる小城翁には、特に握手をして深田を去られ、一同臼杵の町へ向つたが、町内の御道筋に葉の付いた

竹竿と旗とを以つて、心からの裝飾をした光景に殿下は大に喜ばれ、遂に自動車を止めさせて之を撮影せられた。

白杵城址の美はしい眺めを大觀する天幕内の中食は、たゞ陰寒なる天候の心なさを啣こたしめたが、食事を終つて歸途に就く頃に至つて遂に小雨となり、我等をして石佛の巡遊に際して、此の厄に會はなかつたことを今更ながら祝せしめた。別府の最後の夜に武藤君のツンベルグ談、御伽俱樂部の催しなどに夜を更かし、次の朝の地獄廻りは、遂に雨中の行遊となつたが、かの宮島の様な憂目には會はず、午後二時五十分別府を發して門司に向ひ、薄暮門司に著くと直に「ランチ」に乗つて下の關へ渡つた。

下の關の『山陽ホテル』に於ける晚餐會は、日本本土を後にして海を渡られる最後の宴であり、此處でお暇を申し上げる相馬式部官をはじめ、小川博士、武藤君（私も表向きには此處で任務を終つたのである）の送別の意味もある上に、山口福岡兩縣知事に朝鮮總督府からお迎へに來た松村氏なども加はつて、時の移るのを深く惜まれた。また此處では日本々士を去るに臨んで、日本の皇室をはじめ、上下舉つて歓迎し奉つたこと、また心から殿下の接判に盡瘁した人々に深き感謝の意を寄せられた懇切なる「ステートメント」を殿下から御發表になつたことは、新聞紙に見えてゐた通りである。十一時前愈々連絡船昌慶丸に乗込まれ、打ち上ぐる花火と共に埠頭を離るゝ船の上甲板

に兩殿下は、ルデベック氏夫妻、オスブリンク大尉、ウエネベルグ書記官其他の隨員と共に、陸上に帽子を打ち振る相馬、小川兩氏其他の人々、さては此の一月餘りの旅行に深い親しみを殘された日本の國土に、盡きぬ名残を惜んで、去り難てに長く立つて居られるのであつた。

（大正十四年十一月）

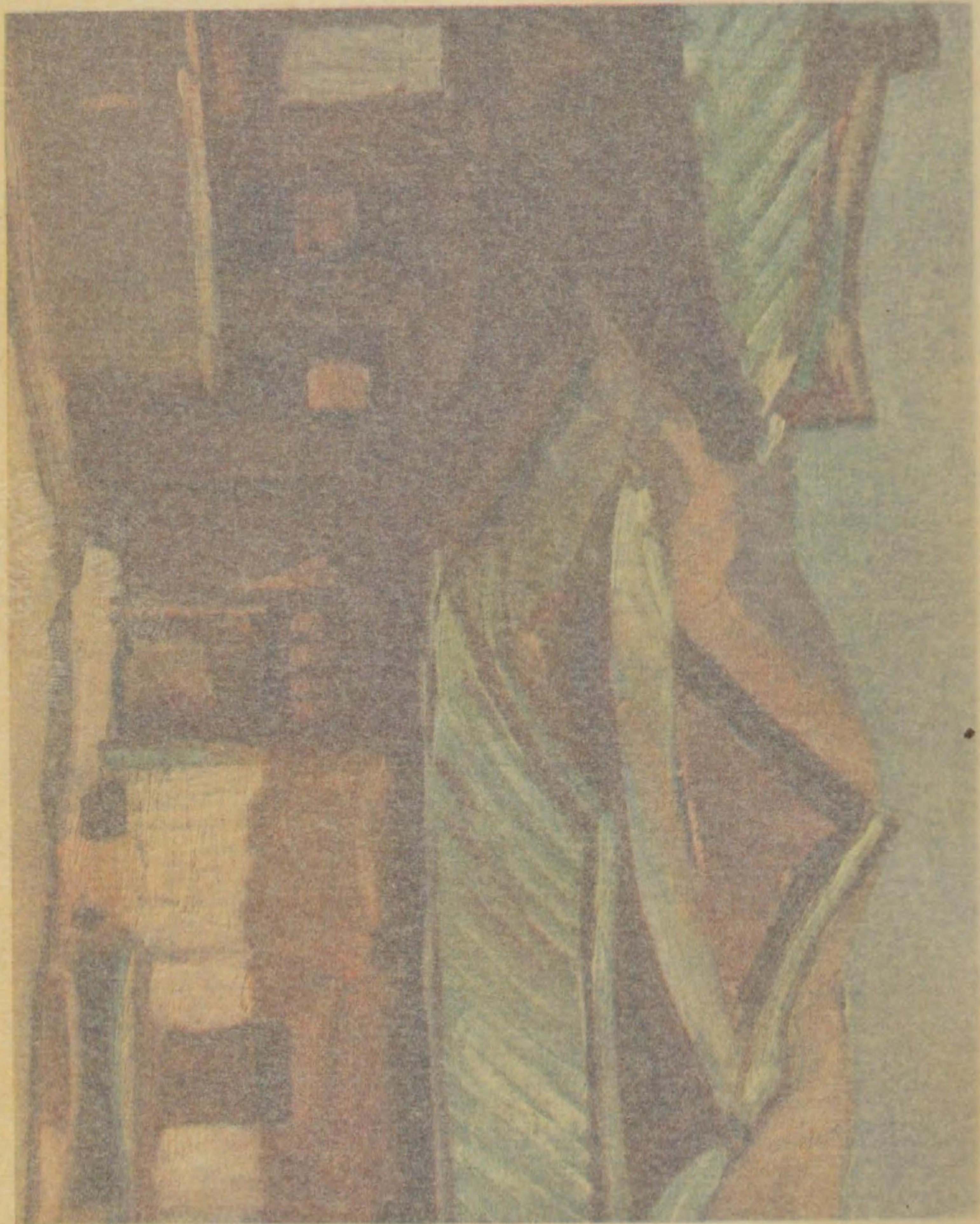
池中の千石船

太秦の廣隆寺に清瀧僧正の案内で講堂や寶庫、太子堂を觀て、天塚古墳へ行くと、ある別荘の前で車を降りなければ其の先きに道がない。しかも驚いたのは、其處の池に千石船が浮いてゐることである。これは別荘の主人が今の世にだんく、こんな和船が無くなるのを悲しんで、わざく若狭から取り寄せて、此の池に浮ばせたとの事で、殿下をはじめ一同は其の志に感心し、殿下は直に「カメラ」を取り出された。

慶州の瑞鳳塚

一 發掘の由來

考古學者たるスエーデンの皇太子グスターフ・アドルフ殿下が、朝鮮を巡遊せられる時に際して、齋藤朝鮮總督が慶州の一古墳を發掘して、殿下に親しく遺物採掘の機會を興へられたことは、東京帝國大學の下總柏井貝塚の發掘と、もに、學徒としての殿下に對する最大の厚意を示されたものと言ふべきであらう。曾てイタリーのチエルヴェテリに於いて、メンガレリー氏が私の爲めに發掘されたエトルスキの一古墳は、その規模の大小内容の貧富、もとより慶州の古墳に比ぶべくもないが、私としてこれに勝る御馳走のなかつたことを、今更ながら思ひ出づるのである。しかも今度の慶州の古墳は、近く數年前かの鳳凰臺の西方路西里において、黄金の寶冠をはじめ無数の寶器を出して、金冠塚の名を得た古墳の直ぐ西方十數間に位し、その封土は半ば鍍除せられてはゐるものゝ、必ずや相當の遺物を出すことゝ豫想せられてゐた塚である。しかし斯くの如く再び莊嚴なる勾玉附飾の寶冠を出し、その他凡てに於いて金冠塚に次ぐべき豊富なる内容を有してゐるとは、人々の必ずしも



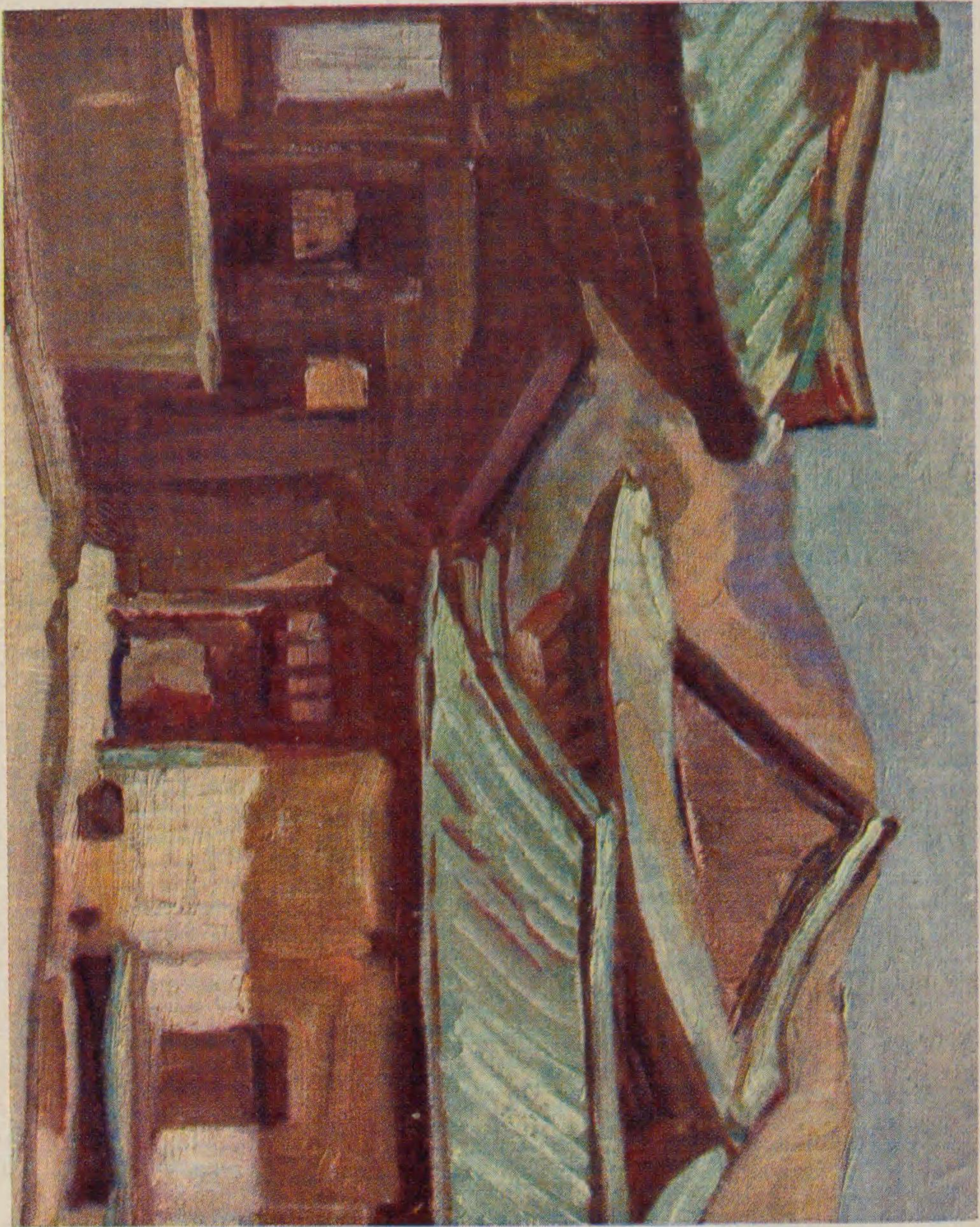
(慶州瑞鳳塚)

慶州瑞鳳塚

慶州の瑞鳳塚

一 發掘の由來

考古學者たるスエーデンの皇太子グスターフ・アドルフ殿下が、朝鮮を巡遊せられる時に際して、齊藤朝鮮總督が慶州の一古墳を發掘して、殿下に親しく遺物採掘の機會を與へられたことは、東京帝國大學の下總柏井貝塚の發掘と、もに、學徒としての殿下に對する最大の厚意を示されたものと言ふべきであらう。曾てイタリーのチエルヴェテリに於いて、メンガレリ氏が私の爲めに發掘されたエトルスキの一古墳は、その規模の大小内容の貧富、もとより慶州の古墳に比ぶべくもないが、私としてこれに勝る御馳走のなかつたことを、今更ながら思ひ出づるのである。しかも今度の慶州の古墳は、近く數年前かの鳳凰臺の西方路西里において、黄金の寶冠をはじめ無数の寶器を出して、金冠塚の名を得た古墳の直ぐ西方十數間に位し、その封土は半ば撤除せられてはゐるものゝ、必ずや相當の遺物を出すこと、豫想せられてゐた塚である。しかし斯くの如く再び莊嚴なる勾玉附飾の寶冠を出し、その他凡てに於いて金冠塚に次ぐべき豊富なる内容を有してゐるとは、人々の必ずしも



慶州佛國寺

(大田春二郎君畫)

期待してゐなかつたところである。

それは洵に殿下自らいはるゝ通り、殿下の幸運であり、總督の厚意とこれが發掘に従事して、六月以來約四ヶ月間の勞苦を忍んだ小泉、澤兩君をはじめ、これに關與した藤田、諸鹿の諸氏の苦心が、正當に報いられたものといふほかはない。しかしてそれは獨り殿下の幸福であるのみならず、これによつて學界が幾何の寄與を受くるやも知れないことである。たゞ私は『私自身必ずしも幸福であるといへない。その故は、前年から金冠塚の學術報告を書きつゝある私は、當時該金冠をもつて唯一の遺品であると誇負して居つたのに、その後梅原君は一昨年金鈴塚から第二の金冠(但しこれは勾玉が附飾せられてゐない)を掘り出し大に鼻を挫かれた。然るに今また第三の金冠が出現したので、いよいよ以て金冠の價値が少なくなつたからである』と笑つて殿下に申し上げた次第である。しかし『君の第一の金冠が出たからこそ、この度の發見もあつたのではないか』と殿下は眞面目に辯ぜられたが、實はこの殿下のために發掘した塚から、金冠と各種の寶器が出土したことによつて、さきに金冠塚の偶然的發見において、確め得なかつた幾多の事實を明かにし、私自身が金冠塚の報告にも莫大の助けを得たのであつた。

二 最初の瞥見

この殿下のために發掘しつゝある古墳の様子については、京都や奈良旅行中もしばしば殿下から質問を受けたことであつたが、下の關の晚餐の卓上において、今や黄金寶冠が半ば出現して「クラウン・プリンス」の發掘を待ちつゝあると申したところ殿下は『それは余らの幸運である。或はその冠は博物館より持つて來て埋めたのではないかを恐る』と諸諺せられた。私は『その果して然るや否やは、考古學者たる殿下自ら現場において鑑定せらるべきにて、私自身にはその責任なしと思惟す』と御答へしたのであるが、殿下は十月九日慶州へ着き、その夕直に石窟庵へ上つて、新羅の彫刻の傑作を賞せられ、次の日慶州へ赴かれることゝなつた。然るに殿下は慶州へ行つて、何よりも先きに、この古墳發掘の現場に赴かれたき無理からぬ希望を有せられたにかゝらず、慶州においては奉迎の順序上先づ第一に博物館へ御成を願ひ度いとのことであつたので、接判係の人々は大に閉口し、殿下に對して博物館にある金冠塚の金冠を御覽になることが、今發掘しつゝある金冠の比較研究に最も必要であるといふ理由を高唱して、漸くその豫定通りの「プログラム」を遂行し、しかも博物館における金冠塚發掘品以外の陳列品は、此處へ御中食に歸られた際に改めて御覽を願ふことにしたのである。

さていよいよ慶州邑の南端、路西里の民家の裏、侍天堂の奥の一古墳——私が一昨年見た時には塚の頂上が畑となつてゐたが、なほ直徑十數間、高さ二尺にも近かつた一古墳は、恰も大きな火山

が爆發して姿を消し、僅に一方に外輪山の一部をとゞめ、その代りに中央に小さな火口丘が出來上つた如く低い土丘が取り残されて、その中に噴火口の如く開かれてゐるのが發掘されたこの積石塚の中核であつた。この噴火口に飛び込んだ殿下をはじめ我々は、累々たる石塊の間、疊一枚ばかりの木棺の壞れた中に、秋の日の麗かな日光を受けて、黄金の寶冠と黄金の腰佩の一群が、燦然として照り輝くのを見たのである。

あゝこの瞬間における驚喜の情、私はその如何なるものであつたかを今詳に言ひ現はすことを得ない。たゞ殿下と妃殿下、我々一同は金冠の周圍を廻つて、感嘆の聲を放ちながら眺め入る許りであつた、この時における慶州の官民、殊には藤田、小泉、澤三君の得意と満足とは、洵に想察するに餘りあることである。先づその寶冠を見よ。打ちヒシヤがれて平たくはなつてゐるが、その花形の前立、それに下げられた數々の勾玉、かの金冠塚の冠と全く同じ形式であつて、たゞその冠の内には、以前の如く鳥翼狀の裝飾物がなく、その代りに簡単な金條の帽形があつて、その頂部に二羽の鳳凰形の板金飾が附いてゐるのである。勾玉の大多數は固より瑯玕の類の玉質であるが、中には玻璃製のものも交つてゐるのは、金冠塚に見なかつた處である。

私は殿下に『これは博物館から持ち來つて埋めたものに候や』と申したところ『洵に然らず』と莞爾として答へられ、『これは博物館から持ち來つたのでなく、これがやがて博物館へ行くのであ

ります』と私が付け加へたのに對して一同笑つて賛成せられたことであつた。

三 鳳飾の金冠

寶冠の下、胸部には小玉を連ね、その中央に大きな瑯玕の勾玉を垂れたのが、その原状のままに残つてゐる、更に面白いのは瑠璃の小玉と金桿とを組成して作つた裝飾が、明瞭に保存せられてゐることであり、これは金冠塚の遺物における梅原君等の復原が、大體において正しかつたことを示してゐた。腰部には忍冬唐草的の透彫鍔帶金具を並列した革帶が正しくこれを締めた儘に残つてゐる。この帶の右端からは楕圓形の飾板を連鎖して、下端に杏葉形の飾りを垂下した大形の繫げ物が一個横たはつてゐる。(これは金冠塚の場合においては左側にあつた)その左方帶の下からは小形の同意匠の繫げ物で、たゞその下端に或は透彫兩脚形、或は印籠形などを垂れたものが、數個見え、てゐるが、その全数はいまだ發掘を完成しないから分らない。しかしこれ等の黄金製腰佩金具は大體金冠塚のもと同意匠であつて、たゞ少し薄手の作なる感があること、その數において彼の十七個の多數に比して、遙に少い點を異にすると思はれる。

腰帶の附近には兩側に腕釧がある。各方ともその二三箇は黄金製であるが、内一箇宛は石竹色の玻璃製であり、しかもそれは磨琢を加へて製作したものである。(かくの如き玻璃の釧は以前には見



慶州瑞鳳塚發掘御觀覽の瑞典皇太子同妃殿下御一行

なかつた) またその下方には数箇の美しい指輪がある。その優しい意匠は、金冠塚のものに比して勝るところがあり、妃殿下がこれを手にせられた時、正にそのキレイな指に嵌められても適はしいものと思はれた。

小泉君は殿下に發掘の「ナイフ」を差上げて、この寶冠を土中から取り上げられんことを請ふたが、殿下は細心の注意をもつて、一々小泉君の指示を受けて「ナイフ」を動かされた手付は、全く素人ではなく、發掘の専門家たることを示して餘りあるものであつたが、この金色燦爛たる寶冠を土中から取り出し、両手に捧げて靜かに木箱の中へ納められた光景は、洵に慶州における發掘史上に特筆すべきものであつた。

次に殿下は腰佩中右端の大形繫げ物を發掘せられ、その下部から「富昌」の文字の如き漢字を織り出した絹布の斷片を發見せられたのは、頗る注意すべきことであつた。次いで腕釧附近の遺物に及ばれたが、すでに中食の時刻となつた上、他の遺物を取り上げるまでに圖面の製作が進んでゐなかつたので、一旦博物館へ歸られ、午後再びこの塚に御出を願ふことにした。中食の間に山縣式部官から殿下御來訪の記念としてこの發掘中の古墳に御命名を乞ふたところ、寶冠上に鳳凰の飾物があるのみならず、なほ青銅鏃斗(これは金冠の東方に出現してゐた)にも鳳凰の鈕があるによつて、「鳳凰塚」としては如何との事であつたが、私は甚だ結構ではあるが、この塚の東方に有名な「鳳凰臺」

と稱する古墳があるので、それとの混雜を避くるため、「鳳冠塚」もしくはスエーデン皇儲殿下御發掘の記念として「瑞鳳塚」と名づけられては一層面白かるべしと申したので、遂にこの瑞鳳塚の名を採用せられ、なほ藤田、小泉兩君等發掘の當事者の賛成をも經て、遂にこれを決定發表せられたのであつた。

また殿下はこの記念すべき瑞鳳塚の平面圖に對して、小泉君の請を容れて、喜んでその上に「千九百二十六年九月十日、グスターフ・アドルフ」と御自署せられた。

四 鏃斗と琉璃坏

博物館で御中食後、午前中見残された館内の陳列品を見られた上、車を驅つて掘佛寺の四面石佛から芬草寺の三重塔、四天王寺址、瞻星堂、雁鴨池、臨海殿址を経て月城に登られ、氷庫の内に入り、月精橋址の近くまで逍遙せられ、また民家に入つてその構造を見、家什にも興がられたことであつたが、更に南して鮑石亭に赴かうとした時、日はまだ高くして三時であつたにもかゝらず『もう暗くなるから鮑石亭は止めにして、發掘の古墳へ歸らう』といはれる御熱心さであつた。しかし私どもは古墳の方における圖面の進行を思ひ、鮑石亭は新羅の哀史に思出深き、東洋唯一の遺物なるによつて、是非御覽あるべきやう御勧めして、漸く承引せられた。

鮑石亭から歸つて、殿下は再び發掘の古墳——今や「瑞鳳塚」の名を得た古墳に赴かれた。そして上衣を脱ぎ板敷の上に横臥して、「ナイフ」をもつて遺物の探掘に没頭せられたのである。また今度は金冠の東方石塊の間に埋まつてある遺物の中、その最西方に出現してある青銅の鏃斗を取り出されることになつたが、この種の銅器はすでに金冠塚において發見せられ、また梅原君の靴塚においても出土してあるものであつて、すべて支那六朝時代の製作にかゝるものたることを示してある。しかしこの瑞鳳塚のものは、その柄は短くして木柄を挿込むべく、その注口は羊頭形をなし、その蓋に鳳凰の鈕を具へてあることは、未だ曾て他に類例を見ない處である。

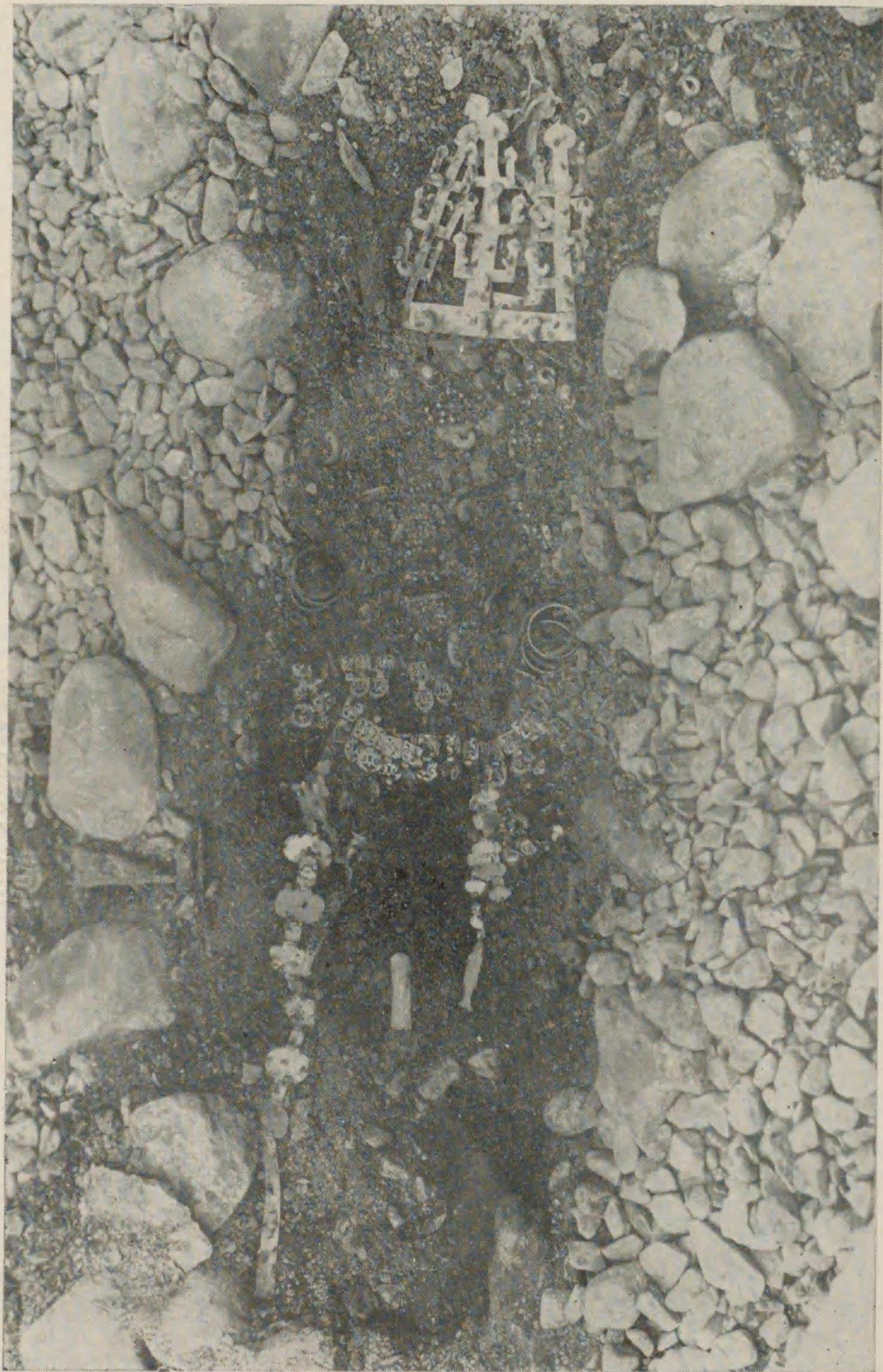
鏃斗を取り上げこれを手にして立たれた殿下は、その重いのに驚かれたが、一寸これを傾けた拍子に、羊頭の口から清水が滾々と流れ出したので、一同驚き且つ笑つた次第である。私は鏃斗の北方土器の上から出土してある約二合入りの黄金の碗のあるのを手にして、この水を受けた處、五坏を數へて終に濁水となり、漸く盡きてしまつた。なほこの黄金碗の附近その東邊からは、瑠璃色の玻璃坏(徑四寸)が奇蹟の如く石塊の間から完全に出現し、他の淡綠色の一坏は破碎して發見せられ、慶州における玻璃の遺品に、新しい種類を加へた。なほその北方には鐵釜に陶蓋を被せたのが一個現はれてをり、その他土器類はこの附近に少からず埋もれてゐるらしい。また棺槨の西端足部の邊は、未だ悉く發掘せられず、累々たる石塊の下には、或は鍍金の靴が金冠塚の場合のやうに入つて

あるかと想像された。(しかしこれは殿下御出發後發掘して、たゞ趾骨若干の外に、何等見るべき遺物のなかつたことを私は實見した) たゞこの塚において、今まで一本の刀劍をも發見してゐないことは、むしろ不思議な現象であつて、或はその被葬者が女性であるに由るかとも想像せしめたのである。

五 瑞鳳塚に「フエヤウエル」

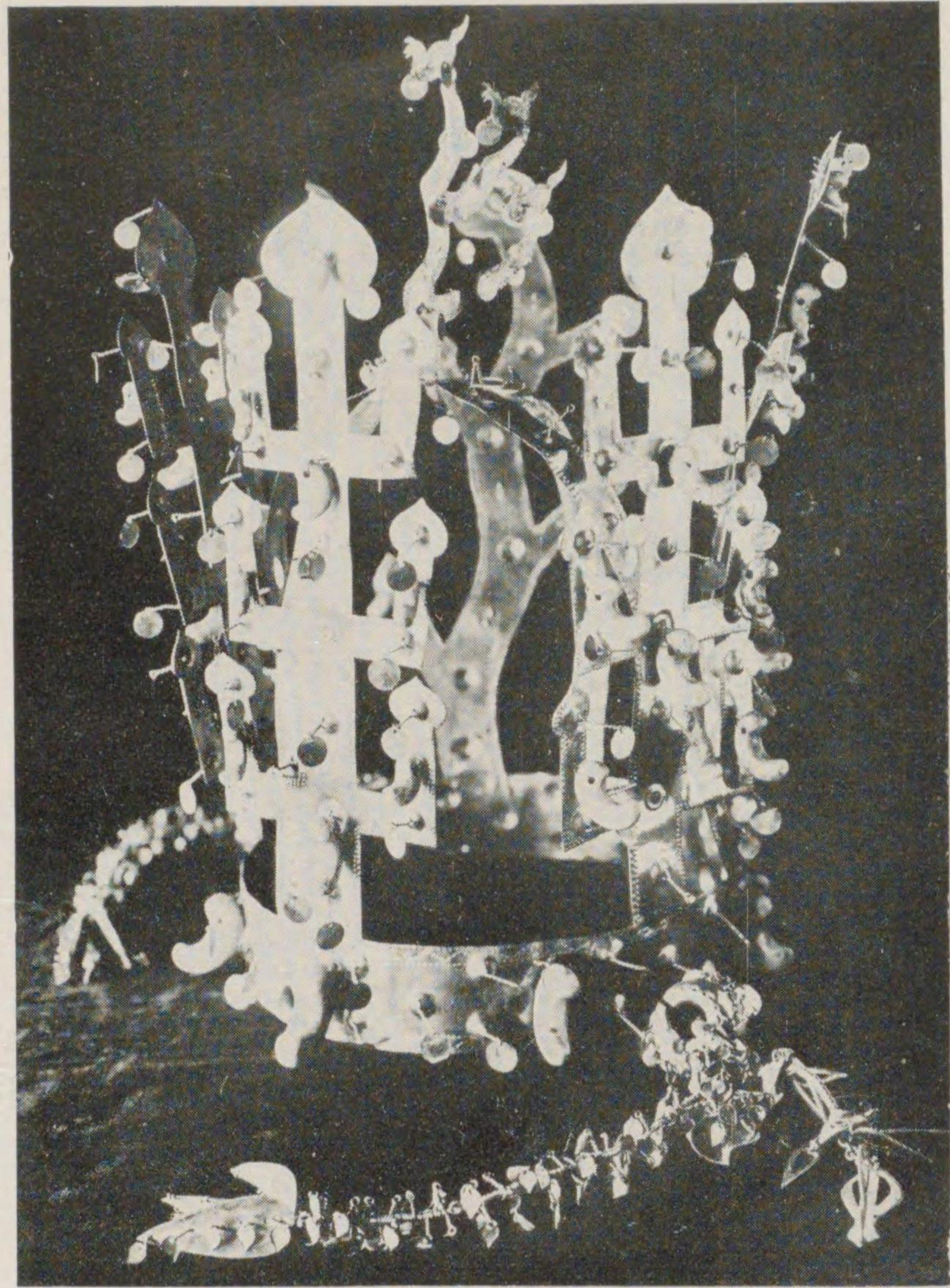
殿下が鑑斗の發掘を終られた時日はすでに西山に傾いて五時に近く、最早採掘を許さるべき何物も残つてゐないことを發見された時、殿下は頗る淋しい面持に沈まれたが『なほ二日ばかり慶州に滞在したい』といつて、イヤ／＼手を洗はれた。この有様を見た小泉君等は特に殿下の御心情を察して同情に堪へず、なほしばらく左方腰帶の下部の發掘を御許し申したことであつた。すでに塚の周圍に雷燈が輝きそめたる下に、殿下は再び一の腰佩を掘り進めて、遂に珍らしい金製勾玉を發見せられた時に、あはれ日は黄昏に達したのである。この間すでに東宮大夫夫妻東宮武官等は一足先きに佛國寺へ引き返したにもかゝらず、たゞ妃殿下のみは、夫殿下のそばの板敷の上に端坐して動かれず、少しも倦怠の色を示されなかつたのは、我々をして感動せしめたことであつた。

戀々として去りがたく再び手を洗つて、發掘者に袂別の握手をされ瑞鳳塚に「フエヤウエル」を告

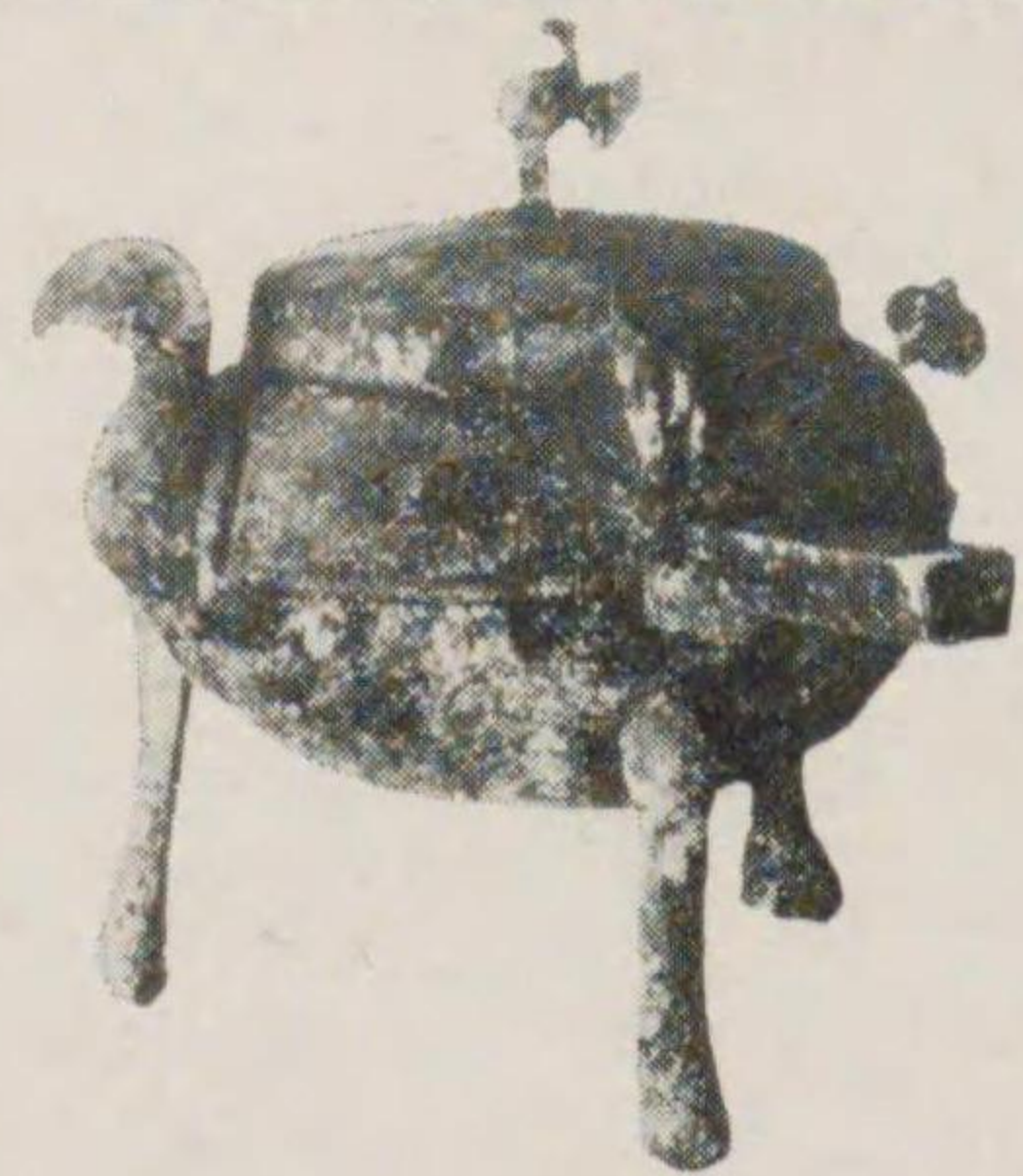


慶州瑞鳳塚遺物配列光景

(澤俊一君寫眞)



慶州瑞鳳塚發見黃金寶冠



同上鏤斗と琉璃杯

げられた時に日は全く暮れてしまった。しかも殿下はなほ佛國寺にかへられる前、妃殿下と、もに慶州の邑内を徒歩して、いぶせき三軒の古物商の店頭に、古陶と瓦片を塵埃の中から取り出されてその若干を買上げられ、七時過ぐるころ漸く夜道を佛國寺の旅館へ歸られたのである。

瑞鳳塚の詳細なる發掘報告は、やがて小泉、澤兩君等の手によつて世に發表せられる時があるであらう。しかしてこの記念すべきスエーデン皇儲殿下の關與せられた發掘は、かのボムベイにおいて一八九三年イタリー皇帝の銀婚式を記念するために、兩陛下並にドイツ皇帝の臨幸を仰いで發掘した「銀婚式の家」の如く、「瑞鳳塚」の名の下に、幾多の考古學的新事實と共に、世界の學界に提出せらるべきことは、我々の深く期待するところである。それ故私は今この稀有の機會に殿下に陪從して、この驚嘆すべき發掘を目撃し得た喜びを記念するために、たゞ見聞の次第を記述するに止めて、何等の論證を加へないことにするが、此瑞鳳塚の被葬者が、矢張り『金銀彩色の多なる栲衾新羅の國』の王者の墓であつて、金冠塚の主人の時代（西紀略第六世紀の中葉）と系譜上に於ても關係のある人の墓たることを想像する點に於て、誰人も一致するところであることを附言して置く。

六 佛國寺旅館の御別宴

佛國寺の旅館における最後の御晩餐には、殿下に陪從の最後の夜として、私も遙々慶州からこれ

に招かれる光榮を得た。顧みれば十數日間、京都、奈良、九州の御件には、洵に忙しい日も少なくなく、私の如き野人にはそのはじめは窮屈の思ひも多かつたことであるが、殿下の眞摯なる學究的態度と、その溫潤なる人格は、妃殿下の快活にして「チャーミング」なる資性と共に、常にこの美術考古行脚の一團體の精神を引率し、我々をして單に高貴なる身分の方々に従從するの感よりも、むしろ心からの友人としてこれに對する氣分を起さしめたのであり、我々はその間に幾多の教訓をあらゆる方面に得たことである。また兩殿下に隨伴するスエーデン諸員も、凡てこの團體の精神を完成するに與つて力ある人々で、實に理想的の取り合せといつても差支ない。のみならず我が接伴官の諸氏がこの御一行のために、心からの誠意をもつて努力せられたことは、誰人も感得したることであつて、眞に『御世話の仕甲斐のある方々』であつたゆゑには違ひないが、またこの一團の旅行を最も愉快に、かつ最も有益に終始せしめた一因に外ならないと信ずる。しかして私自身がこの一團中の人となり得た運命に對して、深くその幸福を感謝するのである。

然るにこの最も愉快なる行脚も私に取つては遂に最後に近づいたのである。食卓の前で殿下と、もに、たゞ時の如何に早く過ぎ行くを悲しみ、只管再會の期を希ふのであつたが、この夜はなほ「グッド・ナイト」を告ぐるのみにして、眞の「グッド・バイ」はこれを明日に残して、私は夜遅く、一人慶州の宿に引きかへした。

十月十一日の朝八時過ぎ、朴郡守、諸鹿君をはじめ小泉、澤兩君と私どもは、慶州の西南郊新羅武烈王陵の前に立つて、此處を慶州最後の御見物として、京城に向はれる兩殿下を御迎へした。かの龜跌の前において兩殿下は、吳々も州の人々に連日の厚意を謝し、記念の品々をも賜はり、更に歩を移して朝露を踏んで、金陽の墓をも訪はれたが、私は遂に此處に悲しき別れの握手を、兩殿下を始め、瑞日の諸友と取り交はさざるを得なかつたのである。朝暎斜に照らす大道を脊にして、この別離を惜む一場の光景は、ウエネベルグ氏の「カメラ」に永く收められた。

大邱に向つて一路車を連らねて走る殿下の御一行と、武烈王陵の前に残された我々とは、互に見えずなるまで帽子を振り、手巾を振つてゐたのである。(大正十四年十一月)

立たれた後

一 別離

慶州の西郊武烈王陵の前で、北歐の「プリンス」の一行とお別れして、慶州の宿へ引きかへしたのは、麗かな秋の日が黄金色の稻田に輝いて、草原には銀色の朝露が珠を置いてある朝であつた。洵にあわたゞしかつた此の十餘日の旅、外國語に拙ない而かも禮には爛ざる私の如きものが、かの一行中に加つて、如何に心苦しい旅をしたか、如何に滑稽な役目を演じたかは、今更云ふまでもない事であるが、併し此の半月の間のいみじき思出は、私の一生を通じて最も忘れ難い、又た最も懐かしいものとして永遠に残るに違ひない。初めの程は流石に氣の張つた食卓も、いつしか楽しい團欒になり、同じ學徒として、遠くからの友人として、美術考古の行脚の一團を形成し、遂には互の地位を忘れしめるに至つた「プリンス」と「プリンセス」の御姿は、遂に打ち振る帽子と手巾の中に、自動車の影と共に消え去つたのである。而して残つたものは、此の愉快なる疇昔の記憶と、一介の書生たる元の我身とであつた。

「プリンス」の立たれた後の慶州は、又た昔の儘の見捨てられた淋しい慶州である。昨日までの騒ぎと「アニメーション」とは何處にあるか。たゞ白衣の男女、茅屋、累々たる古墳、其處に横つてゐるものは古い新羅の亡骸である。私は宿へ還つて茫然として、結婚の娘を送り出した老父の如く、葬式を送り出した家人の如く、遂には疊の上に寝そべつてしまつた。何時の間にか連日の疲勞に假睡をして、眼を覺ませば、夢は瑞鳳塚の上に飛びながらも、身は慶州が將た京都か、何處に在るかを疑ふのみである。

二 羅曲

新羅の古へに歸つた慶州の一夕、私は小泉、澤兩君と共に、朴郡守をはじめ諸鹿君其他の友人の心づくしの招宴に列する喜びを得たが、更に嬉しかつたのは諸鹿君の肝煎で、慶州の妓生の粹を聚めて、歌舞の催しを見せられたことであつた。日は暮れ果て、燈火もなき路西里の狹斜街、黄金の冠と黄金の腰佩とが、なほ其儘地中に埋まつてゐる瑞鳳塚の裏手、大古墳の影黒く蟠つてゐる麓に、此處ばかりは電燈の光まばゆく輝いて、白衣の佳人が群集してゐるのは、洵に墓中の妖精が現はれて、再び新羅の盛時を再現してゐるかと思はれる。

樂は先づ靈山の曲から初まり、初中終の三章は、或は大にして高く、或は中にして低く、或は小

にして細く、大絃は忽にして嘈々急雨の如く、小絃は暫くにして切々私語するが如く、羅曲の哀音之に盡きるかと思はしめる。樂器は長鼓を中にして、左には七絃琴と伽椰琴、右には洋琴、洞箏と笙の七種であるが、此のうち「三國史記」などに見えてゐるものは、たゞ伽椰琴と七絃琴であり、それも漢土の制を襲ひ、朝鮮化したものであるのみならず、今日傳はつてゐるものは、果してどれ丈け古制を存したものであるかは分らない。又た洋琴の如きは頗る近代の輸入であることは言ふ迄もなく、靈山の曲の如きは、新羅の古曲に其の名を見受けなが、其の「メロヂー」は飽くまで朝鮮の古樂のそれを傳へたものである。新羅の聲調は國民の音樂から消滅したと見ることは出來ぬ。

次には詩調、これも初中終の三章、平緩急高の四調を奏でて、遂に處士の歌となり、劍舞の一齣を舞へば、遂に鳥打領から破宴の曲の亂調となり、其の間妓生の教師崔氏が靈山の一節を奏すれば流石に老巧の名手、年若い妓生の樂に比較す可くもない。坐中の妓生の大抵は往來でも時々顔を見合はず連中であるが、其のうちに一生咸南紅を見出したのは、私の最も意外とする處であつた。曾つて此の妓を旅館に招いて、其の姿を畫いたことがあつたが、後年再び慶州を訪れた時には、已にさる富豪の手折りの花となつて、復た見ることが出來なかつた。然るに今宵は特に我等の爲に七絃琴を奏す可く、此の席に列したと云ふのは、聊か懷舊の情をそゝるものがあつた。曲は盡きて興は去らず、慶州の秋の夕べは、たゞ此の羅曲の餘韻に更けて行く。



慶州妓生成南紅嬢

三 鹿の子

急に沈まりかへつて淋しい慶州の宿に一夜を明かし、次の日の午後には、京都から能勢君がやつて来たので、私は旅装も解かない同君を拉して、小泉、澤兩君と共に佛國寺の「ホテル」に赴き、そこから直に内地へ旅出つことにした。此の兩君が六月以來の勞苦も終に報いられて、かの金冠と共にあらゆる寶飾を出した古墳は、遂に瑞鳳塚の名を得て、「プリンセス」の來遊は長く記念せられることになつたのである。斯くて此の一日の清遊が、大任を果した兩君の爲に多少の勞を醫すると共に、朝鮮初遊の能勢君の爲にも、最も愉快なる第一印象を残すことになる可きことを、私は信じたのである。

柴田旅館の前には私の出發を見送つて、朴郡守諸鹿君をはじめ三四の諸君が、わざわざ集まれたのは、何時もながら洵に恐縮の次第であつたが、自動車の將に出發せんとする瞬間、私は三年前梅原君の金鈴塚の發掘を見に来た時の事を、思ひ出さざるを得なかつた。而して私はM君に『やあ今度は鹿の子が居りませんネ』と云ふと、M君は『イヤあの時は全くやられましたよ』と大笑せられたうちに、車は動き出した。

私は佛國寺への車中、久しく忘れて居つた此の鹿の子の話を、諸君に披露するの機會を得た。それ

は今日と同じく私が慶州を出發する際の、自動車の上の話であつた。其の時も今日と同じ諸君が、矢張り私を見送られたのであつたが、たゞ違ふのは其れは晩春の頃であつた事と、乗合自動車の出發した旅館の前の出來事であつたことである。

私の乗り込んだ車中には、早や二三の鮮客の外に、二人の内地男女夫妻が席を占めて居つた。其の男女の顔に何だか見覚えのある様に思つたのも道理、それは私達が昨夜某旅館で興行の女浪花節を、聞きに行つた時の語り手であつたのである。又た多少見違へたのも道理、今日は白粉も塗らないう女の素顔を見たからである。私は十數年振りに聞いた此の田舎浪花節に、カナリ感心をしたが、氣の毒な事には其の席には僅か二三十人の入りしかなかつた。それ故彼等は大きな失望を以て、慶州を切り上げて行くのであらうと察した時には、同情の念に堪へなかつた。

然るに其の時我々の自動車の前を一人の鮮人が、猫程の大きな鹿の子を抱いて通り過ぎた。之を見たM君は鮮人を呼び止めて、其の鹿の子を賣らないかと云ふと、賣らぬと答へるのを切りに誘惑すると、其邊の鮮人等も賣れよ〜と勧めたので、遂に三圓なら賣ると云ふ事になつた。然るにM君は更に二圓にせよと値切つた處、それでは賣るのは嫌と、サツ〜と向ふへ行つてしまはうとする。其の瞬間私共の自動車から聲があつて、『三圓で自分が買ふ』と財布から逸早く金を出して買つてしまつたのが、件の浪花節語りの夫婦であつた。而も鹿の子の爲めにわざ〜車を降りて、『ミルク』

の罐まで買つて來たのに、呆氣に取られるM君や其の他の人々を後にして、自動車は出發した。

私は慶州に残つた人々が如何なる話題を、此の鹿の子から惹き出されたかを知らない。恐くは『よくも買はないで善かつた。どうせ育て上げることは六ヶ敷い』乃至は『家内に叱られないで濟んだ』と云ふ様な類であつたと推察したのであるが、此の貧しい旅藝人、而かも昨夜の様子では、頗る景氣の悪い興行を慶州に續けた彼等が、其の軽い財布をはたいて、此の鹿の子を買つた藝術家肌の意氣地を、感服する外はなかつたのである。

車中に可愛らしい鹿の子は、オゾ〜として何うしても『ミルク』を飲まないのに、いつの間にか抱かれてゐる細君の膝におシッコをする騒ぎ。其のうち自動車は蔚山に著いて、彼等は鹿の子を大事さうに抱きながら、降りて行つてしまつた。

私は此の同じ佛國寺行きの中に、此の鹿の子の話を諸君としながらも、かの浪花節語りと鹿の子の運命を、思ひ廻らさざるを得なかつた。

四 佛國寺旅館

朝鮮に心持の宜い宿屋は多くとも、此の佛國寺旅館に若くものは少なからう、其の廣々とした慶州の平野に臨んだ高臺にたゞ此の宿屋が一つ、佛國寺の古刹の前に立つてゐるのである。其の朝の

景色、其の夕べの景色、さながら海岸にも似た廣裕な眺望を有しながら、磯打つ浪音もない静けさ。更に其の食事や待遇に就いて譁辭を並べることは、宿屋の提灯を持つ嫌疑を招くから、此處には之を述べないが、假令虐待せられても、食ふものが無くとも、此の吐含山麓の景色を悪口するものがあるまい。

北歐の「プリンス」は此の山間の宿屋に二夜を過ごされたのである。併し其の時は不幸にして、此の静寂な閑居の気分は、處せまき迄つめ込まれた人々の爲めに、大きに傷けられたに違ひない。更に憾らくは西洋の寢臺が日本座敷に用意せられて、天井は低く見えてしまひ、温突部屋は食堂に改造せられて、其の香の高い油團は隠されてしまったのは、「プリンス」も却つて之を悲まれたこと、推察するのである。

私共は幸か不幸か此の佛國寺旅館に寝る可き部屋もなかつたので、慶州の宿に逗留したのであつた。而して日本食の舌鼓を打つ樂しみを誇つた處、「プリンス」はそれでは「ホテル」の食事に招待して其の機會を失はしてやらうかと戯れられたことであつたが、私は此の佛國寺の旅館に於ける最後の晚餐に招かれた時には、たゞ名残惜しき夕を語りつゞけて、洋食の不幸を啣つことを忘れてしまつた。

今や私共は「プリンス」の立たれた後、此の旅館を占領してゐるのである。「プリンス」の寝られ

た同じ部屋を、今ま私共が占領してゐるのである。再び元の静けさに歸つた佛國寺の旅館には、閑古鳥も鳴きさうであるが、私は其の閑寂な昔ながらの旅館を喜ぶと同時に、又た賑かであつた昨日の夢の如くに消え去つたことを悲しむ外はなかつた。其處には金色燦然たる寢臺の影も無く、取り外つされた齋藤總督の筆蹟の額面も未だ掛けられて居ない。かの晚餐の卓子に美はしく置かれた絨氈の敷物は、今は何處へ行つてしまつたか、カラ／＼と打笑はれる賑かな「プリンス」の聲は未だ耳底に残つてゐるのに。

朝寢を食つた我々は、かの「グロリーヤス」の曉色を充分に味ふ機會を失つたが、小春日和の暖かい山路に、雛菊の咲き亂れた間を、三日目に再び五度目の石窟庵上りを試みた。私共四人の前には「ミチシルベ」の昆蟲が飛び去り飛び止まるばかり、前にも後ろにも煩はしく付き添ふ人々はなく、此の静かな山路を徐ろに語りつゞけて登り得る長閑さよ。あゝ「プリンス」も斯の如くにして此の山登りをせられたならば、一層此の山路を樂しまれることであつたらうに。「プリンス」と「プリンス」の休まれた床几は、坂道の一端に空しく立つてゐる。其處に腰を下ろしても、前面に立ち塞つて、活動寫眞を撮る人は勿論現はれて來ない。

併し石窟庵の佛像の美はしさは、あの時も此の時も變りはなかつた。其の神々しい歡迎の姿、優しい浮彫の菩薩。新羅の昔からなほ永劫の未來に至るまで、少しも變らぬであらう。

五 歸り路

石窟庵を下つた我々は、慶州と日本とへ別れに、此の佛國寺の旅館を去らなければならなかつた。私は蔚山から釜山へ乗合自動車の獨り旅の運命も、旅館の主人が蔚山まで魚を買い出しに行くのと同行して、輕便鐵道の車中の孤獨を免れた。蔚山では車の出發を待つ間に、小學校の運動場を覗いて、無邪氣に遊戯する鮮童を見た。而して十里の道を釜山へ走り出した間には、たゞ自動車に酔つて青ざめた老婆をいたはつて、わざ／＼車を止めて嘔吐をやらし「吐き度くなつた時には云つて下さい」とさへ付け加へた親切な運轉手に感心した外には、東萊の溫泉にも足を止めなかつた。

釜山の「ホテル」に這入つて、茶を命ずれば、直に勘定書を出すのは當り前であるが、五日前我が「プリンス」の御件をして此の「ホテル」に休憩した時の自由を思ひ出さざるを得なかつた。晚餐の食堂にはたゞ一人食卓に着いて、蠟を燭むが如く淋しい食事を取つた時には、派手やかな往路の旅をそゞろ懐かしむ心が起つて來た。たゞ景福丸の船路だけは往路の旅と同様に、大なる浪に搖られたのは、必しも嬉しいことではなかつた。而かも曉け方汽笛を鳴らし續けて、難波船の救助に向つた際には、浅い夢を破つて我々を驚かした。

下の關からの車中には、たゞ辨當と新聞とを買つて、默然と一隅に獨居し、ウト／＼と假睡して

は内海の眺めの眼を醒し、此の海の上を「プリンス」に陪して軍艦で快走した一週間前の旅を思ひ浮べた。併し私の無言の行はゆくりもなくも、隣席の子供によつて破られたのは是非もなかつた。

『おぢさんは、どうして一人なの、お母ちゃん居ないの』とは、母と旅をしてゐる五歳の子が、啞者の如き私に呼びかけた第一聲であつた。私は洵に龍宮の夢から醒めた浦島が一人取り殘されて故郷に歸る旅である。子供もなければ妻もなく、たゞ小さい鞆一つを伴侶としてゐるのである。併し此の子供の聲には答へざるを得なかつた。而してやがては其の親なる人にも『イヤ佛頂面をしてゐました私も、子供には叶ひません』と兜を脱いで話し合ふことになつた。なほ其の人の友人で隣席にある若い夫婦の人とも名刺を交換しなければならなくなつた。

其の人は私の名刺を見て、驚きながら『それではあの支那服の』と云ふのは赤面せざるを得なかつた。世間の人はあれ以來私がいつも支那服を着てゐるものと思つてゐるかも知れないが、私は今日は洋服である。此の文章の舊知に會つた私は、淋しさを免れて話をつづける喜びを得たが、たゞ一つ困つたことは、今まで路傍の人の如く其の細君をも眺め得た自由の奪はれてしまつたことである。而して神戸で此の人々と別れてしまつた私は、支那服を着てゐない代りに、出迎へる細君もなく、振り捨てられる心配もなく、獨りガタ／＼の「タキシ」を雇つて、夜道を小暗い茅屋に急ぐ外はなかつたのである。（昭和二年十一月）

考古學者としての瑞典皇太子殿下

一

スエーデン皇儲グスタフ・アドルフ (Gustavus Adolphus) 殿下は、本日より御退京、京都、奈良、大阪地方の美術考古學見學の御旅程に上られるのであるが、殿下の考古學に關する造詣と功績について、ストックホルムの國立博物館長エリック・ウエッテルグレン (Erik Wettergren) 氏が書いたものがあるから、今その要領を譯して、我々がこの北歐の皇儲殿下を高貴な國賓としてよりも、むしろ一個の考古學徒として歓迎せんとするゆゑを明にしたいと思ふ。

グスタフ・アドルフ殿下は、今王グスタフ第五世陛下と皇后ヴィクトリヤ陛下との皇子であつて、千八百八十二年(明治十五年)御誕生、今年は日本流の數へ年四十五歳にならせられる。千九百五年、英國のコンノート公アーサー親王の女マーガレット・ヴィクトリヤ内親王と結婚せられ、四男一女を擧げられたが、皇太子妃は不幸千九百二十年薨去あり、今の妃は二十三年に再婚せられたバツテンバークの家のルイス女王殿下(千八百八十九年御誕生)である。



瑞典國皇太子グスタフ・アドルフ殿下及同妃殿下

グスタフ・アドルフ殿下が現在スエーデンの學術界、特に美術考古學の方面における活動に貢献せられつゝある顯著なる事實は、必しも皇太子であられるといふ理由からではなく、全く殿下の學者としての性格と活動とに本づくのであり、またスエーデン學界が今日の地位を獲得するに至つたゆゑは、同國の皇室特に皇太子殿下の保護奨勵に由るところが多大であるといはれてゐる。

殿下の學術や藝術に對する趣味は、ベルナドット (Bernadotte) 王家の過去の歴史にその背景を求めることが出来る。スエーデンの美術史上永久にその名を留むべき人が、少くとも二人をこの王家の中に發見せられる。即ちその一人は殿下の伯父オイゲン (Engen) 親王であつて、親王の畫家としての有力なる位置は、獨り國內においてのみならず、外國においてもまた認められる所であつて、スエーデンの風景畫に深い抒情詩的の調子と、裝飾的效果とを賦與することを試みた畫家の派に屬し、スエーデンの夏の夜の夢のやうな軽い調子を表現した、最も記念的の作品を創作した人の一人は實にオイゲン親王である。

更に溯つてオイゲン親王の伯父カール十五世王も、また美術上最も記憶すべき人であつて、かのスエーデン國立博物館は同王の創立する所であるのみならず、同館の裝飾美術の一區は、全く王自

身の聚集品を本として、出来上つたものに外ならぬ。

その外グスターフ五世、オスカル二世等も皆な美術やその他の學術に多大な興味を持たれた方である。殊にオスカル二世王の保護の下に、かのエリック・アドルフ・ノルデンシヨルド (Erik Adolf Nordenshold) の北極探検、スヴェン・ヘーデン (Sven Hedin) の中央アジアの探検が行はれ、スウェーデンが地理學的探検史上不朽の名を留めるに至つたのである。

三

かくの如き背景はグスターフ・アドルフ殿下が、傳統的に美術や學術に興味を有せられるゆゑんを説明するのであるが、殿下はこれ等過去のベルナドット家の誰人よりも、更に一層深甚なる興味を以て、自ら學術の研究に没頭せられてゐるのである。

殿下は先づ最初にスカンデナヴィヤの考古學に興味を感じられたが、この方面においては前世紀の末期から今世紀の初頭において、非常な研究の進歩を見、ヒルデブランド (エミール及びハンス) ベルンハルト・サリン、オスカル・アルムグレン諸氏、殊にはオスカル・モンテリウス (Oscar Montelius) の如き大學者によつて先史時代の年代が確立せられ、舊石器時代から歴史時代に至るスウェーデン國民の文化的發展の状態が闡明せられたのである。年若い殿下はこの研究に刺戟せられ、早くも十六

歳の夏ゾエーデルマンランドのツルガルン (Tullgarn) に夏休みを過ごされてゐる際、古代の遺跡に富むこの地方の考古學の研究に手を着けられたが、大學の業を終つて後、スウェーデンのオクスフォードともいふべきウプサラ (Uppsala) の古い大學において、オスカル・アルムグレン (Almgren) 教授の指導を受け、スウェーデンの考古學を専ら研究せらるることとなつた。かくて殿下出資の下に「ハーガにをけるビヨルン王の塚」(King Bjorn's mound at Haga) の貴重なる遺物の如きものも発見せられ、スウェーデンの青銅器時代の最も顯著なる発見が成就せられたのである。

次に殿下はツルガルン附近発見の古物の學術的目錄の聚成に努められたが、千九百六年結婚せられて後、スウェーデンの最南端スコーネ (Skane) のソフイロ (Sollerö) に閑居をトせられ、この地方の豊富なる遺跡を發掘するに専心せられた。特にその石器時代の研究に興味を持ち、千九百五年、七年、八年の夏には、アルムグレン教授の下に、千九百二十年、二十一年にはオット・フレージン (Otto Fredin) 教授の下に精勵發掘の事に従はれた。その結果はスウェーデンの王立學士會院の雜誌「フォルンヴェンネン」(Fornvännen) に寄稿せられたが、その鋭利なる觀察と敏捷なる結論は、専門學者の等しく賞讃するところであつた。

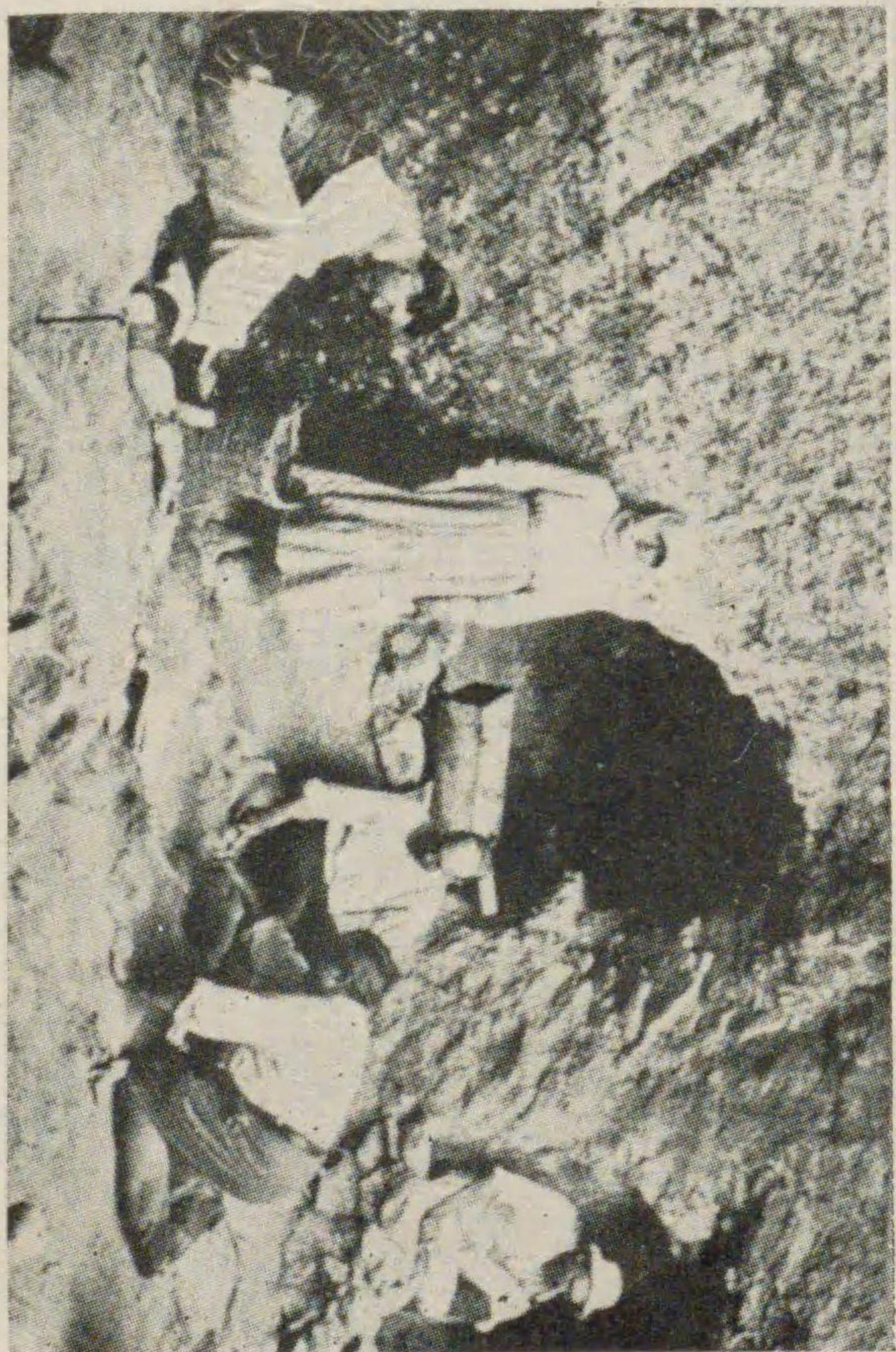
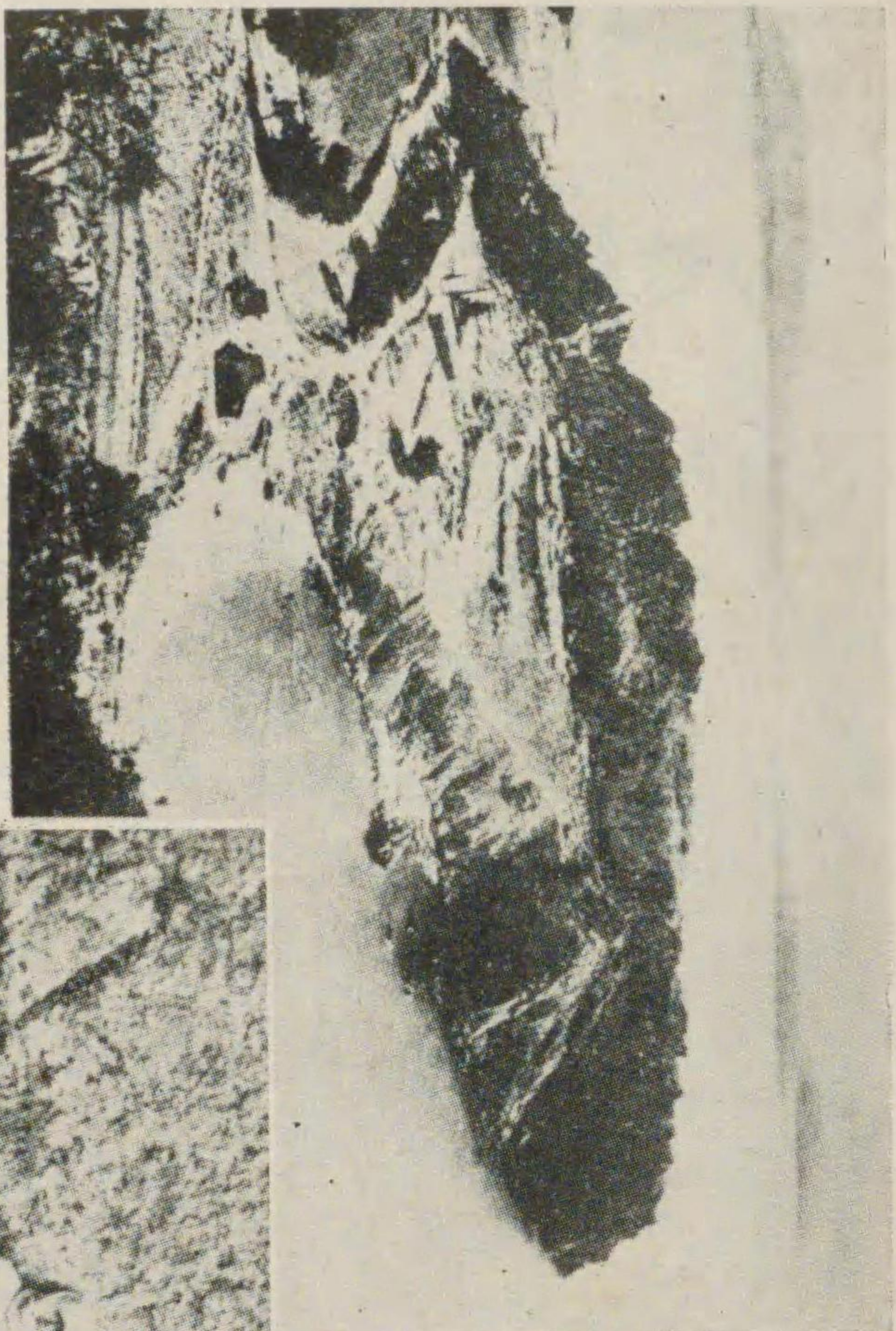
四

スエーデン本國の考古學の研究から、殿下は遂にギリシヤの考古學の研究に乗り出し、北歐の一國をして英、佛、獨その他の諸國と共に、古典的國土の研究の仲間入りをなさしむるに至つたのは千九百二十年の事である。アテネの諸國學會の學者とも相談し、ギリシヤ官憲とも打合せ、遂にかのホメロスの詩篇に歌はれてゐるアジーネ (Asine) を發掘することとなり、殿下出資の下に千九百二十二年發掘を開始し、廿四年これを繼續し、本年その事業を終了することとなつてゐる。

アジーネはアルゴリス州のナウブリヤから東南六哩ばかり海角の端に近く、その城山と下市と墓地とが残つてゐる。城山にはキクロプス式の大きな石壁と、大廣間「メガロン」の遺物があり、後者には壁畫の殘片も既に發見せられてゐたのを、殿下指揮の下にスエーデン學者の發掘が行はれたのである。

この發掘の結果は今なほ繼續中で、未だ完成せられてゐないから、こゝに詳述するを得ないが、殿下はナウブリヤの質素なホテルを本陣として、日ごとに發掘地に臨み、親から作業服に身を固め、鍬を手にして、泥まみれになつて、一行中夕暮最も遅くまで働くのが殿下であるといはれてゐるほど、熱心をもつて活動せられたとのことである。

このアジーネの發掘によつて、我々はかの有名なるミケーネ、チリンスと相並び、アルゴス灣頭に最も突出してゐたこの都市が、丁度真直ぐに相對するクリート島のミケーネ時代以前にミノス文



(上)希臘アジーネの遺跡
瑞典皇太子殿下

(下)アジーネ遺跡發掘の

化と如何なる交渉があつたかを明かにすることが出来るのである。そこには家屋の遺跡があり、又それは墳墓にも用ひられたといふ事實、多数の土器、石印等の発見の外に、最も面白いのは大きな甕(ヒトス)に小兒が葬られてあつたことである。そして次にクリート島とギリシヤ本土との交通が絶えた暗黒時期の状態が、このアジーネの發掘から知られると期待せられてゐるのみならず、ミケーネ時代の遺物は二十ばかりの横穴墳墓から豊富に發見せられた。

殿下ははじめギリシヤ・スエーデン考古學會を設立せられる計畫であつたが、これは見合せとなつた代りに、本年二月ローマにスエーデン學會を設置せられ、少壯有爲のベルナルド・ボエチウス氏(Bernard Boethius)がその會長になつた。かくてスエーデンは今や新進の勢ひを以て古典諸國における考古學的研究の仲間入りをして、その活動は將來刮目すべきものがある。

五

グスターフ・アドルフ殿下の考古學的活動は、しかし單に西歐の分野に踰踏せず、更に東亞の方面にも擴張せられて、こゝに我々東亞學界と大なる關係を有することとなつた。殿下は千九百廿一年設立の東方學會の創立者の一人であり、又その會長となられたが、同時に千九百十八年創設の『支那委員會』(China Committee)の會長でもある。殊にこの委員會は支那の地質調査に當つてゐるヨ-

ハン・グンナル・アンダーソン (Johan Gunnar Andersson) 教授後援のために作られたもので、始めはノルデシヨールドの北極探検に行を共にしたパランドル氏 (Admiral Palander) が會長であつたが、その死後殿下自身がその位置を襲はれたのである。

この支那委員會の後援によつてアンダーソン教授が、考古學的未開の大分野なる支那において、地質調査の傍遂行した考古學的研究が、如何に科學的であり、如何に重大なる寄與をなすに至つたかは、既に我々が今日東亞考古學の最も重大にして、且つ興味ある問題の一として取扱ひつゝある彩色土器の發見者が、アンダーソン氏であるといふことを、一言するだけで足りると思ふ。

アンダーソン氏は千九百二十二年奉天省沙鍋屯の洞穴中において、石器時代の遺物と共に、彩色土器の破片を發見し、次いで翌年河南仰韶において同様の發見を行ひ、更に一昨年は甘肅において更に豊富なる彩色土器の採集をなし、その一部分はスエーデンの國都に携行し、西歐の各専門學者と共に研究されつゝある。この彩色土器と同系統のものは、早くパンベリー氏のトルキスタン探検の際に、アナウ (Anau) において注意せられてをり、西は東歐の諸國までも關係がある。こゝにおいて石器時代の末期に、或は西方の人種と共に、或は單に文化のみが、西方から東漸して支那に流入したことを想察せられるのであり、すでにアンダーソン自身の外に、同じくスエーデンの支那語學者——恐らく現代世界における第一人者たる——カールグレン氏 (Karlgren) の如きも、これに關して一

個の意見を立て、をる、實に東亞文明史上最も重要な問題の一は、繋つてこの彩色土器にあるといつて宜しい。これに關していま詳しく書き記す違はないが、殿下保護の下にアンダーソン氏は、まずその研究を進めてゐるのである。殿下がこれに對して如何に大なる注意を拂つてをられるかは、過日私が霞ヶ關離宮において始めてお目にかゝつた際も、直にアンダーソン氏の發見と學說とを如何に思ふかと尋ねられたことによつてもこれを窺知することが出来る。勿論その學說の細かい所においては、私どもにおいても一致しない處があるにせよ、アンダーソン氏の發見の大なる意義については、世界の學者の誰人も承認するところである。

六

殿下は日本の巡遊を終へて、朝鮮の慶州、京城、平壤を見學し、奉天から北京へ直行せられるとのことである。今日支那の状態は、殿下をして支那内地の諸遺跡を親しく踏査せられる機會を妨げてゐることは、洵に殿下の遺憾とせられるところのみならず、考古學徒の一人として私共も御察し申し上げるところであるが、せめて日本朝鮮の各地において、出来るだけ充分にその御見學の目的を達せられんことを祈るのである。我々はかくの如き至純なる學術的目的を以て、日本を巡遊せられる最初の北歐の「プリンス」を歓迎するに、至純なる學徒の心を以てし、無用の形式と虚禮とが殿下

を迎ふる際に打破せられ、殿下が最も愉快なる記憶を永久に日本に止めて、歸國せられんことを望んで已まないものである。しかしてその結果は知らず識らず日本の社會の各方面にも影響し、又日本の學界、特に考古學界がこの「ローヤル・アーケオロヂスト」のために、深大なる刺戟を受くべきことをも期待する次第である。(大正十四年九月)

虎子

虎子と此處で云ふのは虎の子では無い。『西京雜記』に漢朝玉を以て虎の形を爲り便器となし、侍中をして之を執らしめ、行幸の時に從はしめたとある便器の虎子である。何故便器を虎の子と謂ふかと云ふに、漢の李廣が虎を射殺し、其の髑髏を以て枕と爲し、又銅を以て其の形を鑄て、之を便器と爲したといふ故實から起つたと『文昌雜錄』に書いてある。兎に角之を見ても支那では漢代には已に此の便器が用ゐられて居つたことが證明せられる。勿論人間が生れ落つると、直に便通をするのは當然であるが、野蠻未開の時代では、野外にやり放題、特別に便所を造つたり、便器を使用するに至つたのは、餘程人文の進んだ後のことである。此の點から見ると、希臘クリト島のクノソスの宮殿に、紀元前千八百年も古くから、今日の西洋流の水洗便所チーク・クロセツトの設備があつたのは、我々現在の日本人が聊か恐縮する次第である。それは扱て便所なるものは便器が固定して出來たもので先づ第一に游動的便所たる便器が、上流社會や病人老幼の社會に行はれ始めるものに違ひない。支

那の如く高度の文明が早く開けた處では、虎子の名の起つた漢代以前、已に三代の昔から便器が出来て居つたと想像せられるのであつて、『周禮』に玉府が王の燕衣その他藝器を掌るとある藝器は即ちそれである。『戰國策』に趙襄子が智伯を殺し、其の頭を以て飲器と爲したとある飲器は、實は溺器であると云ふ凄じい説さへある。

二

扱て漢代の虎子なるものが一つでも今日遺存して居つたら、それこそ虎の子の如く大事にせられる骨董品であるが、不幸にして未だそれらしいものを見たことが無い。併しかの漢代の陶器を研究したラウフェル氏の書物には、虎の形はしてゐないが、綠釉のかゝつた壺で、捉手と短い口の附いたものを挙げ、恐らくは漢代の便器であらうと云つてゐるし、又た鳥居博士が曾て滿洲で發掘せられた土器の中には、豚形をした壺で、矢張大きな口と捉手のあるものがあり、是れまた其の形の上から、豚子と呼ぶ可きであるが、其の用途は同じく虎子の類と見ることが出来る。して見れば支那のものでは無いが、小亞細亞のトロヤの遺跡でシュリーマンの發掘した同様の動物形土器も、略ぼ其の用途を推察することが出来ると思ふ。

漢代以後の古い虎子に就いては、且つて一向調べたことは無いが、現今の支那では勿論男女とも

之を使用するのであつて、口の狭いのは男、平たい器は女子のものとして、中には美しい彩色模様を附けた陶器製のものもあることは、件のラウフェル氏の本に漢代の古器と比較して擧げてある。一體虎子の様な不潔な用途を有するものは、却つて綺麗に造る可きであつて、さうすれば床の間に飾つても差支は無いのである。従つて文字の上にも清器などと反對の文字を使つてゐることは『倭名類聚抄』などに見えてゐる。

日本では現在一般社會に於いて、病人や老幼の外は、殆ど此の虎子の類を使用しないが、昔は「シノハコ」、「オホツボ」などと云つて、少なくとも王朝時代には用ゐたもので、『延喜式』には「虎子一合料漆一升四合」などとあり、當時は主として朱漆の器であつたらしいが、彼の古墳墓から出る横口壺と稱する祝部土器は、其の形から考へると、或は此の虎子の類であつたかも知れない。近頃は小兒の便器を「オマル」と云ふが、此の「マル」は日本紀などにも見える「尿マル」、「屎マル」の「マル」であると云ふ。朝鮮では現今も一般に白い陶器、或は眞鍮製の圓い器を用ゐ、これを「ニョーチャング」と云つてゐる。西洋には希臘羅馬の古物は知らないが、中世には便器の汚物を二階の窓から、往來へ投げかけてゐる木版の戲畫などがあるから、随分古くからあつたものと思はれる。

三

併し虎子の話を斯う云ふ風に鹿爪らしく書くのは、必しも私の本意で無い。たゞ何分にも少々尾籠な品物であるから、臭器止めの代りに一寸書き出したので、實は本文は之からである。

私は子供の時に「オマル」を使用さゝれて以來、久しく大病にも罹つたことが無いので、此の至便な器を使用した記憶が無かつた。處が十五年前一朝にして倫敦の下宿住ひの身となつたのである。然るに此の下宿では生憎便所が私の部屋の附近に無いので、別の階^{フロア}まで夜中に出かけなくてはならない。勿論西洋の家は、日本の様に吹きさらしの廊下へ出る必要はないが、それでも可成面倒なので、或る日私の宿へ訪問せられた先輩——日本に於いても先輩であり、西洋生活に於ても先輩たる——に、此の面倒を訴へた處が、「君ベットの枕元にある箱を見給へ」と言はれて、開けて見ると手の附いた平たい壺がある。これが夜分に使用する「ヂヤグ」で、即ち「ナイト・ポット」(夜壺)であることを始めて知つた私は、西洋人の賢明を感服する外はなかつた。而して之に關する注意が、西洋人の作つた儀式作法の書物に書いてないことを、残念に思つたのである。

併し次に起つた心配は此の夜壺を使用した後の始末である。何となれば私の部屋を掃除に來るのは、下宿の下女である。下女でも西洋では尊敬す可き婦人であるから、之に件の壺の始末を托することは甚だ無禮であると私は考へた。そこで毎朝早く人の起き出でない時分に、自分で始末したのであつた。其後前の先輩が又やつて來られて、「どうだ近頃は便利になつたらう」と云はれて、實は

其の後始末に弱つてゐることを話すと「世話のかゝる人間だな、それは女中がチャンと始末する事になつてゐるのだ、何も遠慮することは無いよ」と言はれて、始めて西洋にも貴婦人^{レディ}でない女もゐることに安心したが、扱て其後女中が部屋を掃除する時に居合はして見てみると、件の「ナイト・ポット」を拭く其の雑巾を以て、洗面器を拭いてゐるのである。これにはスツカリ驚いてしまつたが、これ亦西洋では一向平氣なものであると云ふことを、又た先輩から聞かされて最初は呆れてしまひ、次には觀念してしまつたことである。

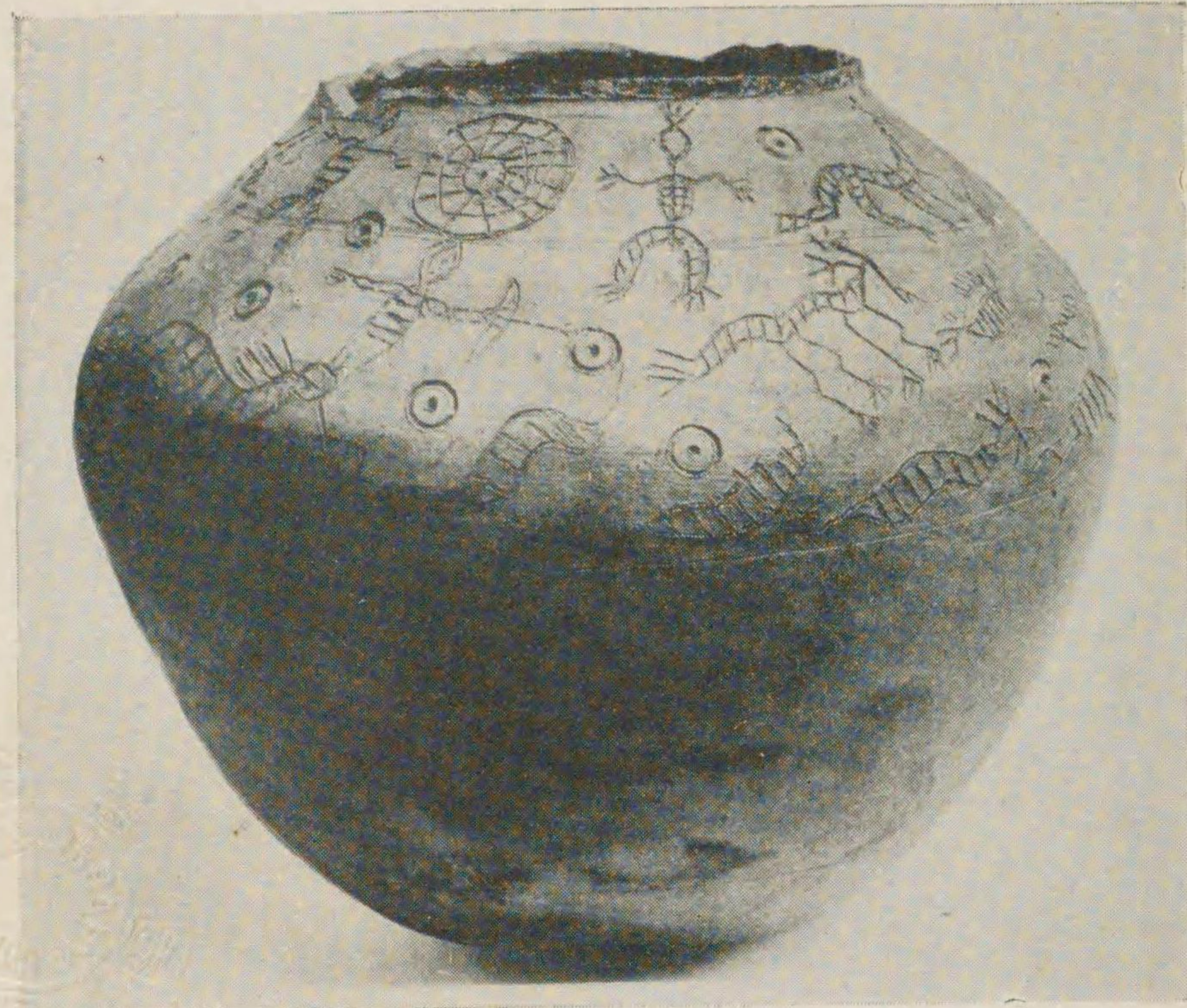
四

三年の西洋留學は私に色々な學問をさせたが、其のうち重要な事柄の一は、夜分に此の虎子を使用する習慣であつた。冬の夜半夢破れて眠をなさなない時、一寸後架へ行つて來れば、定めし後の眠が安らかであらうと思ひながらも、日本の寒い厠と、そこまでの道中を考へれば、忽ち勇氣は阻喪してしまふ。況んや二階住ひの場合に於いてをやである。而して曉に至るまで褥中に煩悶する經驗は、我々日本人が萬人とも等しく有する所であると私は信ずる。之を救済する道は併し簡單である。たゞ一箇の虎子を用意すれば、凡ての問題は解決するのである。

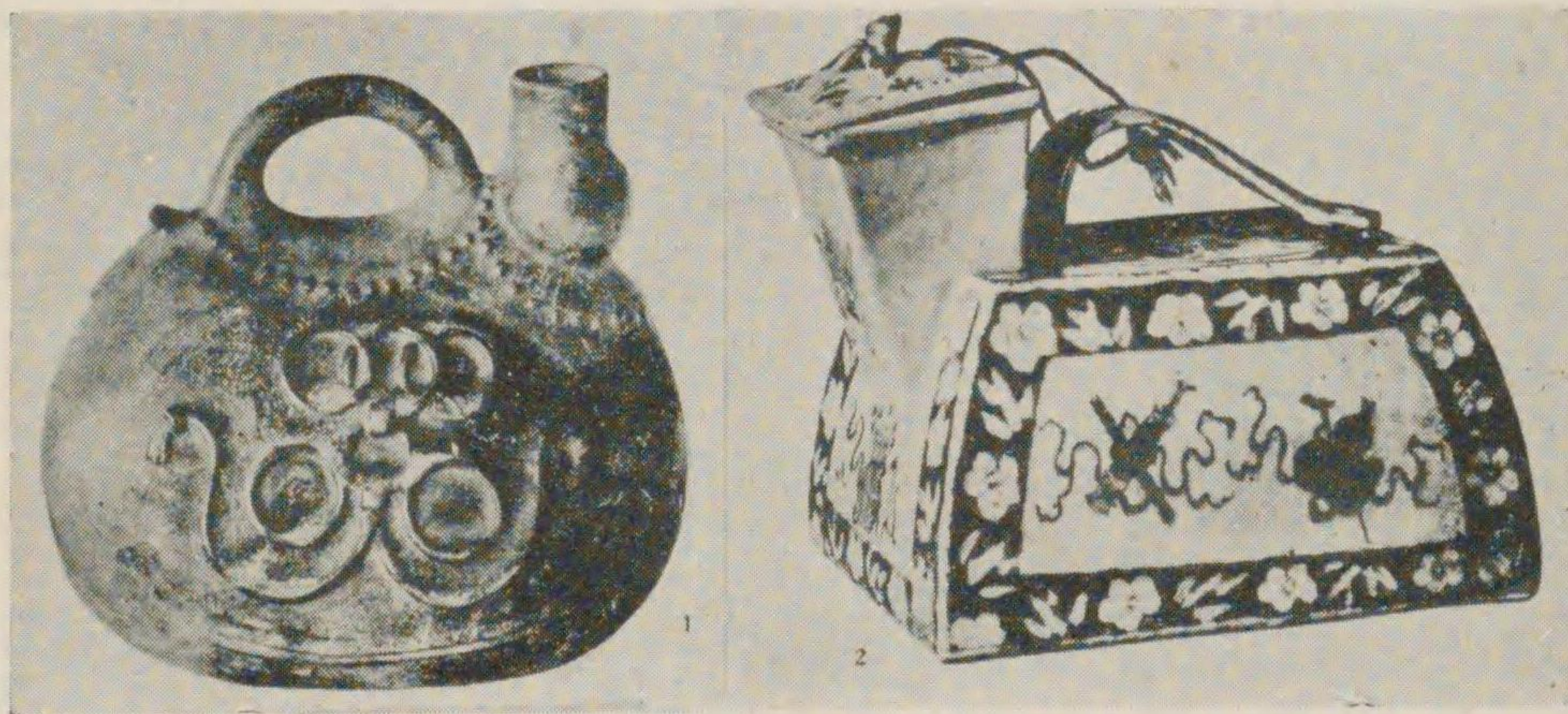
私は西洋から歸つて來て、間もなく朝鮮を旅行した。而して朝鮮婦人が、毎日川邊で洗濯をする

際に、楊柳の蔭に之をも掃除してある景色を見ては、朝鮮の家庭に萬遍なく行はれてある虎子の使用を羨むの外なかつた。何故に日本人は此の至便の器物を用ゐないか。若しそれが所謂日本人の潔癖から來るとすれば、實にこれ程愚直なことは無い。何故に少くとも朝鮮に於ける日本の旅館は、先づ此の至便の器を採用しないか。それでは朝鮮の同胞は到底日本の宿に落付くことは出来ない。其の結果は日鮮融和の道にも背くこととなる、と云ふ様な議論を友人と戦はずことゝなつたが、或時終に慶州に滞在してゐる間に、私は朝鮮の友人に案内して貰つて、市日に眞鍮製の虎子を買ひに行かうと決心したが、その友人は『朝鮮人間にも近頃は段々之を使用しない様になつて來たのに、君は何故そんな野蠻なものを買はれるか』と忠告して呉れたが、私はこれ程文明の利器は無い。その證據には君等が崇拜する西洋人が常用してゐると云ふ事實を力説した處、漸く安心して私の依頼に應ずることゝなつた。

然るに市日には不幸にして丁度私が欲しいと思ふ小形の品がなかつたので、手を空しくして宿に歸ると、或る人の曰くには、それは雞林附近に銅器を製作してゐる處があるから、其處へ行つて探すが宜いと教へて呉れた。そこで私は南山へ水晶取りに出掛けた日の歸りがけに、此の疲れた揚句虎子買ひでもあるまいと云ふ、嫌な顔を見せた丁君には聊か氣の毒であつたが、銅器製造所のある田舎へ廻り道をした。



慶州皇南里古墳發見彫畫壺



漢代陶器虎子

近世陶器虎子

成る程其處では村人が黒くなつてあらゆる銅器を作つてゐた。黒い砂型から取出した粗造のものを轆轤にかけてゐる間に、美しい金色の器物が金屑の間から段々現はれて来る。併し此處にも亦た私の希望通りの小さい虎子が見つからない。私は頗る失望の體であつたが、せめて銅器製作の實況を見た丈けが獲物であると思つてゐると、折柄此處へ來合せた一人の老人が、自分が丁度私の欲しいと思つてゐる虎子を持つて居る、而かもそれは此の間買つたばかりで一度も使用してゐない。自分の家はこれから慶州へ歸る道の皇南里にあるから、一緒に來れば譲つてやると云ふ。それは幸と私は不精々々に同行して來たU君と共に、老翁の家に、出掛けることにした。

五

私達は皇南里の一軒の田舎家へ辿り着き、大切さうに白布に包んだ真鍮の虎子を老翁から受取つて、それが丁度私の欲しいと思ふ大きさのものであるのを喜んだ。而して要求する丈の價を取らせだが、老人頗る自慢の體で、其の真鍮の色が少し白味を帯びてゐるのは、金質の一番上等な所以であるといふ様なことまで詳に講釋をして呉れたが、庭上に立つてゐる老媪は、不時に起つた不思議な賣物と買手とに聊か呆然たる氣味であつた。

私は遂に重大なる目的を達して、件の虎子を大事に抱へ込んで、慶州の宿へ歸へらうとしたが、

フト庭先きを見ると、大きな新羅焼の壺が一つ置いてある。なほよく見ると其の上には無數に鳥獸や人物を原始的な篋描きにしてあつて、私共が今迄見たことのない珍しい新羅の陶器である。老人に是は何處から出たものだと聞くと、丁度家の後ろを掘つて、積石の間から他の陶器と一緒に獲たものであると云ふ。之を一つ譲つて貰へまいかと單刀直入に切り出すと「お安いことであるが、口の縁が少し壞れてゐるので、一圓五十錢位では高くはないでせうか」と云ふ。それで結構々々と早速一圓五十錢を支拂ひ、老媪には別に駄賃をやり、頭の上へ載せて宿まで運んで貰ふことにした。眞鍮の虎子のことは最早スツカリ忘れてしまひ、——持つて歸へることだけは幸ひ忘れなかつた。

——、U君の不平顔もいつしか笑顔に變つて、私達は老媪の後先きになつて宿へ急いだ。

此の一圓五十錢の壺は、現在××大學の陳列室に飾られて、古い新羅時代の陶器中最も豊富な繪模様のある逸品として、朝鮮本土にも、日本の何處にも之に比敵するものを見ないと云ふ貴重なる標本となつた。慶州の考古家は、そこそこ大分以前から噂を聞いて、自分等が探して居つた壺であると残念がつたが、それ丈け私達の誇りと喜びとは大であつた。而して件の眞鍮の虎子は、爾來私の寢室に飾られて、如何に私の睡眠を安らかにして呉れるか知れない、大切の品物となつたのである。

虎子を探し廻らなければ、此の虎の子にも比す可き貴重な壺は獲られなかつたのである。或る人は其大事な壺も、昔は小便壺であつたかも知れないと、ケチをつけるかも知れないが、それは私達

の敢て關しない所である。たゞ此の天下一品の新羅の古壺を、手に入れた因縁を書き留めて置き度いばかりが、此のキタない虎子の話を持ち出した理由である。(大正十五年九月)

虎子の知識

夜壺を虎子と稱することを、私が如何にも前から知つてゐる様に見えるが、實は此の文を書く僅か数日前に知つたのである。一日例の攻學に熱心な能勢君が訪ねて來られて、近い内同君の家に御目出度があるとの事で、今年は寅年であるから、それに因んで子供の名を附け度いとの話である。イヤそれでは男ならば虎雄、女ならば虎子とでもお附けですかと訊すと、同君は虎子だけは禁物です、それは支那では便器の事ださうですと言はれて、始めて私は一つ物識りになつたのであることを此處に白狀して置く。

「果して」又「意外」

一

是は九州は筑前直方の宿屋での話である。

直方と云ふ町は知らない人が多いと思ふ。石炭山に關係のある人か、自分の生れ故郷でなければ普通にはメツタに用事が無い此の筑豊線の小驛は、私自身も此の話のあつた時に、始めて其の存在を知つたのである。

併し私は石炭關係で此處へ行つたのでは無く、矢張り此の直方の少し南にある鹿毛沼と云ふ處に、極く古い時代の所謂神籠石と稱せられる遺蹟を見る爲めに出かけるのであつて、時間の都合上其の日は直方で逗留し、荷物を置いて次の日の朝其の鹿毛沼へ往復することにした。そこで私は汽車に乗り降りの便利の爲めに、停車場の直ぐ向ひの小さい宿屋を選んで、それへ飛び込んだのである。

此の宿屋の名前は何と云つたか、最早忘れてしまつたが、何でも階下に驛賣りの食料品や菓物を賣つてゐる家で、其の階上だけが客室となつてゐる。先づ店先きに這入ると、島田か何かに結つて

白粉をコテ〜と塗り立てた若い女中が出て来て、部屋へ案内して呉れたが、先づ小料理店の酌婦か、今日で云へば下等の「カフェー」の女給と見る可き風體であるので、私は是れは少々シクジつた。少し遠くても、モット上等な宿屋へ行く可きであつたと、早くも後悔したのである。

併しどうせ一泊の事ではあるし、又今更遁げ出すことも出来ないで、私は其の女の御給仕に恐縮しながら、夕飯を濟まして、夏の事であるから、早々蚊帳の中へモグつてしまつた。

二

寝てから幾時間立つたか、私には分らないが、一寝入りをした時分に、私はフト眼を覺した。何故に眼を覺したか、よくは分らないが、誰か私を呼び起こしたらしい氣もするので、寢ぼけ眼をこすりながら、蚊帳の中を見廻すと、實に私は吃驚りしてしまつた。薄暗がりの間にも、ボンヤリ其處に白い人間の姿が見えるではないか。而かもそれは女の姿である。始めて店先きで見えて以來、夕食の時以來、私を不安ならしめた化性のもと思つた女の姿である。果してそれが己に私の蚊帳の中に這入つてゐるのである。

私は此の瞬間總身冷水をあびた如く感じた。スツカリ眠氣も醒めてしまひ、床の上に坐り込んでつく〜と女の姿を見ると、不思議や浴衣の上にもチャンと帯を締めて、別にダラシない風體でも

無いので、聊か安心をすると、女も行儀善く私の傍へ坐つて、扱てヒソ／＼と私語をするのである。『妾は主人の言ひ付けで、お客様に一寸御注意に参つたのです』と云ふ冒頭を置いて、さて何を言ひ出すかと、極度の緊張をしながら、耳を澄まして聞いてゐる私は、實に次の様な意外なことを聞いた。

三

私が寝てから、遅く終列車で一人の客が此の宿屋へ飛び込んだのである。それは一間おいた次の部屋に這入つてゐる。——私と而も其のお客様が今晚此の宿屋のお客様の全部である——處が此のお客様は人相風體がヒドく悪い上、剩へ顔には生傷があつて、何うしても強盜か、人殺しとしか思へないので、店の者も非常に心配して、スツカリ用心をしてゐる。それで私にも特に注意する様に、又た大切な品物があれば、店の方で預かるから渡して呉れと云ふのが其の話の要領であつた。

此のヒソ／＼話を聞いた私は、女を蚊帳の中で見出した瞬間の吃驚とは、全く別種の驚愕に打たれたのである。たゞ私は女に親切を謝しながらも、別に大切なものも無い——實際鞆の中は汗に汚れた洗濯物ばかりで、旅行の終りであるから、殊に懐中には數へる丈けしか金は残つてゐない——から店へ預ける必要もないと云ふと、女は『どうか折角御用心』をと云ひながら、スーツと蚊帳から脱

けて行つた。

四

眞暗な蚊帳の中に一人残された私は、眼も心も冴え切つて何うしても眠られない。耳を欹て、向ふの客の様子を窺ふと、切りにウナされて獨り言を云ひつゞけてゐる。私は咳嗽ばらひをすることも出來ず、便所には行けず、乾いた咽喉に唾液を呑みながら、床の上に輾轉反側する外はなかつた。さて今は何時頃であらうか。昨夜は早く寝たから、未だ夜半の一時か二時らしい。早く夜が明ければ宜いのに、やがて三時、四時の時計が階下から聞こえる。

曉方私は草疲れていつしか眠に落ちた。而して朝早く出發の豫定は、意外の朝寝の爲めに番が狂つてしまつた。顔を洗ひに店先へ降りると、かの客人はモウ朝早く出發してしまつたので、主婦や女中の間に其の評判取り／＼、先づ私が何の事もなく無事であつたのを祝して呉れた。

私は漸く晝前に鹿毛沼へ出かけることゝなつた。而して神籠石の上に立ちながら、さて夢の様な昨夜の出來事。先づ「果して」と心配して、次には又「意外」の驚愕。世にも珍らしい人世の「エピソード」は、矢張り驛前の安宿でのみ拾へる獲物であつたことを喜び、獨り微笑む外は無かつた。汽車に乗ると昨夜の寝不足と疲勞とに、たゞウト／＼と華胥の國に遊ぶ。眼を覺まし新聞を買ひ、

「果して」又「意外」

人殺し、強盗の記事を探がして見たが、別にさう云ふ種も出てゐない。而して何處の驛にも呑氣さうに巡査が立つてゐるのが見える。

是は筑前直方の宿屋で、十七八年前の夏の旅の話である。(大正十五年九月)

北歐の旅

一 丁抹へ入る

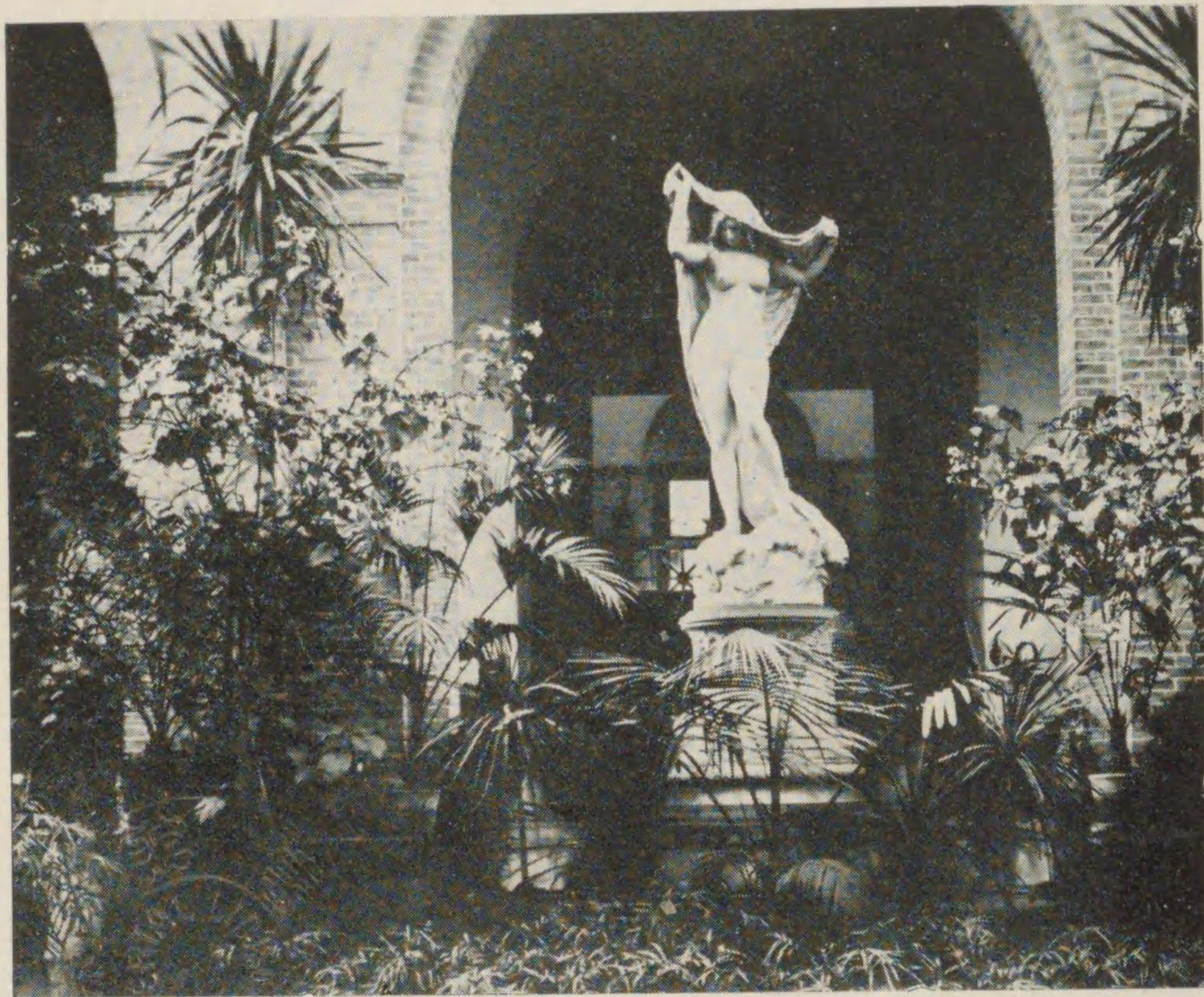
ベルリンのステチン驛を親しい人達に送られて、デンマークからスエーデン、ノールウエーとスカンディナヴィアの旅に上つたのは十一月の十一日。今までは大抵同行の友人が都合よくあつて、旅の淋しさを免れたが、今度はたとへ半月にも足らぬ間といへ、言語不知の國々への獨り旅と思へば、多少の心細さを感じざるを得なかつた。夜半渡船の上の夢破れて暫らくは眠りをなさず、いつしかまどろんで次に眼を覺ました時には、列車は早やデンマークの陸にあげられて、降りる仕度をしなければならなかつた。曙光ほの見えて、夜色なほあけやらぬ六時過ぎ、口嗽ぐ暇もなくコーペンハーゲンーの驛へ着く。かねて梅原君から聞いてゐた『コスモポリテ旅館』といふに急げば、玄關に迎へた眠たげな番頭に引きかへて、一人の女中は甲斐々々しく膝を地につけて床敷を拭いてゐる。三階の一室に落付いて一風呂あび、一寝入りして起出でると、嬉しやドイツで久しく見なかつた麗かな日光が、青空を通して輝いてゐた。デンマーク語はどうせドイツ語に似てゐるだらうと早合點を

して、『フリユウ・スチユツケ』といつて朝食を命ずると、女中は『ヤー』と返事をしながら、やがて持つて来たものは『マツチ』一束。これも私の如き煙草黨には朝食以上の必需品ではあるが、心中密かに苦笑するほかはなかつた。キマリが悪いので若干時をおき、今度は『カフェー』といつて、始めて朝食にありついた。

さてコーベンハーゲンの都で先づ何を見やうか。国立博物館、彫刻館、美術館と色々あるが、今はすでに冬の季節に入つて、これらの場處は何れも午後でなくては開かれない。それゆゑたゞ一つ午前から見ることの出来るトルワルゼン記念館へ行くほかはない。宿から近いコンゲンス・ナイトロフの廣場へ出で、王立劇場の嚴めしい建物を望んで、ホルメンス・カナールの曲つた通りを西へ進むと、堀割の向ふに宏莊なクリスチアンボルグの宮殿が聳えてゐる。その左手にはベルゼンの長い棟が、青銅の尖塔を幾つとなく突き立てゝゐる。これはオランダ復興期の建築様式であるといふが、何となく東方の趣がある。

日は輝いても、さすがに北歐の十一月は寒い。朔風は烈しく空を渡つて、厚い外套も重からず、ブロンドのデンマークの女は毛皮に深くくるまつて、深い靴を穿つてゐるものさへ少くない。

二 トルワルゼン記念館



コーベンハーゲン府ナイ・カールスベルグ彫刻館と其中庭

クリスチアンボルグの島、宮城の西北に重厚なギリシヤ式の建築が、寺院の如くドツシリと立つてゐる。これこそ北歐の彫刻家の随一として、十九世紀の初葉に生れたトルワルゼン (Beriel Thorvaldsen) 其人の一代の作を網羅した『ミュゼウム』(Museum) であると同時に、彼の遺骸をも葬つてある『モウソレウム』(Mausloeuum) である。この記念館の外壁三方には、彼が千八百三十八年ローマから故國に歸つた時に、歓迎せられた光景を繪巻物の如く描いてあるが、その調子は何となくエトルスキ風であり、凡てがこの古典主義の彫刻家の記念館として、いかにも應はしく出来てゐる。彼の墓は中庭の真中にたゞ低く草を植ゑたばかり、何らの碑も像もないのはなかくに床しい。

この館の階上階下四方の廊室に並べてある彼の三百數十點の作品とその模造について、いま一々記す違を有しないが、彼の優美なる「クラシツク」の様式は、餘りに平靜であつて、斯くの如く一堂に並べて通覽すれば、特にその單調人を飽かしむるものあるを免れない。また肖像類は彼の長とするところではなく、古典的の題目以外の基督教的の彫像に至つても、むしろ失敗のものが多と思はれるが、神話的譬喩的の浮彫においては、彼の優雅なる手法と相まつて、實にトルワルゼンの獨壇場といふべきであらう。彼の有名なる『朝』と『夜』の優しい圓板に私が親しんで以來、すでに幾年を経たであらうか。またその複製模造が彼の名を知らない人々の間にも、如何に廣く喜ばれてゐるか。私は今までのあたりその原作の前に立つて、懐しさに立ち去り難いものがあつた。

館の二階にはトルワルゼンの蔵書、蒐集のギリシヤ、ローマの古物や繪畫の類が陳列してある。此等は彼の趣味攻學の状態を窺知するに宜い材料である。繪畫のうち特に私自身に取つて面白かつたのは、彼自身(?)の畫に『ドルメン』を描いた風景畫が二枚あつたことである。これは如何にもこれらの巨石記念物の多い、スカンヂネヴィヤ地方の特徴を示してゐるではないか。

三 ナイ・カールスベルグ彫刻館

トルワルゼン館は始めてデンマークに生れた彫刻の巨匠の記念廟であるが、彼の出現によつて刺戟せられて彫刻に對するデンマーク人の趣味は高潮せられ、遂に近代彫刻の一大聚集として、全世界にその類を見ない大彫刻館『ナイ・カールスベルグ・グリプトテーク』(Ny-Carlsberg Glyptothek)をコ府に見出すに至らしめた。そも／＼この館はこの市の近郊ナイ・カールスベルグの大醸造家カール・ヤコブセン(Carl Jacobsen)夫妻が、その聚集品と共に多大の資金を國家に獻贈して出來たもので、その内容といひその建物といひ、歐米諸國を通じても、これほど立派な彫刻館を私は見たことがない。その各室の採光豊富であつて、陳列の宜しきを得たるはいふまでもなく、殊に中央の大「コロト」は高い硝子天井の下に、植物の温室の如く熱帶植物の鉢を置き、緑したゝる木蔭に、眞白の彫像や噴泉が幻のやうに立つてゐる美しさは、この北歐の天地に常夏の天國を出現したかの如く疑は

しめる。

館の前部は近世の彫刻を容れてあり、こゝはトルワゼンの弟子ビッセン(Bissen)エリコウ(Jerich)の外、北歐諸家の作を主とし、シンディング(Sinding)の『囚はれたる母』の如き、寫真で馴染の傑作もある。またフランスの諸家ではフワルギエル(Falguiere)デュボア(Dubois)からロダン(Rodin)等に至るまで揃つてゐる。更に館の後部は古代の彫刻を集め、エヂプトからギリシヤ、ローマの作品はその數もなか／＼多く、價値の大なるものも決して鮮くない。殊にローマの肖像においてさやうに思はれた。階上には現代歐洲諸國の彫刻繪畫と、やゝ古い復興期の遺品を置き、地下室にはローマやエトルスキの古物研究家として有名であつたヘルビヒ(Helbig)の聚集品を藏し、エトルリヤの古墳壁畫の模寫を始め、考古學の方面から注意すべきものが頗る多い。たゞこの彫刻館は一時から三時までしか開かれないので、時間の都合が悪く、初めの日は僅かに三十分、最後の日にやうやく一時間の暇を得て、一通りの巡覽を済ますことが出來た。

館を出でて大通を北へ進むと、市廳(Rathhus)の宏大な建物が、賑やかな廣場を前にして立つてゐる。これは前世紀の末に出來たものではあるが、デンマーク復興期式の建築の一大傑作とも稱すべく、イタリーのフィレンツェの市廳に似て、更に二層豪壯を加へたものである。この外市の中央部で注意すべき建築に、フォル・フルーヘ寺(Vor-Fruerkirken)がある。その前面の破風はトルワルゼン

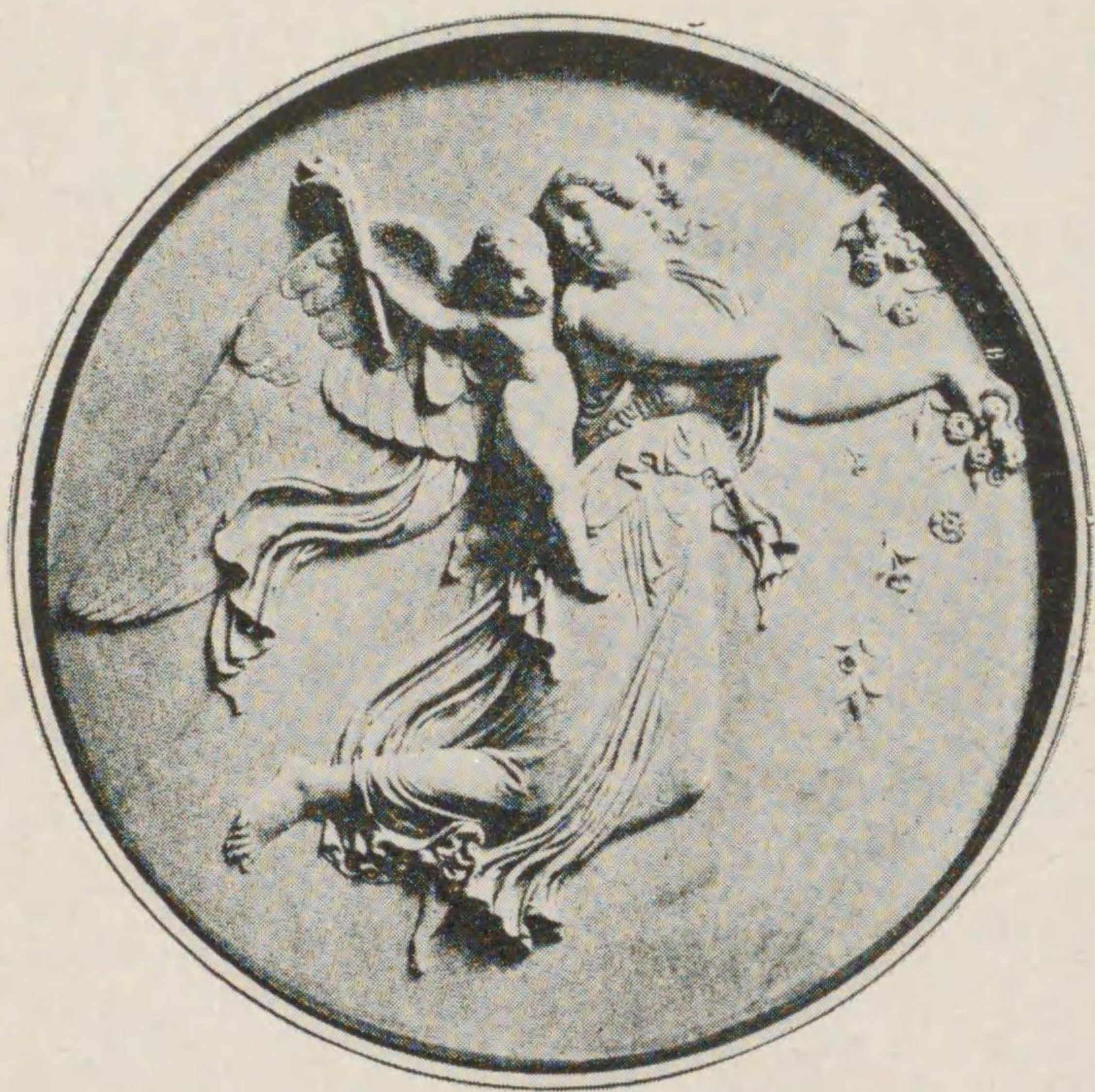
の群像をもつて飾り、大學の建物も直ぐその北に接してゐる。

なほ北の方エルステッド公園(Oersted Have)、植物園(Botanisk Have)と池と丘の美しい庭園を歩き廻つて、遂にローゼンボルグ公園(Rosenborg Have)に出ると、冬枯れの淋しい林の中には逍遙する人の姿も稀に、森のあなたに聳ゆる美しいローゼンボルグ宮の塔の上に、残んの夕ばえが僅に輝いてゐる。つと目の前にある銅像に眼を移せば、これこそハンス・アンデルゼン(Hans Andersen)その人の像である。彼の『即興詩人』さては童話を喜び誦じたことも、洵に中學生以來のこと、私はいま親しくトルワルゼンの故國、アンデルゼンの故郷の土地を踏みつゝあるかと思へば、獨り旅の身を忘れて、限なき懐しさをデンマルクの都に見出した。

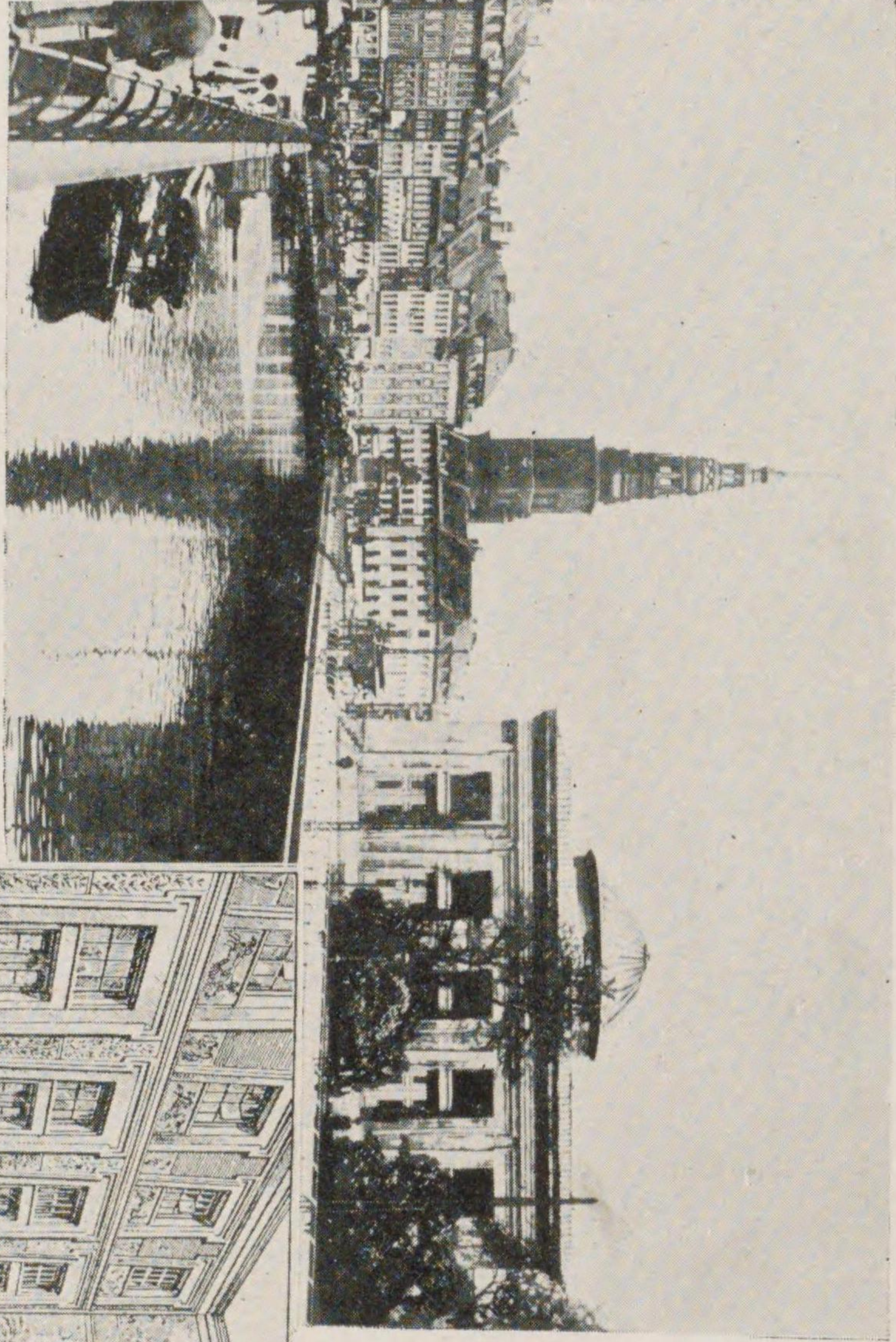
四 國立博物館

コ府において最も見るべき博物館の今一つは國立博物館である。これまた他の博物館と同様、冬の間は午後僅か三時間の開館なので、短い滞在の旅客に取つては凡て時間がカチ合つて都合の悪いこと夥しい。それ故どうしても朝から三時までを見物の時間に充て、へたくくに腹をすかして、三時過ぎ宿屋に歸つて中食をする外はない。

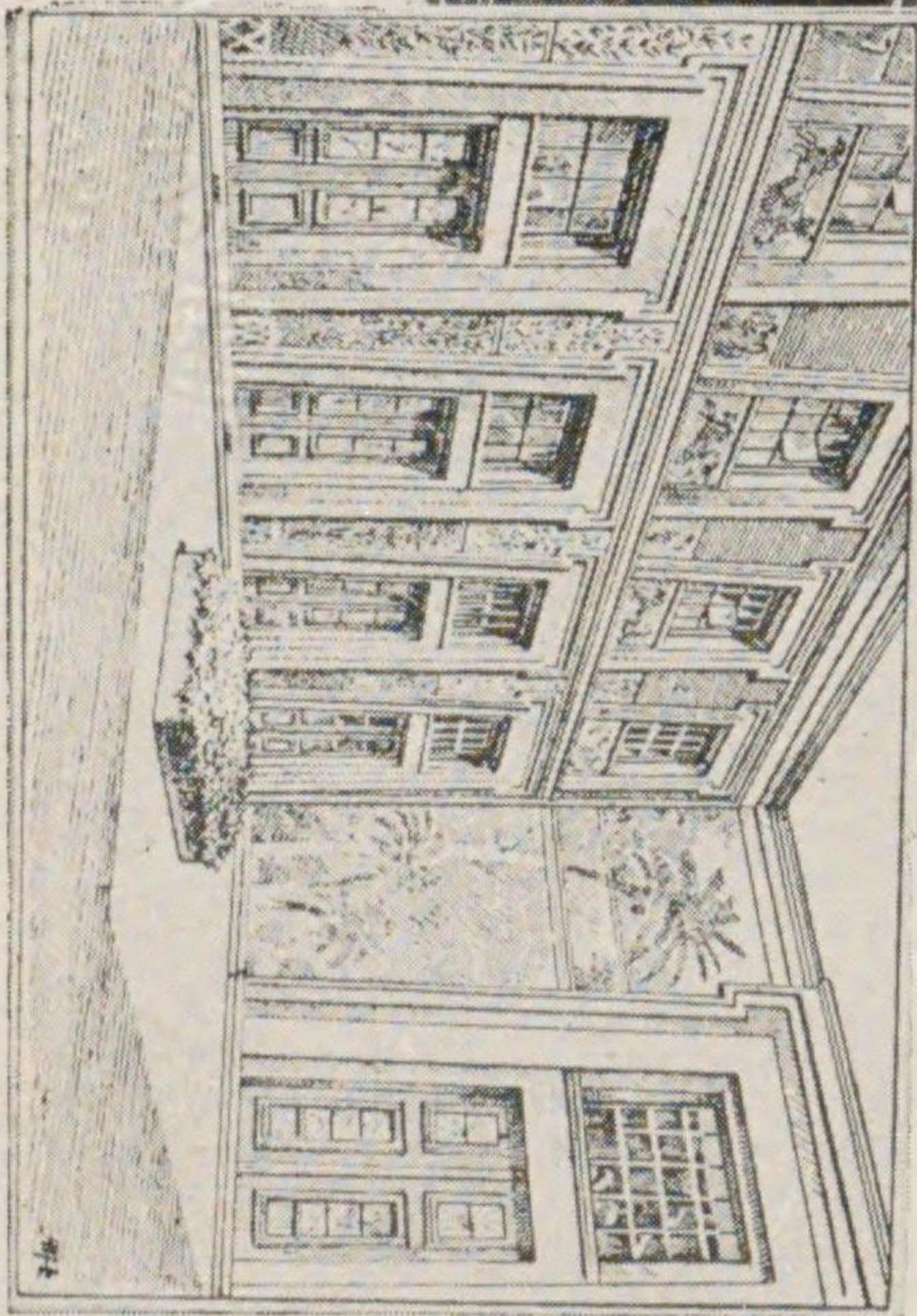
國立博物館は十八世紀の古い邸宅建築を利用したものであるから、各室狭少で採光の具合も甚だ



トルワルゼン作「朝」と「夕」浮彫圓板



トルワルゼン博物館



トルワルゼン博物館内庭の墓

不充分である。併しその内容に至つては、歐洲諸國の大博物館に伍して決して劣るものではない。殊に先史時代の遺物の聚集において然りである。これは固より理由のあることで、先史時代の研究は歐洲において、先づこのデンマルクの學者によつて始められたからである。

この博物館に安んぜられてあるトムゼン(Thomsen)の胸像と、ワルセー(Warsae)の記念碑とを見るものは、この二人の學者によつて、今日われわれが使用する人類文化の三時期すなはち石器、青銅、鐵の三時代の分類が創唱せられたことを思ひ起すであらう。而してその後に至つても更にソフス・ミュラー(Sophus Muelher)の如き大學者を出し、彼の手によつて遂に今日この館において見るが如き、完全なる聚集を現出するに至つたのである。ミュラー氏は今や老齡館長の職を辭して、マツケブラング氏(Mackeprang)これに代つたけれども、なほ壯者を凌ぐ元氣で、その研究を續けてゐるといふことである。

この博物館にはギリシア、エヂプト、シリアなどの古物をも多く藏し、就中ギリシアの古瓶には見るべきもの少くない。併し歐洲殊にデンマルクの先史時代の遺物の豊富にして整頓したる陳列は、獨り此處においてのみ見ることの出来る唯一のものである。中庭に移置せられてある新石器時代の二個の「ドルメン」を見て、奥の支關を這入ると、こゝから先史時代遺物の諸室が始まる。この國には日本と同じやうに、未だ確な舊石器時代の遺跡は發見せられてゐないが、新石器時代のそれ

に至つては極めて豊富であつて、これは貝塚を以つて代表せられる前期と、「ドルメン」古墳による後期との二つに分けられる。この兩期の遺物は狭い陳列室の中に高い棚を設け、處せきまで並べ立て、石斧の如きはさながら鯛を並べたやうに、相接して置いてあるのも面白い。なほ石器時代から青銅、鐵の時代に及び、或は大木棺、或は車輛或は大銀壺と、一々書き記す暇もないが、石器時代の後期農業をやり出したころの風俗を、大きな人形によつて復原してゐるのは人の注目を惹く。總じて模型を以つて復原し、一見素人にも具體的の知識を興へることに努めてゐるのは、西洋各國の博物館の長所である。

二階の一部には歴史時代特に中世の遺物、また二階と三階の一部には世界各地の土俗品を聚集してあるが、なかなんづくエスキモー人の土俗品は、流石にグリーンランドを領地としてゐる國だけあると感心させるものがある。日本支那の土俗品も僅少なから並べてあり、日本の石器類もそのうちにあつた。私は二度目にこの博物館を訪問した時館長に刺を通じ、石器時代の部長クエール (Kjaer) 氏に會つて、親しく案内説明を煩はし、大いに得るところがあつたのみならず、デンマルクへ來て以來殆ど無言で、たゞ眼ばかりキヨロつかせてゐた苦しさからも免れ得たのは嬉しかつた。

五 美術館とフレデリック寺

専門とはいひながら、私に取つても毎日博物館を見物するほど草疲れることはない。たゞ幸なことはデンマルクの博物館が、餘り大きくないことであるが、その數に至つてはなかく多い。今まで見物した三つの外に、なほ國立美術館、工藝美術館、民俗博物館などと案内記に出てゐるだけでも、到底その全部を訪ねる暇がないので、その内美術館 (Kunstmuseum) だけを覗くこととした。これは植物園の北隣りにあり、彫刻館に似た立派な建築で、前には美しい庭を控へてゐる。私は小雪のチラ／＼と飛ぶ寒い日曜の晝前やうやく時間を見出し、開館の時刻を待ちかねて館内へ這入つたが、暗い部屋のうちに靜かに近代の繪畫を鑑賞するのは、蓋し北國における冬の行樂の一つと見え、兵士や土地の士女も續々とやつて來た。

この美術館は階下にギリシヤ、ローマ及び復興期の彫刻の石膏模型を並べ、階上にはデンマルク及び各國の繪畫と少數の彫刻を置いてある。しかし此の國以外の繪畫では特に他の美術館で見られないやうな傑作は殆どなく、またデンマルクの繪畫に至つては、十八世紀以來現代に至るまでの代表作を網羅してゐるが、私の如き門外漢は多くその作家の名前さへ知らないものばかりなので、最近の作家のうちに、若干の面白いものがあると思つただけである。たゞ一つ手法も大して優れたものでなく、八號程の小品に、若い女が曇る硝子窓に指頭をもつて、徒然のあまり戀人の名を書いてゐる畫があつた。畫家の名は忘れたが、これだけがこの美術館において私の忘れ難い作品であつた。

コックと博物館通ひばかりに暮しては、コーペンハーゲン市の全體は分らないで終つてしまふ。それで一つ市中を大觀するために、高い處に登つて見る氣になつた。ベデカーを讀むと、これにはかのフォル・フルーエ寺の塔と、トリニチー教會の圓塔(Runde Tårn)と、フレデリク寺(Fredriks Kirke)の圓屋根の三つがよいとあるので、この最後の寺へ或る日の午前に行くことにした。これは十八世紀の末葉から着手して、十九世紀の後半に至つて完成したものであるが、青銅張りの大きな圓蓋は高さ二百六十三尺、内部の莊嚴はこの寺を一名『大理石寺』と呼ぶのを以つても分かるが、螺旋形の階段をあえぎ／＼登りつめると、青天碧海の間に大小の塔影參差して、コーペンハーゲン全市が「パノラマ」の如く眼の前に擴がる美觀は、確に登攀の勞苦を償うて餘りある。私は、「ドーム」の上を一周また一周、汗を拭ひ心臟の鼓動を休めながら、獨りこの大觀に眺め入つた。

この寺の東にアマリエンボグ(Amalienborg)の王宮がある。廣場の四方に全く同形の建物が四つ建つてゐるのは珍らしい。丁度十二時で番兵の交替があるので、私も暫くこれを見てゐた。大きな毛の帽子を被つてゐる兵士は、英國の近衛兵に似てゐる。なほ王宮から東北へ行くとランヂェリニー(Langelinie)の海邊の公園に出る。空氣は寒いが日光は強く輝いて、宜い氣持である。船の往來を眺めながら、靜に「ベンチ」に腰をかけて、愈々今夜スエーデンへ出發することかと思ひ入る。フトあなたを見ると、こちらへ歩いて來る男女の姿が二つ三つ、かなたへ消えて行く人影が一つ二つ。

六 瑞典の國都へ

コーペンハーゲンの中央驛を夕暮七時半の汽車に投ずれば、やがて列車は大きな渡船に積込まれる。夕食も船の食堂で認めて、スエーデンのマルモに着いたのは九時ごろ。海峡一つを隔て、大分寒いと見え、線路の上には夜目にも白く雪が積んでゐる。この寢臺車中に一夜を明かせば、明日の朝早く瑞典の都ストックホルムに着くのである。

スエーデンの皇太子同妃兩殿下が一昨年日本へ來遊された際、私は關西地方を御案内する一人として、遂に朝鮮慶州の瑞鳳塚の發掘まで御伴して、そこで御別れをした。その時佛國寺旅館で最後の御別宴に列すると、殿下は明年私が歐洲へ來るならば、是非スエーデンを訪問せよ、そして自分の宮殿に滞在せよと、いとも懇切なる御招きに預かつたが、私は宮殿の生活は私の如きものに取つて窮屈で辛抱がむづかしいことを恐れる旨を申し上げると、「イヤ、決して窮屈な思をさせぬから、豫じめ來遊の時期を通知せよ」とのことに、私は去年の七月日本を出發して、米國サンフランシスコへ着いた時、秋冬の交スエーデンへ行く豫定であることを申し上げた。

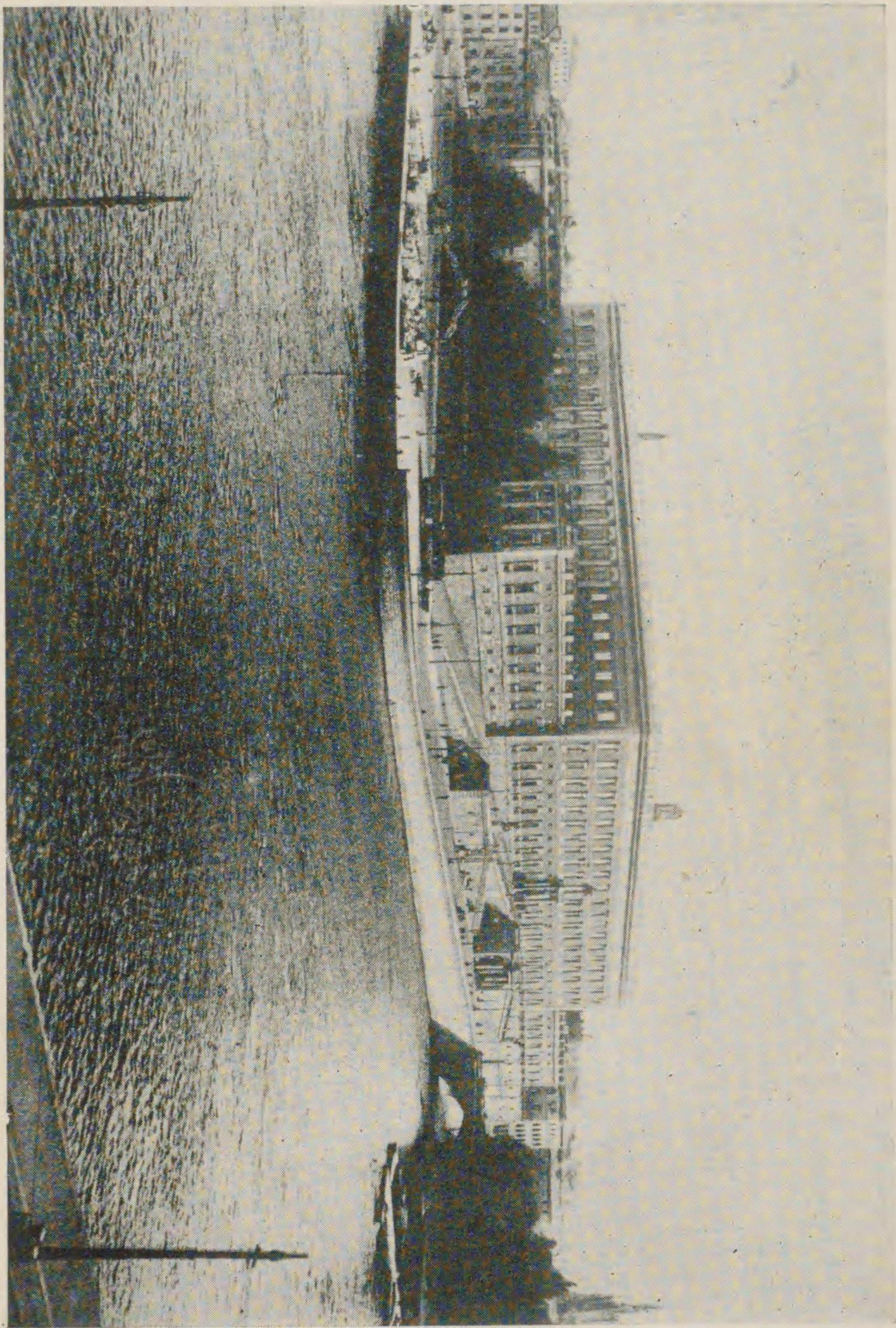
九月の末英國へ着くと早くも殿下の手書はロンドンに私を待ち受けてをり、自分は外國へ旅行をするが、十一月にはストックホルムへ歸つて來る。十日から十五日までの間都合のよい時に來るや

うにとある。私はそれでは十一月の十五日に伺ふ豫定にすると御答へをして置いたが、重ねて到着の時刻を知らせよ、自分の自動車を驛まで迎へにやると、かくの如き點まで注意をして親書を返された。

私は今この約に従つて、十一月の十五日の朝ストックホルムへ着かんとしつゝあるのである。私は私の一生において未だ曾て豫期しなかつた『皇太子殿下の御客』たるべき運命を得たことを非常に光榮とするのであるが、しかしそれには氏なうして將に玉の輿に乗らんとする小娘のやうな不安が伴はぬではない。元來我々は二週間位の旅行には、一つ位の鞆を手にして出かけるのが常であるに引きかへて、今度は四つの鞆を携へてゐる。その内に這入つてゐる禮服の數量が、同時に心配と窮屈の分量であることは、私のみならず私の友人達さへ想像してくれたところである。

併し旅に疲れた私は汽車中に熟睡して、七時すぎ眼を覺ましたころには、すでに首府の郊外に近づきつゝあつた。九時前遂にストックホルムの驛へ着き、車窓から頭を出さないうちに、東宮御所の仕人の如き人が私の部屋に這入つて来て、荷物の世話をしてくれる。車を降りると東宮武官某氏が私を迎へて、直に出迎への自動車に乗せて何方へか私を拉し去つた。

七 王宮のお客



瑞典ストックホルム府王宮

私はロンドンに居つた頃、支那古陶の蒐集家エウモルフオブロス翁から、翁が前年同じくスエーデン皇太子殿下の請待を受けて、郊外數マイル先のウルリックダールの離宮に客となつた話を聞いた。しかして翁は『何にも心配はいらぬ。全く窮屈な思をしなかつた』と私に言つてくれた。また私より先きにスエーデンへ行つた梅原君も、その離宮で晚餐に預かつたことがあつたので、私は多分そこへ連れて行かれることゝ信じてをつた。然るに、私の乗つた自動車はストックホルムの市内を通つて、直に橋の向ふに聳立する壯大なる王宮に向ひ、車はやがてその門内に進み入つた。武官の話に殿下はいまこの王宮にをられるので、私もこのうちの御客となることになつてゐると。

さてこの王宮は十八世紀の中ごろに出来上がった建築で、簡素にしてしかも力強い復興期の様式は、その規模の雄大なると、特にそのスターデンの島の高見に儼然と立つてゐることゝ相まつて、全歐洲の宮殿建築中最も立派なものの一であると稱せられてゐる。全體は四角形に近い平面を有しその大部分は皇帝陛下の宮殿として使用せられ、たゞ西北隅の一劃が皇太子殿下の御住居となつてゐるのである。

私は多くの衛士や召使の驚異の目と敬禮との間を過ぎて、先づ自分の部屋に案内せられた。是は「アントレソール」ともいふべき中階にあつて、階段や廊下を幾つとなく迂曲して行くので、二三度目にやうやくその道筋を覚え得たくらゐであつた。幸ひこの中階は天井も餘り高くなく、普通の家

ぐらゐである。二十疊ほどの寢室とこれに續く居室は、もとより大體フランス式の家具をもつて裝置し、壁面や天井は白色、床は深藍色の絨氈をもつて敷きつめ、周壁には現代畫家（オイゲン親王の筆かと思はれる）の水彩や油繪などを澤山掛けてあり。まことに居心地よく出来てゐる。たゞ古い建築でもあり、手洗場所は昔のまゝの水瓶を置き、水道のないのは却つて風雅であるが、室内は凡て中央暖房装置を施してあることはいふまでもない。西北に面した四角な窓から外を眺めると、この部屋は丁度ノールプロ（Norrbro）の橋を眼下に、國會議事堂を望み、『レヨンバックケン』（Lejonbacken）とて、千七百四年鑄造の獅子の銅像のある王宮への登り道の上にあつて、洵にこよない景色を楽しむことが出来る。

九時には朝食とて、私は急いで身仕度をして、階下の食堂に下つて行つた。この室は固よりフランス風に裝飾した壯麗な宮中の一部であつて、侍従武官の外女官ドラ・ガルー嬢も待受けてをつたが、間もなく殿下が出て來られて、私はこゝで初めて朝鮮で御別れして以來殿下に御目にかゝることになつた。（但し妃殿下はいつも朝食には食堂へ出られない）而して私の驚いたことは、紅茶「コーヒー」をはじめ魚卵その他の食品器皿が、食堂の一隅に用意せられてあつて、殿下を初め各自身に自分で「サーヴィス」することであつて、一切給仕人のをらぬことである。私は今まで安い下宿や宿屋にをつても、いまだかゝる経験がないので、食卓に着いてポカンとしてゐると、ドラ・ガ

ルー嬢が茶を入れてくれ、こゝでは自分の食べた後の皿の始末まで、自分ですることになつてゐると教へてくれた。また食後使用の手巾は殿下をはじめ、一同銀輪に挿し込んで再度使用するので、これまたむしろ意外であつた。この自分で食事の給仕をすることは、晝食の時も同様であつて、ただ晚餐の時のみ給仕人が出て來るのである。かくの如く私の想像してをつた宮中の生活とは、全く正反對であつて、奢侈贅澤の面影は藥にし度くでもないのである。

八 アンダーソン博士の聚集品

朝食が済むと殿下は、今朝ちやうどアンダーソン博士の支那將來品を中心とする、東亞考古博物館の開館式があるから一緒に行かうと、十時過ぎ自動車に陪乗して出かける。商科大學の三階なる會場には、早くも數十人の來賓が先着してゐる。私はこゝでアンダーソン博士（Anderson）をはじめ幾多の學者名士に紹介せられたが、先年日本へ來遊して舊知のシレン博士（Sjren）にも久振りに會ふことを得た。また妃殿下も遅れて來着せられ、この會場で來著の御挨拶を申し上げたことである。

この東亞考古博物館なるものゝ組織の詳細については、私は餘り深く聞かなかつたが、さしあたりアンダーソン博士が、支那河南甘肅等において蒐集した彩色土器などの遺物を、陳列研究するため出來たもので、これを中心とし之れを手始めとして、將來東亞の考古學の研究を、最も科學的に

やらうといふ抱負であるに違ひない。現在は商科大学の一部に借住居の體であるが、將來は勿論これに満足せず、特別の建築をも作るに至るであらうと思はれる。而してこの博物館、いな研究所の最も熱心なる「パトロン」は、いふまでもなく皇太子殿下であつて、それゆゑ殿下が昨日イタリーから歸られるのを待つて、その行啓を仰いで開館式を擧げたのである。而してこの機會において、アンダーソン氏の採集品を初め、シレン氏の聚集品等をも陳列して、會衆の觀覽に供することにしたのであるらしい。

アンダーソン博士が初めて學界に提供して以來、考古學者間の大問題となり、また一種の流行問題ともなつた支那石器時代の彩色土器は、先年北京大學等において少しく見たことであつたが、今やその最大優秀の「コレクション」を、親しく發掘者たる博士自身の説明の下に視ることが出来るのは、私の何よりも嬉しく思ふところである。大陳列室の中央には、多數の彩色土器を副葬した甘肅の一古墓をそのまゝ移置し、その他冨形土器、銅器、玉器等から殷墟發見品(羅振玉舊藏)などを陳列し、また殿下が日本御來遊の際自ら採集せられた千葉縣の貝塚土器や、獻上品のうち祝部土器その他考古學的標本をも並べてある。

次の一室にはシレン博士聚集の支那の漢六朝以來の佛像、銅器その他の美術品が多數に置いてあり、長い廊下の兩側にも銅器、鏡、武器等の小品を陳べてあるが、銅器は近年歐洲學者間に流行の所謂



ストックホルム王宮窓外所見

やらうといふ抱負であるに違ひない。現在は商科大學の一部に借住居の體であるが、將來は勿論これに満足せず、特別の建築をも作るに至るであらうと思はれる。而してこの博物館、いな研究所の最も熱心なる「パトロン」は、いふまでもなく皇太子殿下であつて、それゆゑ殿下が昨日イタリから歸られるのを待つて、その行啓を仰いで開館式を擧げたのである。而してこの機會において、アンダーソン氏の採集品を初め、シレン氏の聚集品等をも陳列して、會衆の觀覽に供することにしたのであるらしい。

アンダーソン博士が初めて學界に提供して以來、考古學者間の大問題となり、また一種の流行問題ともなつた支那石器時代の彩色土器は、先年北京大學等において少しく見たことであつたが、今やその最大優秀の「コレクション」を、親しく發掘者たる博士自身の説明の下に視ることが出来るのは、私の何よりも嬉しく思ふところである。大陳列室の中央には、多數の彩色土器を副葬した甘肅の一古墓をそのまゝ移置し、その他冨形土器、銅器、玉器等から殷墟發見品(羅振玉舊藏)などを陳列し、また殿下が日本御來遊の際自ら採集せられた千葉縣の貝塚土器や、獻上品のうち祝部土器その他考古學的標本をも並べてある。

次の一室にはシレン博士聚集の支那の漢六朝以來の佛像、銅器その他の美術品が多數に置いてあり、長い廊下の兩側にも銅器、鏡、武器等の小品を陳べてあるが、銅器は近年歐洲學者間に流行の所謂



ストックホルム王宮窓外所見

(青 陵 畫)

『秦式』と稱するものがその興味を中心をなしてゐた。又他の一室には床の上に大小數百の甘肅彩色土器を無雜作に並べ、足の踏み所もない中を、ア博士は往來して掬躬如として殿下に説明する。

私共は先づこれらの陳列品を概観するに止めて、やがて開館式の式場に行つた。これは大研究室の一隅を以て之に充て、殿下のやゝ長い御演説に次いで、文部大臣の祝辭があつた。何れもスエーデンの語であるから、私には何の意味かすこしも解らないが、察するにスエーデンが東亞考古學界における、大なる抱負と希望とを述べられたものに相違あるまい。

式が終り後妃殿下が歸られても、殿下は陳列品を見てなか／＼歸られない。私は一寸日本公使館へ行く用事があるので、日瑞協會幹事ブルセウイツ氏(Bruzewitz)と共に、一足先きに御免を蒙つたが、公使館から御所へ歸つて、一時の午餐の時になつても殿下のお歸りがないので、妃殿下は『どうせ古物に引きかゝつては、いつ歸られるやら分からないから、お先きに食ませう』と私どもと食事を始められてゐるうちに御歸りになつた。殿下は食事後二時になると、再び私を拉して同じアンダーソン博士の博物館に行き、ア、シ兩博士の詳しい説明を聽かれて後、ア氏と相談して私のストックホルムにおける一週間の日程を作られ、薄暗くなつた四時ごろ、二人で市中を徒歩して王宮へ歸つた。長身大軀の殿下の大股は、私をしてかなり隨行に苦しましめたが、御蔭で身體中が暖かくなつて、北歐の冬の夕暮も寒くはなかつた。